
ACE COMBAT 04

すずね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A C E C O M B A T 0 4

【Nコード】

N 7 1 2 1 J

【作者名】

すずね

【あらすじ】

彼が出会ったのは、メビウス1のコードネームを持つ男だった。エルジア軍によるサンサルバシオン侵攻より一年。東海岸の一部を除いて、大陸のほとんどはエルジアの支配下となる。ノースポイントだけがISAF参加国で唯一無傷のまま残されたが、それも単にストーンヘンジの射程外というだけのことだった。エルジアは島国へ逃げたこの敗残兵にとどめを刺すべく、大陸東部のリグリー飛行場へ爆撃機を集結し、ノースポイントをその射程にとらえていた。

一方ISAF総司令部はノースポイントで残存兵力の再編成を開

始し、まずは空軍を組織した。しかしそれは各戦線で生き残ったパイロットを単純に人数分けした組織でしかなく、同じ中隊の中に複数の機種^タの航空機が混在するなど、まさに寄せ集めの様相だった。

圧倒的な兵力差とストーンヘンジという制圧兵器の威力は、民間人にさえ知れ渡ってる。大陸ではノースポイント陥落は時間の問題とささやかれた。こののち「今回の戦争で間違いなく最高のパイロット」と評される英雄が現われ、大陸に希望をもたらすこと^を誰一人として想像できなかったとしても、それは無理のないことだった。しかし、彼は知っている。自分の隣で飛ぶ者が、本物の“英雄”であることに……。

元凶の襲来

東海岸、ノースポイントから東北に三〇〇キロ離れたノートチカ海域上空での要撃戦闘。

ISAFの残存戦力が集結しつつあるノースポイントに向けて進行中だった空母ノーチラスは、六機の戦闘爆撃機に追われた。

ノースポイント爆撃前に、集結する戦力を個別に殲滅するという、労力のいるエルジア軍の作戦だった。

ノーチラスのイージス艦ティーンが、SPYレーダーで戦闘爆撃機を捉えたのが二分前。

距離四二〇キロメートル、高度四三〇〇フィート、速度七〇〇ノット。

デフコン3発令から五分以内にノーチラスから発艦できたのは、ワルキューレ飛行戦隊のF-14の四機だけだった。

『AKV-HQからワルキューレ1へ。空母が狙われる、ただちに迎撃しろ』

甲板にはEG-18G電子戦機が発艦準備を進めている。

F-14のEWでは出力が弱い。

ワルキューレ1は編隊を組み迎撃インターセプトで飛行、空母からの敵位置情報を聞く。

『敵高度四二〇〇フィート、低空、Su-34の六機編成。撃墜を急いで下さい』

「ワルキューレ1、了解。各機迎撃用意、マスターアーム・オン。敵は戦闘爆撃機だ、対空ミサイルも搭載している、気を抜くな」

各機の了解の応答を聞き、編隊の間隔を開け、迎撃態勢を整える。

F-14の兵装は短距離ミサイル二発、中距離ミサイル四基を搭載している。対するSu-34は対艦ミサイル四発に、中距離ミサイル六発を搭載している。

問題はその対艦ミサイルの射程距離が、イージス艦に搭載された艦対空ミサイルより射程が圧倒的に長いということだ。

あと七分で接敵しないとミサイルを発射してしまう。

急ぎたいところだが、F-14の燃費は最悪だ。アフターバーナー全開で飛行してはすぐに燃料がなくなり、墜落。

元々は空母の護衛用艦上機で、長距離飛行には向かない。急げば急ぐほどこちらが危険になる。速度を上げて迎撃に向かっても、接敵する頃には、敵機は味方の空母を射程内に入れている。

『ワルキューレ1、電子戦機を上げる。イージス艦三隻が防御陣形を形成中だ』

イージス艦のレーダーはしっかりと敵機を捉えている。それでも艦対空ミサイルの射程距離外だ。

艦対空ミサイルの最大射程距離は五十キロ程度だが、向こうは二二〇キロもの射程を持つ。

「電子戦機はEW出力最大、敵に狙われるな」
『了解』

「相対速度が恐ろしく早い。シーカー・オープン、迎撃高度を維持。AKV-HQ、補足情報は？」

ワルキューレ飛行戦隊は中距離ミサイルの発射用意、正面から一発ずつ発射して、Su-34の攻撃進路を変える。撃墜できればよいのだが、回避行動を取られて着弾しない可能性もある。

『敵の射程距離まで六〇キロ。急いでください』

空母をやられては帰るところがなくなる、それだけは回避したい。ノーチラスは艦載機を空へと上げているようだが、今からでは間に合わない。しかし、ミサイルが着弾し、その時の被害を最小限に抑えるためには多くの機体を上げておく必要がある……それでも、空母がなくなれば帰るところはない。

ここから大陸は遠すぎる。

「レーダーに感、捉えた」

HUDのマーカーが敵機を捉え、点滅する。

射程距離まで十秒、九秒、八秒……サイドスティックを握る手に力が入る。

五、四、三、二、一……四機すべてほぼ同時にミサイルを発射し、ブレイク。敵が対空ミサイルを発射する前に降下し、AOA最大で機首を引き揚げて敵の背中に回る。

中距離ミサイルは高速で接近するも、運動性が低く、回避行動に遅れた二機に命中、四機がチャフ・フレアを散布して回避した。戦闘機とは比べ物にならない量のチャフだ。

「急げ、ワルキューレ2、対艦ミサイルを発射されるぞ」

ワルキューレ1と3がSu-34の背中につき、短距離ミサイルを発射して次の標的へと機首を向けるが、

「危険です、空母が敵の射程内に入ります」

ワルキューレ2、4がSu-34を捉えたが、機体下部から大きなミサイルが外れ、ノズルから火を噴いて二発が発射された。

「ミサイル二発が発射された、迎撃準備！」

『C I W S 最大、フアランクス、R A M の用意』

『ティートン、マルクス、バスタークは空母を守れ』

「ワルキューレ2が二機を撃墜した。戦闘性能を発揮する前に沈んだな」

と、ワルキューレ3が言う。

「馬鹿者、ミサイルが着弾して沈んだら俺たちも沈む」

とは言うものの、あのタイプのミサイルのホーミング方法は慣性誘導であり、S u - 3 4 のレーダーからの情報によって目標を照準する。つまり、発射直後に発射した本機を破壊すれば、ミサイルは目標を失い、海に落ちるか直進する……はずだった。

ミサイルはシースキミングし、加速した。

機体からの管制誘導じゃない。

対艦ミサイルは二次加速で高度で上げ、ノーチラスにシーカーカメラを向ける。

発射されたときS u - 3 4 とノーチラスの距離は一一〇キロメートル、対艦ミサイルは現在七〇キロメートルまで接近している。

イージス艦マルクスは距離三〇キロメートルのところで、最近開発されたばかりのミサイルを破壊するミサイル——R I M 2 0 0 を一二発同時発射する。

拡散する形で、R I M 2 0 0 ミサイルは六発ずつが対艦ミサイルに向かい、爆発。

一発が空中で誘爆し、もう一発はミサイル網を通り抜けた。緊張が走る。

さらにR I M 2 0 0 を発射するが距離が近すぎて命中せず、残るイージス艦が射程の短いR I M 1 1 6 を発射し、フアランクスを起動する。

二連装の砲門が轟音を上げて砲弾を連続発射する。

『着弾まで一〇秒!』

戦闘司令室のオペレータが、空母への着弾まで七秒とカウントダウンしたところでバスタークのフランク스가対艦ミサイルを撃ち落とした。

『こんな作戦をするエルジア軍が信じられない』

ワルキューレ4の私語に、ワルキューレ1は応えない。

『ストーンヘンジさえなければ……』

呟くワルキューレ2にも応えない。

「……迎撃任務完了、AKV-HQ、ガイドを頼む」
『了解。お疲れ様です、ジョシユア隊長』

ジョシユアは、あのミサイルのホーミング方法が気になっていた。電子戦機のEWを回避し、なんなくホームへ直行していったミサイル。

どういうことだ……。

二〇〇四年、九月十八日。

ISAFの空軍再編成のため、空母ノーチラスとイージス艦三隻はノースポイントの軍港に入港する。再編成の際、ジョシユア・ヴァレン大尉が率いるワルキューレ飛行戦隊は一時解散され、空母を

降りることとなる。

管制系統を統一するため、海軍に属するジョシユアは、異例の空軍への転属となった。

機体をF-15に乗り換えることになるかもしれない、慣れそうにない地上勤務が待っているかもしれないと想像しながら、ノーチラスの自室で就寝した。

次の日、ジョシユアはスクランブル要員として、午前中は甲板で整備員と共に自機の整備をしていた。

その時、ノーチラスに四機のF-4戦闘機が着艦した。

おそらく、彼らもまた招集されてきたのだが、空母を失い地上に配置されていた艦上戦闘機乗りの連中に違いない。

空母ノーチラスは、防衛線を築くため、これからすぐに南下する。出港の準備が整い、軍港から離れた。

甲板に揃った艦上機の整備を行う整備班に混じって、ジョシユアはふと一機のF-4に目にとまった。

青いカラーのF-4の垂直尾翼にメビウスの輪のマークが描かれている機体だ。

その日の午後、緊急入電があった。

急遽ブリーフィングルームに集合し、説明を受ける。

ノースポイントの早期警戒レーダーが破壊され、エルジア空軍の爆撃機六機と護衛機四機が接近中。アレنفォート上空を飛行するというものだ。

「ニューフィールド島を通過する前に、すべての爆撃機を撃墜し、爆撃機の侵入を阻止せよ。諸君らはノースポイント防衛線の先陣だ。ISAFの延命に全力を尽くしてもらいたい、以上だ」

メビウス1の機体上がる。

ジョシユアの横で、ヘルメットをかぶったメビウス1の顔を見た。まだ、若い……。

張り子の基地

『こちら管制機スカイアイ、聞こえるか？』

たった一機のメビウスチームにレイピアチーム三機、そしてワルキューレチーム四機編成で敵の背中から接近する。

さらに後方、安全な空域では、早期警戒管制機スカイアイが現場での指揮を取り、ジョシユアのたちの目となる。

『メビウス1、貴機はこちらの管制化に入った。まもなく爆撃機が見える、全機撃墜せよ』

了解の声が複数聞こえ、ジョシユアは四機を同時照準できる中距離ミサイルのシーカーをオープンし、アクティブセンサーが起動、戦闘態勢に入る。

……なぜだか、メビウス1が気になった。

『今日は俺の誕生日だ。勝利をプレゼントしてくれ！』

数人が笑い、誰がお前の為に、などと冗談を言っているのが、ジョシユアには心地よかった。

『やつら、行きがけの駄賃にアレンフォートを爆撃するつもりだ』
「護衛機はこっちで引き受ける。ワルキューレ2、3、4、行くぞ」

ジョシユアのワルキューレ1が先行し、中距離ミサイルを護衛機のMig-21とF-5Eの四機に発射する。

『ワルキューレ1、エンゲージ』

中距離ミサイルの運動性は低く、アクティブレーダーでのホーミングだが、シーカーアングルの範囲が狭く、急Gマニューバとチャフで回避される。

ワルキューレ1は近接戦闘モードへと切り替え、バルカン、短距離ミサイルをセットする。

その間にメビウス1が高速で爆撃機に接近する。

『メビウス1、フォックス2……ヒット!』

撃墜した。

『爆撃機がやられたぞ! 二番機、三番機は奴を落とせ』

そうはさせるか。

ワルキューレ1が一機のMiG-21を捉える。

HUDがSTTにモードが切り替わり、短距離ミサイルを発射する。

スロットルレバーを戻し、チャフを展開。サイドスティックを引き上げて小さく旋回して回避した護衛機は、失速するのではないのかという軌道を描いて見せた。

『逃がすなよ。戦争が今日で終わっちまうぞ!』

レイピアチームのF-16がメビウス1の援護に向かうが、その必要はないのではないかと、ジョシユアは一瞬だけが考えたが、すぐに目の前の敵を倒すことに神経を集中させた。

戦闘中に考えることなど無意味、本能的にミサイルの発射スイッチを押すのだ。

ジョシユアもプラス5Gで旋回し、敵を逃がさない。

バルカンのトリガーを短く、断続的に射撃する。

ステイックの角度を微調整し、七十発近く発砲したところで着弾を確認した。

主翼から火を噴き、爆発して落ちていく。

『爆撃機が落ちた！』

メビウス1がたった一機で六機の爆撃機を撃墜した。

『メビウス1、よくやった。制空権を確保しろ』

残った三機の護衛機は撤退することもできず、戦闘を継続する。

ジョシユアはブラックアウトぎりぎり、呼吸が苦しくなる勢いで旋回し、最後の短距離ミサイルを発射して、着弾を確認すると後退した。残った兵装はバルカンだけで、それも残弾が気になる。

他の味方機が護衛機に襲いかかる中、メビウス1が敵機に照準を合わせた。

メビウス1のハードポイントにはまだ一発のミサイルが残っている。

それを発射する。

敵機は逃れようと降下し、速度を得て急上昇、チャフをすべて放出するが、ミサイルがエンジンに直撃し、爆発した。

残りの一機に的を絞ったメビウス1は、バルカンを二秒と比較的長い間発射し、胴体、主翼、尾翼を破壊し撃墜した。

F-4のスペックを最大限にまで引き出したパイロットを、ジョシユアは未だかつて見たことがなかった。

ジョシユアの中で、メビウス1という存在がこの短い時間で一気に大きくなったことに気づいた。

奴は何者だ？ 傭兵か？

まだ若い、青年のような面構えをしていたメビウス1は、ジョシ

ユアと並行飛行し、無言でこちらに向けて親指を立てた。それに習い、ジョシユアも本当によくやったと心で思いながらやって見せた。

『スカイアイへ、こちらアレنفォート。爆撃機の撃墜を確認。撃墜したエースは誰だ？ 礼を言っておいてくれ』

『よし、お仕事はおしまいだ。家に帰ろう！』

レイピア１の言葉に、全員が笑った。
おそらく、メビウス１も……。

喉元のやいば

先の爆撃機迎撃により、アレンフォート飛行場、そしてノースポイントの爆撃を阻止した。敵は先ほど以上の大部隊で侵攻するだろうが、現在のISAFではこれ以上の戦力を迎え撃つほどの戦力はない。

爆撃機侵攻から六日後の十月五日。

「リグリー飛行場は敵の前線空軍基地であり、我が軍の喉元に突きつけられた短剣である」

敵情の記された資料を渡され、暗いブリーフィングルームでディスプレイに映る敵地の情報、敵航空戦力、集結された爆撃機の数などが表示される。

「現在エルジア軍の大規模爆撃機編隊が、この飛行場に集結している」

それを叩く、というのが今回の作戦だ。

「ノースポイントへの爆撃を阻止すべく、飛行場を攻撃し、駐機中の爆撃を全機破壊するのが本作戦の目的である」

こちらにも、そろそろ攻撃に転じるべきだ。

「敵基地には対空兵器もあり、決して少なくはない。また、敵戦闘機の戦力も可能な限り排除せよ。以上、解散」

作戦にはメビウス1、レイピア、ヴァイパー、そしてワルキューレチームが参加することになり、リグリー飛行場の航空戦力の駆逐をワルキューレ、レイピアチームが任せられ、メビウス1とヴァイパーチームが爆撃機の破壊を行う。

リグリー飛行場では対空戦、及び対地戦の両方が想定され、味方機の武装も異なる。メビウス1、ヴァイパーチームがやられれば爆撃機破壊が失敗する可能性がある。また、ワルキューレ、レイピアチームがやられればメビウス1、ヴァイパーがやられ、爆撃機破壊も失敗。

重要な任務となり、ジョシユアは搭乗前に神経が過敏になっていた。

なによりも対空兵器を先に破壊する必要がある。

爆撃機破壊の任務を持つメビウス1、ヴァイパーとの連携が大事だということで、接触し、ある程度現場での話を進めていたが、そこにメビウス1の姿はなかった。

一三時〇〇分、メビウス1、レイピア、ヴァイパーそしてワルキューレの飛行戦隊がアレンフォート飛行場から離陸し、西南のリグリー飛行場を目指す。

『リグリー飛行場まで四八キロ、送電線に沿って北へ飛べ』

スカイアイからの通信を聞き、メビウス1、ヴァイパーチームが爆撃高度まで上昇する。

先行するワルキューレ、レイピアは哨戒行動中と思われる敵戦闘二機を捉えた。

『爆撃機はお昼寝中だ。一網打尽にしろ！』

「了解。変電所上空を通過、敵戦闘機は二機、ワルキューレ2、やるぞ」

『了解』

『こちらリグリー飛行場。敵機が接近中、スクランブル！』

『これは演習ではない。繰り返す、これは演習ではない。ただちに迎撃せよ』

『ホワイト5へ、ランウェイ5へのタクシングを許可する』

敵はこちらに気づいたが、遅い。Tu-95爆撃機が上がる暇など全く持っていないのだ。

爆装するヴァイパーチームが地上対空兵器にスネークアイを落とし、続いてメビウス1が爆撃機を破壊する。一回目で爆撃機の三割を破壊し、飛行場から離れて引き返し、ヴァイパーチームと共に残りを破壊する。それでも足りなければ対地攻撃モードでバルカンを発射すればいい。

それがシミュレーションの結果だった。

『メビウス1、ヴァイパー9、敵戦闘機はまかせてリグリー飛行場へ迎え』

レイピアチームがメビウス1、ヴァイパーを護衛し、ワルキューレチームは二機のF-5E戦闘機を四機で追いまわし、撃墜して護衛に戻る。

『リグリー飛行場は方位〇一〇、距離一六キロ』

ヴァイパーが編隊を外れ、加速して高高度からの精密爆撃を行う。誘導型の爆弾で、高度四〇〇〇フィートからでは着弾まで十秒と非常に長く感じられるが、それは命中し、対空砲と隣接していた倉庫を破壊した。

地对空ミサイルも確認し、高速で低空から接近したヴァイパー9は、対地ミサイルを発射する。

もしも戦力が……地上戦力があれば、先にS A MやA A Aを破壊してから、安全な爆撃を実行したかった。

『スクランブル機に気をつける』

リグリー飛行場から敵戦闘機が二機、上がろうとしたが、レイピアチームが止まった蚊を撃ち落とすのと同じだと言わんばかりに、滑走するF - 5 Eをバルカンで破壊した。

『何てこった！ 離陸した機も着陸できんぞ！』

メビウス1が爆撃態勢に入った。

リグリー飛行場の護衛機のM i g - 2 1四機がメビウス1に対して攻撃を仕掛けたが、上昇中にワルキューレ1が追いつき、ミサイルで一機が撃墜。三機が編隊を崩し、こちらに注意を向けた。

それをわかりきったかのように、メビウス1は機首を地上に向け、爆弾を投下する。

『ド真ん中に爆弾を落としてやれ！』

レイピアが上空から、爆撃機、戦闘機、それに倉庫に命中して爆発を上げるリグリー飛行場を眺めて言った。

『爆撃機を移動させろ！』

『兵器庫から弾薬を運び出せ！』

『火災発生！ 消火しろ！』

敵の無線からは悲痛な叫びが聞こえる。

『こちらリグリー、被害甚大！』

メビウス1、ヴァイパーチームはそのままリグリー飛行場から離れ、また爆撃高度に上昇してから再度爆撃する。

その間に、ワルキューレチームは敵の残った対空砲を破壊するために低空から侵入し、多目標照準短距離ミサイルを発射して対空兵器の沈黙を確認。

ワルキューレ2、3が空中の護衛機に手こずっているようだが、ワルキューレ1は高度を上げ、戦闘優位を得ようとするMig-21に狙いを定める。ミサイルの射程に入るとすぐに発射し、命中を確認するまでつけ回す。

『メビウス1、投下、投下』

第二次攻撃がリグリー飛行場を襲う。

『なんてこった』

『味方の戦闘機はどこだ？』

ワルキューレ3が最後のMig-21護衛機を撃墜する。

『虎の子の爆撃機が全滅だ！』

メビウス1、ヴァイパーは腹に抱えていた爆弾をすべて投下し、残った施設にバルカンで攻撃する。

『……こちらリグリー、爆撃機は全滅！ 繰り返す、爆撃機は全滅！』

ジョシユアはマスクを外し、またもやメビウス1と平行に飛ぶ。ブリーフィングのあと、メビウス1は姿を見せなかったが、こち

らを信頼して敵戦闘機にかまうことなく己の任務をこなした。両翼には対空ミサイルも武装されていたというのに、彼は、我々に命を預けた。

『スカイアイへ、こちら攻撃部隊。任務完了、帰還する』

ヴァイパー9の声にパイロットが安堵し、機首を基地へと向ける。

北の目の破壊

十月八日、リグリー飛行場爆撃が成功から四日後のことだ。

ブリーフィングルームに集められたパイロットの中にメビウス1がいた。

彼は最前列に座り、その顔をうかがうことはできなかったが、がつしりとした体形の背中を見て、ジョシユアは兵士の頃の自分を思い出していた。

「ブリーフィングを始める。北の港セントアークには、大陸から撤退すべく連合軍の生き残りが集結している。しかし、シェズナ山頂のレーダー施設が敵の制空作戦を強力に支援しており、敵制空権下での撤退作戦は遅々として進んでいない」

セントアークには母艦ノーチラスが何度も寄港し、兵士を降ろしたところでもあった。あそこを拠点に何度か敵と戦ったこともある。兵士と仲が良くなり、何度かセントアーク港の近くにある酒場で飲み、次の日のブリーフィングに遅刻した、というのも思い出のつだ。

「彼らが無事撤退できればノースポイントで再編成され、今後の戦いを左右する大きな戦力となるだろう。敵の防空網を弱体化させ、味方軍の撤退を支援するため、シェズナ山山頂のレーダー施設を破壊せよ」

今回もまたメビウス1、レイピア、ワルキューレチームが選抜された。

うれしいことに、機体の支給があった。

燃費の悪いF-14では、シェズナ山到着する頃には燃料の半分

程度しか残っていない。それに対地攻撃能力も低い。I S A Fの司令部はF - 15 E、F - 15 Cそれに高級機でもあるF - 22 Aを支給した。

もちろん、どれもこれも現状下では高価機体として誰しもが搭乗できるわけではなく、戦果を見てメビウス1とジョシユアにF - 22 A、ワルキューレチームに三機のF - 15 Cの支給が決定した。また、その他にも戦闘支援とR - M O 1、F - 2支援戦闘機も運ばれてきた。

戦況を押し戻すためにも、空軍の戦力は絶対的に強化しなければならぬ。

「ジョシユア・ヴァレン中尉」

ブリーフィングルームを抜ける前に、ジョシユアはブリーフィングを行った大尉に呼び止められた。

「貴官は九月十八日に、S u - 34戦闘爆撃機六機を撃墜した」

突然の問いだったが、ジョシユアは、

「チームで、撃墜です。私ひとりの戦果ではありません」

「……そうか」

大尉はごほんを咳き込み、それから、

「S u - 34は対艦ミサイルを二発発射した。その直後にS u - 34を撃墜、しかし対艦ミサイルは完全に空母ノーチラスを捉えていた。……なぜだ？」

今になって思い出したが、そうだ、前から気になっていたことだ。

「私も、それが気になっていました。セミアクティブホーミングではなく、二次加速をして空母へ真つすぐ」

「あの距離でアクティブホーミングだとしたら、エルジア軍のレーダー技術は非常に高い。二日後の作戦は気をつける」

けれども、大尉は歯切れの悪い言い方をしたために、勘の鋭いジョシユアはすぐに、

「了解です。できれば、そのミサイルについて、お調べ頂けますか？」

何か知っているなら教えてほしい。そういう意味がこもっていた。

「今、そうしている。……実話、リグリー飛行場から大型の空対地ミサイルが発見された」

「まさか、それが？」

「技術レベルが高く、解析に手間取っている。ミサイルの誘導方法はレーザーによるセミアクティブ方式とはわかったが、問題は……」

「どこから誘導レーザーを発射しているのか？」

「ああ。ミサイルに搭載されているレーザー情報受信装置は長距離ミサイル……射程一〇〇〇キロ程度の誘導兵器でも制御できるものだった。ストーンヘンジを手中に収めるエルジア軍にとって、今は対地攻撃兵器の開発と量産が急がれている。もしかしたら、想像もできない兵器を開発しているのかもしれない」

「情報は少ないようですね」

「そうだ。……パイロットにはあまり関係のないことだった、すまない」

大尉は敬礼し、退出するように命じた。

エルジア軍は、ストーンヘンジという圧倒的な制空能力を持つ兵器を持ち、大陸の空を支配している。

現状で、エルジア軍が対地攻撃に力を入れるのもわかる。それでも、あのミサイルはなぜ、ノーチラスに向けられた？ あそこでのミサイルを発射する必要があったのか？ 敵はノースポイントの爆撃を最優先事項としている。

謎だ。

なぜあのSu-34は、ノーチラスを照準したのだ？

どうやって追尾したのだ？

メビウス1、レイピア、ワルキューレチームが編隊飛行をする。

全機、誘導型空対地爆弾を兵装として選択するも、基本的に対空兵装を基本としている。

F-22に搭乗するメビウス1は、爆弾倉にSDBという小型爆弾を搭載し、外部のハードポイントに対空ミサイルを装備してマルチに動けるようにする。

今回も役割が分かれた。

ワルキューレチームは相変わらず航空戦力に対する戦闘行動、メビウス1が地上のレーダーを破壊し、レイピアがメビウス1を援護する。

ここまで来るとメビウス1だけで十分作戦を完遂できるのではないのかと考えるようになった。

彼の操縦は、まだ荒削りで、無茶をするように見えるが、そのセンスは天賦の才としか言いようがない。

危険な爆撃活動でも、対空砲にかすりもせずこなし、旧式の戦闘機で性能を限界まで引き出し、それを自分のものとする。

エースとは、彼にこそふさわしい。

『この辺りは敵の制空権下だ、敵機に警戒せよ。ターゲット破壊後は、方位一八〇へ向かい帰還する。帰るまでが仕事だ、忘れるな』

こんなところで死ぬつもりはない。

空中管制機からの通信で、敵戦闘機が接近中とあり……ワルキューレチームが先行する。

『メビウス1、クラシンスキークレーター上空を通過』

ワルキューレ2、4が迎え撃つ。

ワルキューレ1、3が連携して二機のF-5E敵戦闘機に正面からミサイルを発射し、注意を引く。

『第一レーダー基地は方位三一〇、距離六キロ』

「レイピアは1に敵を近づけるな」

『了解している。敵のレーダーはもうこっちを捉えているはずだ』

『景色に見とれるな。メビウス1、援護する』

メビウス1が上昇し、爆撃態勢に入る。

ジョシユアは意外にもしつこいF-16をつけ回しながら、空中管制機からのレーダー情報を見続け、メビウス1の位置を把握する。F-16は急減速してこちらを出し抜こうとしたが、ジョシユアはすかさずバルカンを発射し、主翼に命中。空中分解して落ちていく。

『あの丸いのがレーダーだ』

『敵が集まってきたぞ！』

すぐに機首を第一レーダー基地に向ける。

『SAMに注意しろ、対空火砲もある』

それを先に破壊するのがレイピアの役目だった。

二機のレイピアが峰に沿うように低空を飛行し、メビウス1を援護する……はつきりいつて必要のないことだ。

多目標照準ミサイルをセットし、反対方向に発砲している対空砲に発射する。

「ワルキューレ3、4はワルキューレ2を援護しろ。F-16を南西に三機捉えた。迎撃しろ」

『レーダーに近づくな、メビウス1が爆撃する』

ワルキューレチームが戦闘編隊で上昇、接近中のF-16敵戦闘機と同高度で飛行する。

やはりF-14とは違う。

F-22は、アフターバーナーなしでの音速巡航を可能とし、瞬間的な加速を求めるためには、絶対、スロットルを全開しなくてはならない。

F-14もいい機体だった。スロットルを上げれば従順に速度を上げてくれたが、F-22は総合的にすべての性能が高い。

『敵機接近』

『さつさとレーダーを破壊しろ』

ワルキューレチームはブレイクし、各機、敵を定めて近接戦闘を繰り広げる。

ワルキューレ1がドッグファイトは勘弁だと急減速し、敵との距離があいたところにミサイルを発射して撃墜する。

『捕まったー！』

ワルキューレ2が背中に敵を連れて上昇する。

「馬鹿野郎、ブレイクしろ」

ワルキューレ1が援護、敵機をロックするも、ワルキューレ2と近すぎる。発射して破片がワルキューレ2のF-15Cに襲いかからないと言い切れない。

「ワルキューレ2、最大速度で振り切れ、ミサイルが発射できない」

その間、メビウス1は着実に任務をこなしているのだが、突然、爆撃コースを外れ、高速で接近してくる。

レーダーでは、メビウス1はワルキューレ2の軌道上を横切ることになる。

近接戦闘モードを選択し、バルカンを連射してF-16の前から強襲した。

ニアミスするのではないのかと、ジョシユアは一瞬焦るほどメビウス1が近づいたが、そんなのはまさに一瞬のできごと。

「メビウス1、自分の任務をこなせ」

返答は、小さな笑いだった。

寡黙すぎる男だ。

『第二レーダー基地、方位三三〇、距離二三キロ』

敵機がレーダー上から消え、対空砲もレイピアが破壊した。それによりメビウス1のレーダー破壊任務は難なく完遂できた。もしあのとき、メビウス1が助けにこなければ、ワルキューレ2

はやられていただろうか。自分の力でなんとか解決できたのではないのか、あのときのメビウス1の選択は正しかったのだろうか？

任務が終わった今だから言えるが、例えばメビウス1がやられても他の航空戦力でレーダーは破壊できるし、任務は完了できる。だが、メビウス1がいなければ、ワルキューレ2は……もういい、現にワルキューレ2は無事なのだ。

当たり前となった、メビウス1の隣がワルキューレ1という編隊。メビウス1は何も言わないが、得意げに親指を立てて、何度か頷く。

あれがメビウス1なのかと、徐々にメビウス1を知っていくジョシユアは、彼と一度、酒を飲んでみたいと思った。

それが可能なのは戦争が終結してからだと、ジョシユアは、戦争の行方に光を見た。

帰還し、デブリーフィングで、メビウス1はまた最前列に座っている。

「敵レーダーは沈黙し、北部の防空網が弱体化した。大陸からの撤退は順調に進んでいる。貴官らのおかげだ」

味方を救った。

敵機を撃墜するだけの作戦より、なぜだか心地よい作戦だった。メビウス1は、敵機を撃ち落とすたびに何を思うのだろうか？

空中回廊の遮断

連戦が続き、ISAF空軍パイロットの疲労感は積もるばかりだった。

これからエルジア軍の石油化学コンビナートの破壊。

エルジア軍最強のエイギル艦隊の殲滅と作戦スケジュールは埋まっていく。そのどれもが地上部隊の支援がほとんどない状況下で、自分たちの失敗がISAFの壊滅に繋がる重要性を帯びていることから、パイロットのストレスは溜まり、緊張感が解けるときはなかった。

「任務を確認する。エルジア軍がコンベース港へ、大量の戦略物資と緊急展開軍を空輸していることがわかった。この港に停泊するエイギル艦隊を中心として、本格的な侵攻部隊の編成が進められているらしい」

エイギル艦隊。

無敵艦隊の異名を持ち、多数の巡洋艦、駆逐艦を編隊に組み込み、圧倒的火力で大陸を支配する。また、航空戦力も充実している。

今のISAFの戦力では、このエイギル艦隊に簡単に潰されてしまっただろう。

「敵の部隊編成が終了し、エイギル艦隊が出港すれば、この戦争におけるわれわれの敗北が決定する」

そのために、エイギル艦隊のパイプラインを破壊する。

地味な作戦ではあるが、今のISAFにとっては最大の課題となっている。

「今回の任務は、コンベース港へ物資を送る輸送機を攻撃し、我々がいかに簡単にこれらを撃墜できるか敵に教えることだ。なお、敵輸送部隊には電子戦機がいる。ジャミングでレーダーは麻痺するが、諸君らの視力の妨げにはならないだろう」

そうは言うものの、レーダー機器を失うことは、パイロットの目を失いと同義だ。

昔ながらの有視界戦闘にならないことを祈るしかない。

今回、こちらの電子戦機が上がることはない。元々有する戦力が少なく、ノースポイント防衛飛行部隊も引き裂くと、ISAFに余分な機体は存在しない。

この戦争で、完全に作戦の軸とされるようになったメビウス1とワルキューレチーム。

確かにパイロットは優秀だが、それに対してエルジア軍は数で攻めてくる。少数先鋭部隊でも、圧倒的数で攻め込まれたら負けてしまう。

エイグル艦隊を潰すために今回の作戦があるのだが、この作戦も敵のジャミングによって護衛機の数はいらない。もしかしたら密集編隊でおそろしいほどの数がそこにいるのかもしれない。

そういう恐怖が、ジョシユアを襲った。

「まもなく輸送機が見える。近くにいて電子戦機を撃墜すれば、レーダーはクリアになるはずだ。幸運を祈る！」
『ウィーアー！』

数名のパイロットがテンションを上げ、返答する。

本格的な空中戦は久しぶりだ。一部の連中は、護衛機が多いほど燃えると言っていた。

メビウス1、ワルキューレチームはお馴染だが、ここでオメガチームが加わった。

空母ハイビスカス・ルーシーから派遣された、F/A-18の艦上機チーム。

以前は陸上部隊の支援をしていたらしく、唯一、ストーンヘンジの攻撃範囲内から帰還した部隊として、ジョシユアもその名を知っていた。

ジョシユアは、以前、自分も空母にいたことを思い出し、仲間意識を強く感じた。

『スカイアイからのレーダー情報は当てにならない。アクティブレーダーも感知範囲が狭い。敵高度を確認しろ、行くぞ』

メビウス1が先行する。

十機の機体が編隊を崩す。

ワルキューレチームがE-767電子戦機の破壊に専念するわけだが、有視界の限界は見えている。出撃前に、点に注意しろというあの大尉の言葉が脳裏をよぎった。

距離が離れていると、巨大なジャンボジェット機も点にしか見えない。

注意しないと見逃してしまう。

『見つけた』

ワルキューレ2がさっそく、電子戦機を発見した。

その瞬間、レーダー照射の警告が響いた。

おそらく後方からだが、レーダーが反応しないために確認もできない。

『ブレイク!』

編隊を崩し、ワルキューレ2が電子戦機を狙い、残りが援護する形を取る。

ジョシユアはまずいと感じた。

はつきりいつて、四方八方をふさがれた状態で、敵機的位置も、ミサイルがどこから発射されるかもわからない。視界も限界がある。なるべく高速を維持したまま、機体耐久限界のマニューバで敵をかく乱する。

そのとき、レーダークリアになり、スカイアイからのデータで敵位置が判明した。

『E767がやられたぞ！』

ワルキューレ2がやったのかと思ったら、違った。

案の定、メビウス1だ。

彼は敵機的位置を把握しているかのような動きを見せ、護衛機の背面を捉え、急加速する。

『レーダーの一部がクリアになった』

『いいぞ、メビウス1。電子戦機はもう一機いるぞ』

綺麗な飛行機雲が線を引き、旋回し、護衛機を撃墜。旋回、輸送機をバルカンで撃墜。

速度を上げ、上昇、電子戦機と同高度を飛行する。

『ターゲット、残り二機』

ジャミング効果範囲にいない敵機を見つけたオメガとワルキューレチームが、動けなくなった獲物を狩る勢いでミサイルを発射する。

『話が違つぞ、このままじゃ落とされる』

『敵の数は少ない。ひるむな!』

敵機の混線。

二機目の電子戦機を落としたのはジョシユアだった。

レーダー画面に一瞬だけノイズが走るも、綺麗になる。

点に気をつけろという言葉を噛みしめたあとのことで、残りの輸送機が二機、のろのろと飛行している。

『レーダークリア。各機画面を確認しろ』

『レーダーが完全にクリアになつた!』

こうなるとISAF機の勢いは止まらない。

『電子戦機はどこだ? やられたのか?』

『こちらブルー4、誰か援護を頼む!』

『早く来てくれ! 追われている!』

メビウス1が鋭い角度で旋回し、二機の敵を追い、狩る。

それに見習い、ワルキューレ2、4が追い一機を、オメガ1は単独で一機を撃墜する。

『残りは最後の二機だ』

最後は俺だ、とは言わないが、メビウス1が短距離ミサイルを発

射用意。

『くそっ、なんてこった!』

ミサイルは輸送機の尾翼を貫通し、輸送機はゆっくりと降下したのち、一気に高度を失った。

『いいぞ、よくやった!』

オメガ2が言う。

『いいぞ! メビウス1』

さらにワルキューレ3も言う。

『輸送機の撃墜を確認した。レーダーなしでよくやった、メビウス1』

確かに、メビウス1の働きがなければこの作戦、いや、今までの作戦はすべてうまくいかなかった。

「作戦通り輸送機は撃墜された。敵はこの空中回廊を使うリスクを思い知ったことだろう」

デブリーフィングが終わったあと、メビウス1と話をしてみたいと話をしようとしたとき、

「ヴァレン中尉」

また大尉に呼び止められた。

どうやら、例のミサイルの情報がアップデートされたらしい。

「ミサイルのホーミング方法が判明した」

「解析が完了したのですね？」

「そうだ。そしてそのホーミング方法は、やはりレーザー誘導だった。一番確実な方法だ。レーダーを目標に対して照射し続け、ミサイルは間違いなく命中する」

「それで、そのレーザーを発射する母機は？」

「……衛星だ」

「衛星？」

「観測軍事衛星。これはストーンヘンジの開発時に打ち上げられ、外宇宙から接近する小惑星を発見するための軍事衛星で、情報を地上局に発信する為のものだ。現在、この衛星は七基ほど確認され、またこの衛星に管制システムが搭載され、ストーンヘンジの命中率を高める役割を担っている」

「それがミサイルの誘導管制に用いられた？」

「そういうことだ。このシステムがエルジア軍で確立、完成、普及すれば、航空戦力はもちろん、地上戦力も一気にたたみ込まれる。例えばストーンヘンジの破壊に成功しても、衛星がある限り空は安全にはならない」

予想以上にISAFは切羽詰まっている。

これからエイギル艦隊の殲滅作戦を控え、さらにはストーンヘン

ジの破壊、本土の制圧などと待っているところに、思いもしなかった情報が入った。

「上層部はこの衛星をA S A T（対衛星兵器）で破壊する作戦を考えているが、ストーンヘンジがある限りそれもできない」

「その内、弾道ミサイルが飛んでくるかもしれない」

「それはないと思われる」

「思われる……か。」

「ジョシユアは、嫌な予感がしてならなかった。」

眠る翼

ワルキューレチームがISAFの主軸作戦から離れ、単独任務をすることになった。

一月一日。

ジョシユアは空母ノーチラスに、久しぶりに搭乗し、大陸沿いを航行して敵の前線基地となるアーツク飛行場へと向かう。

エルジア軍侵攻時に、ISAF地上部隊がコンビナート港から二〇キロ、ストーンヘンジ防空圏外側ぎりぎりのアーツク飛行場の滑走路、格納庫を破壊して使用不可能にした。

それが最近になって稼働しているというのだ。

深夜に輸送ヘリが多く飛び交い、明かりがあるという。

すくなくともISAFでないことは確かだった。

なんにしても、アーツク飛行場を再び使用されるというのは脅威だ。余力のないISAFにとって、短期決戦、あるいは小さなものから壊していくしか勝ち目はない。

ジョシユアたちはISAF海軍のヘリの護衛である。

低空から侵入し、アーツク飛行場の制圧し、その正体を明かす。

「敵に航空戦力はほとんどない、戦闘ヘリが数機あるだけだ。難しい作戦ではないが、メビウスと並ぶ撃墜数を誇るワルキューレチーム、注意してくれ」

確かに、今までの作戦から考えると決して難しいものではない。

航空戦力を殲滅した後は地上部隊に任せるだけだ。

作戦に対してそれほど緊張はなく、ジョシユアは空対地ミサイルを二発、対空長距離ミサイル二発、多目標照準ミサイルを武装したF-14に乗り込む。

『エンジンを無視すれば、F-14は最高だ』

F-22もいい性能を発揮していたが、F-14のコクピットは落ち着く。それに、複座なので、オフィサーが搭乗していることで計器に目を配る必要がない。

地上部隊を乗せた輸送ヘリと戦闘ヘリが先行して離艦して、続くワルキューレチーム四機が発艦用意をする。

一九時三十分、夜のフライトになる。

「地上の配置になってから、AWACSに搭乗しています」

発艦後、VOFをチェックしながら、オフィサーがそんなことを言っただけだから、ジョシユアは驚いた。

「スカイアイに？ あのオペレータはお前か？」

「いいえ、彼は最初の戦いからずっとAWACSに搭乗し、空を支援してきたプロです」

「なかなかの声だからな、惚れそうだよ」

「ははっ、そうかもしれません」

後方に輸送ヘリを残し、ワルキューレチームを高度一六〇〇フィートで飛行して目標のアークティック飛行場を目指す。

「ノーチラスからのレーダー情報では、戦闘ヘリが二機、駐機しています。地对空兵器は確認されていません」

「だが対地兵装をしている。対空兵器があると前提して任務を遂行する。……目標基地まで八マイル、ヘッドオン」

『ワルキューレ2、了解』

『3、了解』

『4、了解、輸送ヘリの援護をします』

ワルキューレ4だけが編隊から離れ、輸送機の近くを飛ぶ。

「敵は気づいていません。上がる前に破壊しましょう」

「当たり前だ」

多目標照準ミサイルの発射セット、ミサイルシーカー視野円に戦闘ヘリを捉える。

短い音が鳴り、ロック中ということを知らせも、まだ射程内ではない。

『輸送機は破壊するな、捕虜確保の状況が発生するかもしれない』
地上部隊からの通信で、オフィサーがTEWSのレーダーを確認し、指示する。

「ワルキューレ2、3、目標を確認しろ。リンク・オン」

射程内に入った瞬間、ピーという音が鳴り、ミサイルを発射してすぐさま上昇する。

ワルキューレ2、3もヘリを破壊して上昇、再度攻撃態勢に入ろうとした時、倉庫が開き、数十名の兵士が現れたとワルキューレ3が言った。

『携帯SAMだ』

「そんなものが当たるか」

『ヘリには当たる』

「縦編隊、対地ミサイルを戦闘ヘリに合わせろ」

熱源探知にミサイルをセットし、戦闘ヘリに合わせる。

「南から接近する。AIM、右、十ミル修正、できるな？」
「了解」

アトック飛行場から五キロほど離れ、旋回して距離二キロ地点のところでミサイルを発射する。

一ミルずれると一キロ後には一メートルほどずれる。
十ミルの修正で二キロ地点から発射すれば二十メートルのずれで、ちょうど携帯用対空兵器を抱える兵士に直撃する。

『ワルキューレ1、輸送ヘリの到着は七分後だ。空中の脅威は排除したか？』

ワルキューレ4から通信。

「こちらワルキューレ1、戦闘ヘリは全機破壊した。しかし敵兵士数名がステインガーを装備している。戦闘機で人を撃つのは難しい」
『了解だ。敵を引きつけることはできるか？』
『ネガティブ』

バルカン攻撃を仕掛けるワルキューレ2だが、目標が目標だけにあまり効果がなかった。

対地ミサイルの残数がゼロとなったワルキューレ1は、

「駄目だ、こちらでは対応できない。地上部隊に何とかしてもらえない」

赤外線誘導のステインガーミサイルは飛んでくるが、発射角度から追尾が難しく、また機速が速いので発射後、ミサイルは目標を見

失う。

何度かアフターバーナーを使用して速度を獲るが、その度に燃料計が気になる。

『ワルキューレ1、こちら地上部隊のブラボー10だ。対空兵器はこちらで何とかする。空中で待機してくれ』
「了解した」

ワルキューレ2、3と共に基地から離れ、高度を取る。

『ロープを降ろせ、止まるな、行け！』

ステインガーを装備した兵士とは反対側から侵入して輸送ヘリの安全を確保する。

暗視ゴーグルを装備した十人のブラボーチームがファストロープで降下し、五人のふたつの分隊に分かれた。

ブラボー5が周囲の脅威を排除するために、降下した飛行場の裏側から侵入する。続いて、ブラボー10が屋内を制圧するために管制塔の入り口付近で待機する。

『ガンシップを下がらせろ！』

『ブラボー5から10へ。格納庫周辺に敵兵士を確認』

すばやく格納庫から飛び出し、PDWを発砲、倒す。

『ブラボー5は周囲の安全を確保。中へ入る。気をつけろ、明かりがない』

先ほどまで管制塔には光が漏れていたのだが、今は消灯している。扉を発見。

CQBの陣形を組み、一人が扉に正面に立ち、背中ショットガンを手にしてふたつの蝶つがいを撃ち、破壊する。

ショットガンで撃った者が下がり、扉に飛び蹴りをしてそのまま背中から倒れ、待機して三人が突入。姿勢を低くして室内の周囲を確認しながら進む。

『アンブッシュに注意……敵だ!』

無線からは、今まで感じたことのない緊張感が伝わってきた。通路の向こうからマズルフラッシュ。

『右だ、右の通路から撃ってくる』

囲まれる前に特殊閃光音響弾を投げて敵の視界と聴覚を奪い、二人が突撃して敵を倒す。

もう一人が通路の角に背をつけて先を確認して銃口を向けるが、

『民間人がいる、撃つな』

両手を上げて、数名が床に伏せていた。

『明かりをつける』

ゴーグルを外し、電気をつける。

『ブラボー5は周囲の脅威を排除、ガンシップは周囲警戒』

『おい、なんだこれは?』

二人が建物内を確認していると、管制塔には不思議なものを

見つけた。

『エレベータだ。地下があるようだ』

アートック飛行場に、そんなものがあつたのか？

『ブラボー10から各員へ。アートック飛行場の確保を確認、もう安全だ』

『ブラボー5からワルキューレ1へ。確認できるか？ 滑走路が直されている』

「ああ、確かに」

明かりが点灯され、誘導灯がしっかりと滑走路を縁取る。

『通信システムに電源が入っていない。敵が増援を要請した痕跡がない』

『どうして民間人がいる？ HQ、民間人はどうやら研究者、技術者らしい』

『研究者？』

『連れてこられたと話している。通信システムがダウンしていたのはこの研究者が助けを呼ばないようにしていたらしい』

『なにを研究していたにせよ、通信が途絶えたとなると自然と増援が来ます。情報を取るだけとって撤収して下さい』

『研究者はどうする？』

『敵の輸送機を使って運んでください。タンゴ、お願いします』

『了解。……なに？ 亡命だと？』

『どうしました？』

『研究者の話だと、新型の戦闘機を開発していたらしい。地下にデータが残っていると言っている。それを回収してから帰還する』

『了解』

「早くしてくれ、燃料が少ない」
『わかってる』

十五分後、研究者十七名を敵の輸送機に乗せ、ノーチラスに帰還する。

「プロジェクト名は“ワイバーン”。新型の可変翼戦闘機開発計画。アトック飛行場基地で開発が進められていた」
「ワイバーン？」

デブリーフィングのあと、ジョシユアはデータを解析した士官と、研究者一名と共に持ち帰ったデータ、新型戦闘機についての説明を聞く。

「コードEX-02として試作機が開発され、現在、あの地下でX-02完成機を開発していました」

研究者の一人、アリス・トールズが話す。

白衣ではなく、整備士が着る作業着に身を包み、ブロンドの髪を後ろで縛っている、活発的な女性……というのがジョシユアの第一印象。

エルジア軍では大尉の階級を持っている。

「どうしてあんなところで？ ストーンヘンジがあればこちらは侵攻できない。工廠を破壊することはできないのだぞ？」

ジョシユアの疑問。

「X-02は戦争のはじまる五年前から開発が始まったのですが、ストーンヘンジを手に入れてからは航空戦力の増強はほとんど意味がないとして計画は白紙に戻されました。けれども、ある将校がX-02の開発を再始動したのです。アーツク飛行場は重要拠点にするべく戦闘機を格納するための地下格納庫があり、また、ISAFも戦略上、あの飛行場を無視していたために私たちは運ばれたのです」

「将校が？」

「X-02開発は正式な命令ではなかった。その将校の独断の判断だったの」

とりあえず、X-02なる戦闘機の開発経緯を話し、アリスは士官から差し出されたコピーを一口。ため息をつき、しばらくディスプレイに映されたX-02の基本構造を眺める。

「……それで、どうしていまさら戦闘機の開発を？」

「その将校は、ストーンヘンジが破壊された際の戦力確保ためと言っていたわ」

敵はこちらの反撃に備えている。

今まではストーンヘンジの破壊がエルジアの肝だと思っていたが、この調子だとストーンヘンジを破壊したあとでも勢力図は変わらないかもしれない。

そんなことを感じているのはジョシユアだけではない。目の前にいる士官も同じだ。

「X-02は従来の戦闘機とは比べ物にならない性能を発揮する。私たちとしては完成させたい。もちろん、完成後はISAF機とし

て使用して下さい」

「まさか、アートルック飛行場で開発を続けると？」

士官は信じられないという顔をする。

ジョシユアも、たった一機の戦闘機が戦力に大きな差をもたらすわけがないと感じていたが、もしかしたら、メビウス1なら……などと、英雄が伝説の剣を手にすれば無敵だという、子供のような考えが浮かんだ。

ポケットから煙草を取り出し、久しぶりに吸う。

「あそこのエルジア軍兵士はX-02の開発まで帰還が許されていない。通信も傍受されないように極力避けていた。通信システムは戦闘ヘリに搭載されているものだけを使っていた。できます、必ずできます」

「危険すぎる」

それに、まだアリスを信用したというわけではない。

「護衛をつけても無駄にならない成果を発揮させます。絶対です」

アリスの言葉には自信があった。

しかし、これをたった一人の士官が決定するわけにもいかないが、この空母ノーチラスは現在の戦闘でほとんど活躍していない。本部防衛のために、艦載機もパイロットも戦場に向かえず仕舞いである。これはこここの最高司令官である艦長に話してみる価値はあるかもしれない。それに、X-02のデータを奪取しただけでも、敵に大きな損害を与えたといえるはずだ。

ジョシユアは、この戦争の未来が見えなくなっていた。

アートルック飛行場での開発続行が決定され、F-14戦闘機が三機、戦闘ヘリと輸送機が常時駐機することとなった。

また、アリスから重要な情報を得た。

「衛星からレーザーを照射し、ミサイルを誘導するシステムが七〇パーセント完成している。試験として先月に対艦ミサイルにそのシステムを搭載して効果を発揮した。ただ、攻撃機は帰還しなかったけど」

ジョシユアは、ノーチラスから発艦し、S u - 3 4 の撃墜を思い出した。

「本当はリグリー飛行場からも同型のミサイルを積んだ攻撃機、爆撃機がノースポイントを爆撃する手はずになっていた」

「そのシステムが完成する？」

「戦闘機から発射されるミサイルすべてが非常に高い追尾性を得ることになる。衛星が同時に照準できる数は五百を超える」

「衛星を破壊か……」

命中率一〇〇パーセントのミサイルなど、あつてたまるものか。ジョシユアは二本目の煙草に火をつけ、眉をひそめた。

100万バレルの生命線

「エイギル艦隊が停泊するコンベース港は、燃料の補給を一つの石油化学コンビナートに頼っている。このコンビナートは沿岸の石油精製、備蓄施設と、葉状の油田採掘施設によって構成されている。このどちらか、あるいは両方を攻撃して生産能力を二〇パーセント以下に低下させることが作戦に目的だ」

ノースポイントから南に位置するコンビナートは、コンベース港からさほど離れてはいない。そのため、攻撃があればすぐに航空戦力の増援が飛んでくる。

地上目標の破壊が最優先事項となるが、航空戦力を無視して攻撃できるほどの技量を、ここにいる全員は持ち合わせていない。

メビウス1、オメガ、ヴァイパー、ヘイロー、レイピア、そしてワルキューレチームの全編隊が参加することになる。

全機、この作戦が今度の進撃に大きな影響を及ぼすことは明らかだと認識している。

「コンベース港への燃料供給を断てば、侵攻作戦の実施を遅らせるとともに、エイギル艦隊の機動力を奪うことができるであろう」

ブリーフィングが行われる三日前に、ジョシアはアークツク飛行場で初めてX-02を見た。

X-02は半前進翼機で、外翼部を主翼内翼部に收容することで高速での巡航能力と、非常に高いステルス性を持つ後退翼形態の二つの形態を使い分ける事のできる、通常の戦闘機から逸した可変主翼力ナードと、三次元可動全動式水平尾翼によって構成される三面翼構造を持つ。

このボディに三次元ベクタードノズルにより上下左右あらゆる方向に推力偏向が可能なエンジンを二基搭載する。

これらを制御するセントラルコンピュータもまったく新しいものを使用し、速度に応じて機体状況を最適なものにする。

また、長距離AAM、コードネーム・ダークファイアの専用兵装を持ち、一機でも大きな火力を誇る戦闘機となる。

大尉が、ジョシユアに、

「以前に、エルジアが新型機を開発しているという情報を入手したと聞いたことがあった」

その言葉にもなにか意味があるのではないのかと探ってみたが、ただの事実でしかなかった。

「ベースは完成している。ただ、内部機器の部品をF-22のものを流用する」

着々と開発が進んでいき、X-02の完成は近い。

その際に、X-02はメビウス1の元へと届けられるだろう、いや、メビウス1に搭乗してもらう。

ジョシユアは、X-02を、メビウス1のために製造されているのだと感じた。

F-22が二機、編隊を組んで飛行する。

メビウス1とワルキューレ1である。

後方には石油化学コンビナートを破壊するために多くの戦闘機、攻撃機が追従し、夜明けを迎える空を飛ぶ。

『作戦開始。二手に分かれ、目標を攻撃せよ』

『メビウス1、オメガ、ヴァイパーは石油精製備蓄施設に、ワルキューレ、レイピア、ヘイローは油田採掘施設を破壊しろ』
『了解』

編隊を崩す際、メビウス1がこちらを見ていた。

何も言わなかったが、なんだか、嫌な予感がした。

ワルキューレの編隊が油田採掘施設に向かい、最初のターゲットとなるタンカーを発見、破壊する。

それを機に、敵が現れ、味方が攻撃態勢に入る。

『援軍を呼べ』

敵が援軍を呼んだ。

航空戦力が増強される。なるべく、その前に作戦を終わらせたい。

『海上油田、方位〇七〇、距離三〇キロ』

『油田を発見した』

『誰か、海上油田の下をくぐってみろ』

ヘイロー5が冗談を言うと、何人かが笑った。

『各機、自分の判断で動けよ。誰も助けはくれない』

高度を取り、爆撃態勢に入る。

『暗いな、視覚が悪い』

『外すなよ』

『やるぞ、当てるよ!』

数機が大型の無誘導弾を落とす。

着弾を確認する前に、F-16、MiG-29戦闘機がこちらに機首を向けている。

『敵機接近中、くそ、油田に近づけない』

散開し、爆弾を落として軽くなった機体が制空権の確保に向かう。フルキューレチームは敵機からの攻撃の合間に油田に爆弾を落とすも、対空兵器が意外にも多く、邪魔をする。

「低空から接近し、SAMを破壊しろ」

ミサイル警告にどきつとしたが、敵機はミサイルを発射する前に味方機が落とした。

フルキューレ2が海面ぎりぎりを飛行し、SAMを破壊してまた上昇する。ヒットアンドアウェイの行動を取り、ジョシユアは油田の煙突をロックオンし、爆弾を投下する。

『すごい爆発だ。明るくなったぞ』

『もう一つのターゲットはどうなっている？』

その心配はない。向こうにはメビウス1がいる。

一つ目の油田の破壊を確認し、上空の戦闘機を追いまわす。

『戦闘機が邪魔だ、そっちを先に落として次に向かう』
『海に落ちるな。高度計に注意』

敵は単機でかなわないとわかると、二機で追うように軌道を描き、レイピア2にミサイルを発射する。

『ブレイク、ブレイク！ 上昇しろ、逃げろ』

が、二発のミサイルが迫るレイピア2のF-15はアフターバーナー全開で上昇し、回避機動で飛行するものの、一発が機体を通り過ぎた。しかしもう一発が垂直尾翼を貫通したとき、近接信管が作動、爆発した。

爆発の衝撃でF-15が真横にスライドし、完全に浮力を失って一瞬、空中で静止した。

『脱出しろ！ スカイアイ、救出機を発進させる』

『制空権の確保を優先しろ。でなければ救出へりは回せない』

レイピア2は致命的損傷を受けたものの、爆発する危険性はなかった。

機体が降下を始めた時、レイピア2が脱出した。

『そこで待っている、凍え死ぬなんて許さないぞ！』

ジョシユアは無線から聞こえるその声を無視し、自分に任務に専念した。

今できることは油田の破壊だけだ。

敵航空戦力の低下をスカイアイが伝え、順次、油田に攻撃をする。煙突が倒れ、噴きだす石油が海を七色に光らせていく。

『これが最後の爆弾だ』

海上の油田施設の七〇パーセントを壊滅させ、残弾がなくなつたとき、

『石油精製備蓄施設の壊滅が完了、残った油田施設、及び航空戦力

を殲滅しろ』

残った一発のミサイルを抱えたまま、ジョシユアはバルカンで敵をけん制し、味方の爆撃を援護する。

『ヘイロー3が油田を破壊した!』

残った油田で大きな爆発が起きた。

敵戦闘機が守るべきものを失い、ほとんど戦意喪失に陥っていた。作戦における最優先事項をクリアした現時点で、スカイアイから作戦完了の声が響いた。

その時だった……、

『敵の増援を確認。五機の戦闘機が接近中』

『!?!? なんてこった、黄色中隊だ!』

レーダーに表示される、綺麗に編隊を組んで飛行する五機の戦闘機。

黄色中隊……エルジア軍最強の飛行戦隊が、なぜこんなところに?

『全機、撤退! 戦闘は許可できない、すぐに引き返せ』

ジョシユアのワルキューレチームとレイピアチームは、黄色中隊を見ることなく逃げるができるが、ヘイローチームとオメガチームが黄色中隊と接敵する可能性がある。

『くそっ、捕まった!』

『高度を捨てろ、速度を上げろ!』

『機体性能が違っ……やられる!』

IFF反応がひとつ消える。

……仲間を見殺しにするのか？

ジョシユアは旋回し、黄色中隊に向かって飛ぶ。

最強と呼ばれる黄色中隊に、自分が対抗できるのだろうか、などという疑問は浮かばなかった。仲間を助けるために、ジョシユアはスカイアイからの命令を無視する。

それと同時に、メビウス1もまたヘイローチームを救出するために反転したのを、レーダー上で確認する。

『メビウス1、ワルキューレ1、戦闘を回避し、撤退しろ』

黄色中隊に追われているのはヘイローだけではない。オメガチームと、レイピアの一機が必死になって逃げ回っている。

「一機を集中攻撃する。メビウス1、援護する」

メビウス1はジョシユアのサポート受け、ヘイローを追っていた一機の背中にぴたりとくっつく。けれども、格闘戦に特化したSu-37にドッグファイトで勝てるわけがないのは明らかだ。F-22は総合性能で見れば確かにそれを上回る。あとはパイロットの技量次第だが、格闘戦を繰り返るのであれば、F-15の方が性能は上だ。

黄色い機体のSu-37は機首を上げて、コブラ・マニューバを見せた。

背中につかれるのを恐れ、メビウス1とワルキューレ1が散開し、高度を取る。

敵パイロットの腕は本物だ。それに機体性能も良い。

ここで死ぬかもしれない。

高速で旋回してこちらにミサイルロックをしようとするSu-37から逃れるのがやっとだというのに、レイピア、オメガ、ヘイロ

ーが対抗できるわけがない。

『駄目だ！』

爆発を確認してから、あれがヘイローだったと気付く。

『ヘイロー8、撃墜』

『助けてくれ！　なんでこんなところに……』

『オメガ4、撃墜』

間を空けず、

『レイピア9、ダウン……』

次々と味方が撃墜されていく中、メビウス1とジョシユアだけが、なんとか黄色中隊に食いつき、味方を逃がそうと必死だった。

しかし形勢は圧倒的に不利。

ミサイルもバルカンも残弾が気になり、燃料すらない。

メビウス1は出力最大で上昇し、帰還コースへと機首を向けた。潮時だ。

味方機はなんとか黄色中隊から逃れた。これ以上、勝てない相手と戦う意味はない。

メビウス1と同じく高度を取った後、アフターバーナー全開、機首を下げて、速度を確保して黄色中隊の追撃から逃げる。

黄色中隊はこれ以上攻めてこない。帰還燃料が確実に尽きてしま

う。

『敵機は撤退した。作戦終了。生き残った機は帰還せよ』

全員、安堵感にため息をもらす。

『……何機やられた？』

レイピア1が言う。

『四機だ。ヘイロー2、オメガ4が損傷、エンジンから煙を上げている』

『帰還はできるな？』

『問題ない……』

オメガ4は黄色中隊のバルカンを食らったが、奇跡的にエンジンを外れた。

『あれが黄色中隊だ。ストーンヘンジから飛んできやがった』

黄色中隊。

予想以上の力を持っていた。ジョシユアは、メビウス1ですら抵抗できないほどのパイロットがいたということに驚きながらも、いずれ、やつらと決着をつける必要があるのだとも考えた。

しかし、あの短い時間で四機の味方機を失ったのは痛手だ……。

「一日二五万バレルの原油採掘能力と五〇〇万バレルの備蓄を失い、エイグル艦隊は足止めを食らうことになった。しかし、残念ながら我々も多数の航空戦力を失ってしまった。戦況の低下は、能力でカバーしてほしい」

そうだ、自分がメビウス1並みの能力があれば……。

しかし大尉が言う、「メビウス1とワルキューレ1がいなければ、もっとやられていた」と。

本当に自分は役に立ったのだろうか？

ジョシユアは、自分がメビウス1の次に敵機を撃墜している、誰も
もがその能力を評価していることを知らない。
けれども、現に黄色中隊には敵わなかった。
翌日になって、レイピア2の回収に向かった救出体ではあったが、
残されたのは、数個のヘルメットだけだった。
ジョシユアの心に大きく残る作戦となった。

無敵艦封殺

遂にこの日が来た。

ISAF空軍はため込んだ全ての弾薬、ミサイルを倉庫から運び出し、あるだけの戦闘機に実装する。

戦闘機も少ない、パイロットも少ない中、大規模航空編隊が構成された。

メビウスがレイピア、オメガチームを率いて帰港中のエイグル艦隊、コンベース港を。ワルキューレチームが率いるヘイロー、ヴァイパーチームが造船施設、ニューコンベース港を破壊するのだが、状況によって各自の判断で動く。

ISAF空軍は、ノーチラスを含めた空母二隻と護衛艦が数隻、南下してコンベース港付近に停泊し、大陸のコンベース港に近い飛行場を接收、無敵艦隊の壊滅に戦力のすべてをぶつけるために準備が進められている。

補給と退路は確保した。

あとは攻め込むだけだ。

「我々は、これよりコンベース港に奇襲をかけ、停泊するエイグル艦隊を湾内に撃沈する」

数十名のパイロット、オペレータ、オフィサーが詰め込み、ブリーフィングルームが狭く感じる中、ジョシユアは真ん中の椅子に座り、資料に目を配る。

「これはノースポイントに司令部が移されて以来、もっとも大規模で、かつ重要な航空作戦である。作戦時間は長く、作戦途中での補給も必要になるだろう」

作戦を説明する大尉は、姿勢を正し、

「全機、任務を全うし、そして無事帰還せよ」

敬礼する。

全員が立ち上がり、熱意を目の奥にひそめ、敬礼をする。

機動力のあるワルキューレチーム。ジョシユアのF-22に搭載されるミサイルは、機動性、運動性を奪うものの、外部のハードポイントにまで武装された。

最初の攻撃でミサイルをすべて発射したら轉身し、すぐに補給へと戻る。

その間にヘイロー、ヴァイパーチームが戦場で戦う。とにかく、ワルキューレチームは地上目標を沈めることに専念する。もちろん、ヘイロー、ヴァイパーチームも対艦ミサイルを装備している。

レーダーに気を配る必要がある。味方機と離れたら、戦闘機と対空兵器の餌食になる。護衛艦の戦闘能力をあまく見ると海に墜落。

……レイピア2の二の舞にはなりたくない。

作戦の三日前、ジョシユアは接收された民間飛行場のターミナルで一人、格納庫の明かりを眺めていた。

ストーンヘンジの脅威が残るものの、この作戦が完了すれば大陸へと進出する。いずれはストーンヘンジを破壊し、大陸を取り戻す。空を自由に飛ぶ日が来る。

ジョシユアは、この戦争が終わったら除隊して、プロペラ機でも飛ばし、アクロバティックでもしてみたいと考えていた。遊覧飛行もいい。いや、その前に一度、メビウスと酒を飲む。

まずはそれが先だ。

数名の整備士が格納から出てきて煙草を吸いながら休憩を取る。昼夜を問わずして整備を続ける整備班には、その内になにか差し入れても持っていこう。

『オメガ1から各機へ。帰ったらワルキューレ1が一杯おごるそう
だ』

『なに？　ワルキューレ1、貴様だけ給料が入ったのか？』

『ヴァイパー9から全戦闘機パイロットへ。ターミナルの売店から、
賞味期限がまだ有効な酒を買い占めて来るぞ。これは命令だ』

『はははっ、了解した』

そんなことを言ったオメガ1を恨むジョシユアは、整備班に一杯
おごるという話を聞かれた、迂闊だったと苦笑しながらも、

「生き残ることが至上命令だな」

『そうだ、ミサイルを発射しても財布だけはしっかり持っておけ』

『諸君、私語はそこまでだ。戦闘空域に入る、全機、用意』

『了解だ。編隊を崩し、散開』

『すべてのターゲットへの攻撃を許可する！　無敵といわれたエイ
ギル艦隊を沈めろ！　幸運を祈る！』

散開し、メビウス1と離れるということに、ジョシユアの中で不
安な要素が大きくなった。

『久しぶりの大きな作戦だ』

『目標は一つじゃないぞ。各自の判断で行動せよ』

間隔を広く取り、敵要撃機の攻撃に備える。

『造船施設は方位〇三〇、距離六キロ』

『目標が見えた』

『ワルキューレチームがミサイルを全部撃ったら俺たちでここの航
空戦力を潰す。行くぞ！』

造船施設を視認し、待機攻撃モード、HUDが武器庫、タンカーをマークする。

ほとんどがソフトターゲット、ミサイルの一発で吹っ飛ぶ。

「無理して低空を飛ぶと対空兵器の餌食だ。ワルキューレ3、間隔を上げる」

機首を下げ、シーカーがタンカーを捉えた。

『真横から当てるよ』

ミサイルをリリースして上昇、敵航空機の攻撃を味方機が防いでいる間に旋回し、今度は武器庫と燃料庫を狙う。

敵機が味方機を追いまわしているが、助けることはできない。今はそちらだけで対処してもらうしかない。

鋭角なマニューバで敵機からのミサイルロックから逃れるヴァイパー9は、積んできた対地ミサイルを発射して右旋回。ドッグファイトモードで敵F-14を追う。

『空軍はなにしている!』

『武器庫から弾薬を運び出せ! 給油車を下がらせろ!』

再び攻撃に出るワルキューレチームは、タンカーが煙を上げ、ゆっくりと沈んでいく様を見ながら、武器庫をロックする。

『上空の敵機が気になる』

「無視しろ、仲間を信頼しないでどうする?」

四機は同時にミサイルを発射する。

今度は複数同時ロックし、計十二発のミサイルが武器庫、燃料庫、

ターゲットマークされたすべてに推力全開で飛んでいく。

武器庫から我先にと人が飛び出てくる。

燃料庫では誘爆が起き、液体燃料が飛び散って派手に燃えている。

『消火急げ！』

「人が燃えている……あんな風に死にたくない」

F-15に搭載されたミサイルの残弾はゼロだが、F-22にはまだ対地ミサイルが四発残っている。

残りの三機が援護する形で、ジョシユアは旋回するが、ミサイル警告に機体を戻して上昇する。

「どこからだ？」

『四時方向。接近している、ケツにつかれるぞ！』

振り返り、敵機的位置を確認する。

機速が速い。このままミサイルを発射されると逃れるのが難しい。味方機が援護しやすいように上昇し、左に旋回してワルキューレ2の正面に敵機が来るように大きく丸い軌道を描く。

ワルキューレ2がその敵機の後方につき、バルカンを発射し、損傷させる。

『今のうちにターゲットを破壊しろ』

急上昇、地上に垂直降下、四発のミサイルを高速発射する。

ミサイルの速度が速いため、着弾時の衝撃が大きく、増設施設は火の海だ。

『いいぞワルキューレ1。補給に戻り、再度攻撃せよ』

「了解。ヘイロー、ヴァイパー、任せるぞ」

『早く戻ってこい。こちらも余裕ではない』
「わかつている」

造船施設の八〇パーセントを損傷させた。次に狙うはニューコンビナート港。いくらメビウス1とはいえ、エイギル艦隊本体を壊滅させることはまだできないだろう。

敵機の追撃に注意し、補給コースへと機首を向ける。

『信じられん、エイギル艦隊が沈んでいく……』

敵の無線を聞いた時、はっと右を向いた。

エイギル艦隊が湾内で戦闘中のはずだったが、その多くが煙を上げ、沈没を迎えようとしている。

メビウス1とオメガ、レイピアチームは見事な連携で敵戦闘機の攻撃をかわし、最重要目標を破壊した。

空母ジオフォンも甲板から艦載機が流れ落ち、巡洋艦四隻、駆逐艦二隻が完全に沈んでいる。レイピア、オメガの攻撃があったとしても、敵の護衛機の攻撃を回避しての攻撃だ。機体の操縦技術は、今さらだが、本物だ。

高速で飛行し、たった一機だけ飛行機雲の尾を伸ばし、悠々と敵機を落としていくF-22戦闘機。

その尾翼にはメビウスの輪が描かれている。

『メビウス1、補給に向かえ。対空兵装がないぞ』

メビウス1とワルキューレチームが飛行場に戻り、対地、対空、対艦ミサイルを装備に急ぐものの、時間は掛かる。

コクピットにタラップがかけられ、整備士の一人がドリンクを持つてくる。

「味方が苦戦している。敵航空戦力の防衛力は高い」

そんなことを言う。

「わかっている。味方の砲撃でもあれば少しは楽になるだろうに……」

燃料補給が終わり、チェックを終えてミサイルのセーフティピンが抜かれる。

『ワルキューレ1、メビウス1の次に編隊離陸せよ』

「了解」

メビウス1が、ジョシユアと同じく、外部ハードポイントにミサイルを積み、飛行限界ぎりぎりの重量で、滑走路いっぱいを使って離陸する。

対地攻撃にてミサイルを発射し、軽くなったところで空戦を演じる……ジョシユアには真似できない。爆撃機が戦闘機にかなわないと同じで、察機がいなかったら、ジョシユアもこんなに機体を重くし、機動性と運動性を削ることはしなかった。

『ワルキューレチーム、離陸を許可します。戦況はこちら側にあります、ご武運を』

「ヘイロー、ヴァイパーチームが待っている。残弾も少ないはずだ」

ジョシユア以外の察機のF-15は簡単に上がるが、F-22はやや遅れて離陸し、機速も思い通りに上がらない。

早く戦場にならなければ、というジョシユアの気持ちに反し、機体は思い通りに動いてくれない。

先ほどはそれほど機体にストレスを感じることはなかったが、ジ

ヨシユアは、焦っているのだと感じて、同時に、メビウス1に嫉妬しているのではないかとも思った。

『ヘイロー1、4、9、10は補給に戻る。ヴァイパーチームが敵機を抑えていた。ワルキューレチーム、航空戦力を黙らせてくれ』
「わかつている。地上目標、戦艦は逃げられない。ニューコンベース港を破壊するぞ」

『了解』

ヘイローチームが敵機を振り切り、補給コースへと乗る。

ワルキューレチームが高速でニューコンベース港へと飛行し、到着すると、ヴァイパーチームが上空の戦闘機に手を焼き、地上はまだ綺麗だ。

こちらを発見し、要撃態勢の敵機数機にミサイルロック、ミサイルを発射して戦闘を回避する。

「各機、援護態勢を崩すと俺が死ぬ」

『隊長を殺すなんてことしませんよ』

現状で運動性が最悪に低いジョシユアF-22を後方に置き、F

-15の味方機が応戦する。

「対艦ミサイルで潜水艦を破壊する。ドッグから顔を出すから……」

その隙に降下する。

一隻の潜水艦が移動を開始したが、ジョシユアに狙われた。

対艦ミサイルを発射し、地上目標に照準を変え、外部の対地ミサイルを発射したのちに上昇、水平飛行をして速度を上げて右旋回し、敵機に接近する。

注意をジョシユアに向けた二機の戦闘機。その間に、味方機が地

上目標を攻撃する。

F-22のバルカンの射程内にいる敵機は速度を上げ、上昇しようと機首を上げたが、突然エンジンから黒煙を上げて推力を失った。失速してどんどん機速が下がっていく。

機首を下に向けて立て直そうとしたが、空中では静止しているように見える。

ジョシユアはトリガーを引く。

一秒のほどの発射で、弾丸が命中。右の主翼が吹き飛び、エンジンが分解し、藻屑となって落ちていく。

「……」

戦闘中に余計なことを考えると死ぬ。

それはジョシユアが何度も意識してきたことだ。しかし、あんな風に、戦闘機が落ちていく様を改めて見ると、いずれはあんな風に死ぬかもしれない。そんなことを考えてしまった。

『ワルキューレ1 地上目標はまだ残っている。旋回し、破壊しろ』
「……わかつている」

スカイアイからの言葉に目が覚めたわけではないが、まだ航空機も地上目標も残っている。

戦闘中だ。それを忘れるな。

機体を上昇させて対地攻撃モード。地上に機首を向ける。

『コンベース港の壊滅を確認した。メビウス1以下全機はニューコンベース港の破壊に迎え』

メビウス1の力は恐ろしい。
負けてはいられない。

航空戦力の増援があるとの無線があり、ワルキューレチームはヘイローチームが戻る前に地上目標の五十パーセントを破壊した。メビウス1が到着する。

彼は航空戦力の殲滅に集中し、地上攻撃をする味方の援護を行った。

ジョシユアは残った対空ミサイルで敵機を撃ち落とす。ここまでくると、敵の勢いなどはないに等しい。

『味方機がほとんどいない』

『潜水艦がやられた！ だめだ、動けない』

『エイギル艦隊の連絡は？ どうした、やられたのか！？』

敵の無線も聞いていると悲しくなってしまう。

空を飛んでいるのはほとんどがISAF軍機であり、敵機は追われ、やられ、落ちていく。

メビウス1の容赦ない攻撃。

『ベオウルフ・ニュー、撃沈』

ジョシユアに続き、メビウス1は潜水艦を破壊して地上目標を一掃する。

『やったぞ！ 敵は残っていない！』

味方機に被害があったのはオメガとレイピアだけだった。

高度を上げ、海を眺めると沈んでいく艦隊、それに燃える軍港が見え、ジョシユアは、無敵艦隊を倒したのだと自分に言い聞かせた。

『こちらスカイアイ。無敵艦隊は海に沈んだ。作戦終了、全機帰還せよ』

『ワルキューレ1のおごりだ。全員、ターミナルに集合だ』

歓声を聞き、ジョシユアは隣を飛ぶメビウス1に、今度は自分から合図を送る。

メビウス1はそれに応えた。

『……不沈艦隊と呼ばれた大艦隊が壊滅し、エルジア軍はノースポイントへの侵攻作戦の無期限延期を決定した。戦局は依然絶対不利な状況にあるものの、久しぶりの大きな勝利に我が軍の士気は高まっている。よくやった、諸君』

全員、片手にビールを持ち、大尉が杯を掲げると全員がそれに習い、勝利の美酒を飲んだ。

これからが戦争の本番だ。

我々は、エルジアに攻め込む。

大陸深部の目標

ストーンヘンジ射程内での作戦に、パイロット全員が身を震わせた。

それとは別に、ジョシユアはある情報を聞き、悩んでいた。

エルジア軍が掌握する人工衛星の位置が判明し、対衛星ミサイルを発射する計画が裏で進んでいるというものだ。

ミサイルサイロからの発射では敵に諭される可能性がある上に、また、ストーンヘンジの防空圏に衛星があるため、現段階では発射できないと判断された。これにはストーンヘンジの無力化が必須となる。

そのあと、高速攻撃機に多段式ミサイルを搭載して発射する。

そういう段取りではあるが、その際に、高速攻撃機の護衛にワルキューレチームを指名してきた。

エルジア軍の最終兵器ともなりかねない衛星であるために、重要性はストーンヘンジの破壊と同等なものだ。

現在、この衛星についての情報が収集されているが、地上局の位置も、通信傍受もかなわず、難航極まりない。

作戦の実行は決定しているが、決行がいつになるかはまだ不明だ。しかし、いずれはやらなくてはならない。

ブリーフィングルームに入り、照明が落とされ、ディスプレイに今回の作戦内容が表示される。

「今回の作戦は、フェイスパーク地方にある太陽発電所群への攻撃である」

先のエイギル艦隊の殲滅時、ISAF空軍は三日間お祭り騒ぎだった。士気が高まり、このまま一気にエルジア軍を壊滅させてやる

うという勢いまであったが、ストーンヘンジの射程内での作戦ということで、緊張感が全員を襲った。

「この発電所群は原子力発電所並みの発電施設を持ち、エルジアの軍需工業地帯の電力を六〇パーセントも供給している。また、石油やウランなどの原料を必要としないため、輸送路を遮断されても発電が可能だ。この深部攻撃は敵の生産能力を削ぐための作戦であるが、実は、近々実行に移される上陸作戦から敵の目をそらす陽動作戦でもある」

陽動……飛べばストーンヘンジの脅威が待っているところに罔として突っ込むのは、確かに有効的かもしれない。

「健闘を祈る」

ブリーフィングルームからパイロットがぞくぞくと出ていく中、ジョシユアだけが残る、資料を片づける大尉を見る。

「X-02の開発状況は？」

「なんだ、そのことか」

大尉は煙草を取り出し、火をつける。ジョシユアに煙草を勧めるが、断る。

「順調な方だろう。ただ精密機器の資材が足りず、F-22のものを流用し、改造している」

「高級機になるな」

「ああ。資料を見る限り、運動性、格闘能力は高い。燃費の方に問題が残るが、組み立て段階で試行錯誤中だ」

煙草を灰皿に置き、大尉は懷中からディスクを取り出し、先ほどまでブリーフィングで使用していたコンピュータに入れる。

「……機体内部は組み上がり、エンジン等の機関も搭載済みだ。エルジアの技術力は、やはり素晴らしい」

映し出されたX・02の設計図に、組み上げられた部分に色がつけられ、さまざまな角度から撮った写真もスライドされる。

「現段階での完成度四五パーセント、並行して専用兵装も製造中。またアトック飛行場が危険ではないとなると、護衛部隊を引き揚げさせることになる」
「どういうことだ？」

気になる言い方をする。

「エイギル艦隊が壊滅した以上、ノースポイントへの侵攻はなくなる。つまり、防衛部隊の必要がほとんどない。そうならば全航空戦力を作戦に投入する」
「確かに、そうなるな。第一、敵が攻めてこないのであれば護衛を置く必要もないだろう？」
「そうなるな」

機密とされるX・02のディスクを取り出し、懷に入れる。

灰皿から煙草を取り、吸い、

「コンベース港から敵の艦上戦闘機を奪取した。無傷なものが四機、修理して使えるものが三機。地上目標の完全なる殲滅ではなかった証拠だ」

「おかげで戦力が増えた」

「そうだ」

大尉はうれしそうに笑みを浮かべ、煙草の火を灰皿で揉み消す。

「それで、衛星破壊の計画は？」

「問題はそれだ。現在、ストーンヘンジを破壊しない限り、作戦は実行に移せない。ミサイルサイロも確保できていない。高速爆撃機に搭載し、高度三二〇〇フィートから多段式ミサイルを発射する」
「届くのか？」

「低衛星軌道に乗せ、レーザーで静止衛星のレンズを破壊、効力を奪う」

「うまくいきそうにないな」

「地上局がストーンヘンジにあることを期待しているが、どうだろう、今はエルジア軍の衛星だ、あるかはわからない」

二人の悩みは同じだ。

エルジア軍の戦力、技術力は非常に高い。下手な過小評価はできないが、このままなら敵を潰せるかもしれない。エルジア軍を殲滅し、大陸と空を取り戻すのだ。

「……罔か、俺は気に食わない」

オメガ1の言葉に、誰も同意しなかった。というより、全員、罔なんて嫌だった。あえてそれに賛同するなどしない。みな目的はエルジア軍の壊滅である。そのために血を流してきた。今さら、罔程度で怒りはしない。

ジュシユアとしても、やはり気持ちがいいものではない。
メビウス1だってそうに違いない。有効的な作戦ほど危険だとい

うのは当たり前かもしれないが、ストーンヘンジがどれほど恐ろしいものかを、上層部はわかっているのか？

『真北に進めば発電所だ。ソーラーパネルを目指せ』

ちかちかと光るのがソーラーパネルだ。あまり光が強かったので地上と見境が付かなかった。

広範囲に爆撃するために気化爆弾やクラスター爆弾を武装している機が数機、ジョシユアはそれらを守りながらもソーラーパネルを破壊する。

『光っていると綺麗だな』

『気を抜くな、迎撃機が上がってきた。全機、ブレイク』

各機散開、ワルキューレチームが先行して迎撃機を撃墜する。

『対空ミサイルが設置されている。当たるなよ』

ヘイローチーム、ヴァイパーチームが一気に高度を上げ、爆撃態勢に入る。

『ヘイローを援護しろ！』

レイピアチームが散開して迎撃機と応戦。

『ワルキューレ2、3はヘイローの援護』

続いてワルキューレチームがヘイローとヴァイパーを狙うF-16 敵機を狙う。

『メビウス1がSAMを破壊した』

低空から高速で接近し、空の最大の脅威となる対空火器を殲滅する。

早速のお手柄に、ジョシユアは笑みを浮かべてしまった。

敵の迎撃機は十二機を確認、鋭い動きで接近してくる。

『けつにつかれた！』

『ブレイクしろ！』

『ヘイロー9、かわせ！』

『こいつら……！』

ここまで来ると敵の攻撃は苛烈になる。

ISAFの壊滅を目前にして、コンベース港、無敵と云われたエイグル艦隊の壊滅が、エルジア軍にとっては決定的な痛手だった。

これ以上の大陸進出は許されない。

敵パイロットからはそんな心情が感じられた。

ヘイローが気化爆弾を投下し、ソーラーパネルを破壊する。

鏡のように光を反射するソーラーパネルが散り、空がきらきらと光った。

そういえば、初めて戦闘機に乗り、演習をしていた頃、空はいつもきらきらと光っていた。そんなことを考えている時点でパイロット失敗だ。戦闘で余計なことを考えるなど、今まで何度自分に言い聞かせてきた？

ジョシユアは敵機を落とす度に、爆発する機体、誘爆するミサイルを見て、空は輝いていると感じてしまった。

敵迎撃機の撃墜を確認し、ソーラーパネルの先にある変電所の破壊に向かったメビウス1。破壊は簡単に成功し、味方機に損害はなかった。

任務は終わり、岐路につくはずだった。

ジョシユアは、なんだかあつけないものだと言問を抱いた。
敵機がもう少し上がっていてもよかったら、空は味方機だ
けだ。

『ストーンヘンジからの攻撃はないようだ』

誰かが言った。

ジョシユアは、その言葉がどうも引っかけり、まさか、攻撃が来
るのか？ と思った瞬間。

『ストーンヘンジからの攻撃だ！』

A W A C S の通信のあと、パイロット全員に緊張が走った。

『警告！ ストーンヘンジからの砲撃だ。全機、南へと撤退せよ。
高度は二〇〇〇フィートを以下に保て』

『二〇〇〇フィート？ 地面には潜れないぞ！』

なんてこった、やはり攻撃があつた。

現高度を下げ、地面すれすれを飛行しても二八〇〇フィート。こ
のままではストーンヘンジの餌食になる。

そんなのはごめんだ。

空中戦闘で破れ、撃墜されるのならまだ許せるが、長距離からの、
反撃できない状態での攻撃にやられて落ちるなど、ジョシユアには
認めることができない。

マップを確認に、味方機の動きを見てみるとメビウスⅠが急激に
高度を落とし、地面に潜った。そう思ったが、そこには谷があつた。

「谷だ！ 何に逃げ込んで高度を下げる！」

『そんな狭いところ、自殺行為だ！』

「いかなきゃ死ぬぞ！」

『弾数四、着弾まで一五秒』

メビウス1はもちろん、ワルキューレチーム、オメガチーム、レイピアチームは谷の中へと滑りこむも、ヴァイパーとヘイローに遅れが見られる。援護しようにも、谷に入った以上、抜け出すことなどできない。

『着弾まで五秒、四、三、二、一、着弾、今！』

空が歪んだ。

きらきらと光り輝いていた空、キャノピー越しに見る上空はソニックウェーブで歪み、振動が襲った。強い振動に機体のどこかに異常があると警告灯が明滅し、サイドスティックをしっかりと握るジョシユアは、味方機が落ちていくのを目の当たりにした。

『何機か巻き込まれたぞ！』

『ヘイロー7、通信途絶！』

『ヴァイパー9もだ！』

『オメガ11、オメガ5もやられた！』

なんてことだ。

たった一撃で多くの味方機が墜ちていく。

以前の黄色中隊のときとは違う。援護ができない、助けることができない……。

くやしいが、見ているしかない。

『第二波、到着まで十秒』

「ヘイロー2、ヴァイパー10、早く高度を下げる！」

『谷を通り抜けるなんて俺たちには無理だ！』

第二波が来る。

「五、四、三、二、一……インパクト！」

IFF反応が二つ、消えた。

衝撃に機体が揺れる。先頭を飛行するメビウス1に習うしか今はない。

『くそっ！ またやられた！』

いち早くここから抜け出したい。スロットルを全開にしたい。しかし、谷の中を飛行するという行為がどれほど自殺的なことか、ここにいる全員が理解している。

嫌な振動が両翼の先端に感じる。接近しすぎると気流が乱れ、すぐに墜落。スティックを軽く握り、決して大きく動かさない。

死にたくない。

ラダーを上手く利用し、ストーンヘンジからの砲撃の振動も考えて真っすぐに飛行する。

『第三波、十秒前』

全機が谷に入り、高度を低くしているが、目の前には敵戦闘ヘリが待ち受けていた。

メビウス1は機銃で上手く撃墜するも、こちらはそんなにうまくできるわけがない。ジョシユアはミサイルロックされたが、スロットルレバーを上げて高速で振り切る。そうやってなんとか逃げ出すも、また敵戦闘ヘリ……。

『五、四、三、二、一……インパクト！』

『なんて振動だ！』

『またオメガが墜ちたぞ！』

『レイピアも！』

『谷から頭を出すな！ まだ一発残ってる！』

「ウルキューレ2、もっと離れて飛べ！」

『早くここから逃げ出そう！』

それは誰だって同じだよ。

くそつ、計器が乱れる。EMPを食らったみたいにマップから味方機の反応が消えていく。

また、また……。

第四波の衝撃のあと、全機が空域を離脱した。

全機といっても、生き残った機は少ない。

出撃時の三分の一まで減った。

ウルキューレチームが全機無事なのは、奇跡なのか、それとも臆病なだけなのか……。ジョシユアは酸素マスクを外し、大きく息を吸い込む。

後方を見ると砲撃の余韻が残って、まるで蜃気楼のようにきらきらと光っている。

ストーンヘンジを破壊しても衛星が残っている。その状態で、俺たちはどうやって戦っていけばいいのだ？ 衛星の事実を、上層部はわかっているのか？ いや、知っていても軽視しているに違いはない。俺たちはここで戦っている。この場所で、脅威に晒されながら戦っているのだ。

『作戦、完了』

スカイアイからの通信。

完了だと？ 終了したのだ。

帰還し、戻らない仲間に涙を流す者を横目に、ジョシユアは自分

の機体の整備を手伝う。それから、パイロットはブリーフィングルームに集合させられ、デブリーフィングを行う。

「ストーン返事の砲撃により、予想外に多くの犠牲をともなった。やはりストーンヘンジを倒さねば、我が軍に勝利はない」

そんなの、全員わかってる。

壁を殴りたかったが、この体を傷つけては、空を飛ぶことはできない。

ソラノカケラ

一週間後に、コモナ諸島のロケット発射基地から偵察衛星を上げるという話が耳に入った。

それをエルジア軍が察知する可能性もあるということで、ジョシユアは、本格的な空戦が予想されるとパイロット全員に注意していた。

それからすぐに、ブリーフィングが行われた。

ジョシユアの予想通り、敵のコモナ諸島への襲撃が決まった。

「大陸での作戦を支援する偵察衛星を、コモナ諸島のロケット発射基地より打ち上げる」

このとき、この発射基地を利用して衛星を破壊するミサイルを打ちあげることではできないのか、という疑問が浮かんだ。わざわざ高速攻撃機を使用しなくとも、ミサイルは、発射されればすぐに迎撃不可能な高度にまで達する。

これは、大尉に尋ねる必要がある。

意味もなくペンを持ち、くるくると回しながらメビウス1の背中を見た。

最初に出会った頃と比べて、ずいぶんと男らしい……というより、尊敬に近い感情が込み上げてきた。

一種の崇拜にも似ている。

メビウス1の才能を認めない者はここにはいない。少なくとも、ISAFで、メビウス1を軽視する奴はいない。それほどにまで戦果を上げてきたやつが、敵に知られていないわけがない。

黄色中隊……あの明朝に行われた作戦を、ジョシユアは忘れている。

レイピア2のコードネームを持っていた、トム・レイナンド中尉

とは、実は友人関係にあった。

あのとき、一言でも声をかけていれば……最後の会話もなく、トムは五〇〇万バレルの燃料と一緒に海に散った。

同じ航空学校で学び、共に空を飛ぼうと決めたとき、トムと離れた。

戦争が起きて、再会した時の喜びは今でも覚えていたが、お互い、戦争を生き抜いた戦人。抱き合い、友情を確かめるなどという青臭い考えは浮かばなかった。代わりに、チームは違っても背中を守ろうと行動で示し合った。

今だからこそ回想できる。

あのとき、自分には、今ほどの余裕がなかった。

「エルジア軍はこれを察知、打ち上げを阻止するために多数の制空戦闘機を送り込んできた。大規模な空戦になることが予想される」

黄色中隊……やつらもいるはずだ。

「この空の戦いに打ち勝ち、制空権を守り抜く。打ち上げのチャンスは今しかない。一機でも多くの敵戦闘機を撃墜し、ロケット発射基地を防衛せよ。以上だ」

今回もまた、ジョシユア以外のパイロットが部屋を抜け、ただ一人、ペンを回しながら大尉を見る。

「X-02の件か？」

手元の資料をまとめ、ディスプレイを消すと大尉はメビウス1の座る席に腰掛け、煙草に火をつける。

「……メビウス1の情報がない」

「……なんのことだ？」

「お前はいつもメビウス1の背中を見ている」

意外に鋭い男だ。

考えてみればそれもそうだ。一介の大尉が作戦の説明などするわけがない。

「私のことは知っているだろう？」

作戦立案士官……という肩書は知っているし、以前、ISAF軍屈指のパイロットであることも、ジョシユアは知っている。

若いパイロットなら、メビウス1かこのアーバン・ヴァレンティン航空大尉——いや、少佐になった。

彼に憧れを持つ。

ジョシユアだって憧れた、メビウス1が現れるまでは……。

少佐の右足には矯正器具が取り付けられている。

先の戦争で、バイルアウトしたとき、着地に失敗して骨が粉々になったと聞いた。

「メビウス1の本名を知りたいか？」

「どうしてそんなことを？」

「我々が持つ情報でも、メビウス1の名が本当の名前なのかかわからない」

「ISAF入隊だろう？」

「傭兵だった、という噂もあれば、黄色中隊にいたという噂もある」

「すべて嘘くさいというわけだな」

「そうだ」

立ち上がり、灰皿を手にしてジョシユアを見る。

「彼が戦争の主役だ」

「……」

「たった一機の戦闘機、リボンのエンブレムを持つ機体がエルジア軍を追い詰めた。無線傍受で、その言葉を聞いた」

「……敵は、メビウスの輪に踊らされている」

「自分たちが表の舞台に立って主役だと思っていたのに、いつの間に裏側にいる」

「メビウスリング」

「彼が戦争を終わらせる。そのためには、裏に立つ人物も必要だ」
「何が言いたい？」

「ストーンヘンジの破壊が成功したのちに、衛星を破壊するためのミサイルを発射するという話は、以前したな？」

「ああ」

「そのために、ワルキューレ部隊はエルジア侵攻作戦の主軸から離れてもらう」

「!？」

少佐の言葉は、安易に頷くことのできるものではなかった。

作戦から外す、だと？　今まだ自分たちは仲間と共に最前線で、しかも、先の作戦では囷までしたやったというのに、今さら蚊帳の外に叩きだすというのか？

人事権の問題、主導権の問題ではすまない。

持つペンで少佐の目をえぐり出してやりとも思っほどの怒りがこみ上げてきた。

「落ち着け。ワルキューレには、侵攻作戦と同等の難易度を誇る任務が待っている」

「それが、なんだというのだ？」

大陸と空を取り戻す。

それ以上の大義名分があるとは思えない。

「エルジアの管制衛星、ホルスが完成した」

「……まさか、例のミサイル誘導に使用される？」

「そうだ。実働はしていないが、いつ、ミサイルがひっくり返ってくるかもわからない。しかも、情報によれば、ホルスはすべての戦闘機のミサイル誘導を一手に処理できる巨大な演算装置を持ち、こちらが発射したミサイルが、九九パーセントの確率で戻ってくるというのだ」

「なっ！！」

「冗談ではない。

ECMなんてレベルでは済まない。

核ミサイルなみの総合火力を持つことになる。

自分が発射したミサイルが、自分に飛んでくるだと？ そんな馬鹿な話があつてたまるものか。

侵攻作戦から外す……その意味を、ジョシユアは理解した。

「それなら、コモナから衛星を破壊するミサイルを上げればいい」

そう、それを言うためにこの部屋に残ったのだ。

「弾道が違つ上に、ホルスへ接近する直前にストーンヘンジから落とされてしまう。ストーンヘンジの脅威がなくなつてからの話なのだ」

「なら、ストーンヘンジを破壊してからコモナから発射を……」

「静止衛星軌道にあるといえど、ホルスは機動衛星。いつ外宇宙、それに低衛星軌道に移動されるかわからない。エルジアの技術を忘れたのか？」

「……」

ジョシユアには、作戦を立案するだけの力はなかった。
黙って任務に従う。

教官に、最初に言われた言葉を思い出した。

『黄色が煙を噴いてる！ 誰がやった？』

コモナで空中戦闘が始まって五分後に、その無線を聞いた。
味方の無線ほど重要なものはなかったが、ジョシユアは、それどころではなかった。

第一に、ジョシユアはうつろな瞳で空を見上げていた。

座席の無線機から聞こえる敵の声に耳を傾けながら、ただその場に立ち尽くしていた。

戦闘開始から五分後に、ジョシユアは撃墜された。
予想通り、黄色中隊がいたのだ。

『リボンのエンブレムと女神のエンブレムを落とせ』

そんな無線が聞こえたときには、ジョシユアは二機の黄色の戦闘機に追われていた。

メビウス1もまた、黄色の餌食となりかけていた。

援護もなく、ジョシユアはコモナ諸島に伸びるベイブリッジを滑るよつに飛び、急加速、急上昇のちにインメルマントーンして黄色中隊から逃げるのに必死になっていた。

助けてくれる仲間はいない、誰もが手いっぱいだった。
隙を見せたわけではない。

ミサイル警告がなった三秒後に強い衝撃を受けた。
右の尾翼と右のエンジンが吹き飛んだ。

スティックを引き起こし、残ったラダーで踏ん張り、速度を落としてベイルアウトした。

『女神を落とした』

くやしいというよりも、情けないと思った次には、ジョシユアは気を失っていた。

機体が爆発し、空中衝撃ですさまじいGを受けたのだ。

仲間からの無線で目が覚めると、右足に痛みが走った。

気絶しての着地だったが、折れてはいなかったのだから奇跡だ。

衛星を宇宙へ上げるためのロケットが目の前にある。

何もできないまま、空を見上げていると、黄色中隊の機体の一機が煙を上げた。

『……くそつ、どいつにやられた？』

敵の無線。

『今、俺を撃ったやつを確認してくれ』

『……リボンのエンブレムだ』

メビウス1!!

黄色中隊はエルジアの主幹でもある。

損害を出すわけにはいかないとのことだろう、早々に黄色中隊は撤退していった。

『ワルキューレ1、ジョシユア、返事をしろ』

無線機が故障しているため、ジョシユアは返答できなかったが、

『敵がステルス爆撃機を投入した。ロケットの発射も近い。その場所から逃げる、焼け死ぬぞ!』

そうだ。

ついロケットに見入ってしまった。

ジョシユアは痛めた足を引きずりながらロケットから離れるも、距離が近すぎた。

上では敵機を追い詰める味方機が数機、何度かジョシユアの上空を飛んで行った。

『救出機は?』

『制空権が先だ、このままではワルキューレ1を助け出せない』

『ロケットの管制にコールしろ。車を出せ』

『空では戦闘中だ、彼らは軍人ではない』

空がきらきらと光っている。

前にも思い出した。

ミサイルが命中し、四散する機体。

バルカンが命中し、部品を脱落しながら滑降していく機体。

どれもこれも輝きながら、そして死んでいく。

はっと我に返ったのは、腕時計のアラームの音の所為だ。

ロケットの発射まで五分。

まずい。このままでは本当に焼け死ぬ。

空の上で死ぬのはまだしも、陸で死ぬのは勘弁だ。

痛みをこらえてロケットから離れる。

リボンのエンブレムは、現れたステルス爆撃機の撃墜に向かった。

コモナ諸島の空の制空権が確保できたが、ロケット発射のため、

救出へりは出せなかった。

ロケットから一キロは離れているだろう。と安心できるものではない。

近くに身を隠す障害物がないが運のつきだ。

『走れ！ ジョシユア！』

ワルキューレ2の声に、ジョシユアは走った。

このまま死ぬつもりはない。

俺を撃った黄色中隊……、

「黄色の4を撃ち落とすまでは……」

『発射二分钟前』

ステルス爆撃機の撃墜に成功し、空は完全にクリアになった。

ジョシユアの心配をする上の連中だが、ロケットが発射する今、誰も近づけない。

『ジョシユアの姿を確認した、あと少しで観察シエルターがある。そこには入れ』

腰の無線機から聞こえたその声に安堵し、ジョシユアは、すぐの目の前の観察シエルターに走る。

監察員が扉を開き、早く来いとジョシユアを急かす。

『発射三十秒前』

間一髪ところでジョシユアは観察シエルターの中に入り、観察員からボトルをもらう。

「よくがんばった」

「俺は落とされた」

予想以上につらいものだ。

今回の戦争で初めて撃墜されたのだ。

経歴に傷がつく……そういうものではなく、自分はメビウスの隣で飛ぶに値するパイロットなのか、ということに疑問を抱いてしまった。

『発射十五秒前』

「パイロットさん、見なよ」

パイロットスーツで全力したのだ、汗だつてかくし、疲れるし、足の痛みもある中、観察員に言われて、ジョシユアは分厚い窓の向こうにあるロケットに目をやる。

『すべてのISAF機は安全エリアに待避せよ。十、九、八、七、六……』

『ジョシユアは無事か？』

ワルキューレ2だ。

『無事だ、安心しろ』

『三、二、一……イグニッション！』

ロケットノズルに点火し、ロケットが上がっていく。

『ああ、いいぞ！』

『上がれ、上がれ！』

『全システム正常に稼働中』

『ジョシユア、声を聞かせてくれ』

『無線が壊れている』

ワルキューレ2は相当、心配している。

『ロケットは高度四〇〇〇フィートに到達した。もう手を出せないだろう。君たちのおかげで発射は無事成功した』

「本当にあんたたちのおかげだ」

「俺は早々に撃墜された」

「それでも、あんたは背中に女神を背負ったパイロットなのだろう？」

「なんのことだ？」

「噂だよ。戦死者を運ぶ者をエンブレムにするパイロット、ワルキューレ。メビウス1とワルキューレ1はISAFの要」

そんな話は初めて聞いた。

観察員は、空に昇っていくロケットに目を移した。

女神を背負ったパイロット……ワルキューレ。

ジョシユアは、ここで初めて、自分もメビウス1に追いつけるほどの实力があるのだと、自信を持つことができた。

バンカーショット作戦

年末年始を、ジョシユアは病室のベッドの上で、同じように負傷を負った兵士と一緒に過ごした。

オメガチーム、ヴァイパーチームの連中が一度は見舞いに来るが、それ以降は忙しくて顔を見せることはなかった。

次の作戦が始まる。

ワルキューレ2が手土産を持ってきたとき、ジョシユアは、黄色中隊について話をした。

黄色の4はかなりの腕を持っている。それなのにどこか躊躇する部分を見せる。これをどうやって表現したらいいのかよくわからないが、感覚として、親が子に手を挙げるときの戸惑いに似ている……黄色の4は女かもしれない。

この話を聞いたワルキューレ2は笑ってしまった。

黄色中隊の二番機のイエロー4が、女、というのはおもしろかった。女のパイロットを否定するわけでも差別するわけでもないが、どうして背後を取られ、落とされただけでそこまでジョシユアはわかるのだ、というところに笑ったのであった。

ワルキューレ2の笑いにつられることなく、ジョシユアは黄色中隊の話を続ける。

エルジア空軍第一五六戦術戦闘航空団アクイラ隊……通称、黄色中隊。

Su-37を愛機とし、ストーンヘンジ破壊作戦時にその存在を知らしめた伝説的アグレッサー集団。

黄色中隊の隊長は、個人での撃墜数は六十以上と、驚異的なその数字に誰もが脅威と感じたのは、ISAFでは有名な話だ。

誰も黄色中隊とは戦いたくなく。先のコモナ諸島空戦時も、誰も黄色中隊に挑もうとはしなかった。

そんな中で、ただ二機だけが勇猛に挑んでいった。

ジョシユアはまだ知らないだろうが、リボンと女神のエンブレムを持つ戦闘機が、敵にどれほど恐れられているか……。

石油コンビナートの作戦、アーリーバード作戦でも、オペレーターの指示を無視してメビウス1とワルキューレ1だけが、味方を助けるために黄色中隊に挑んだ。

結果として、メビウス1もジョシユアも黄色中隊に傷のひとつを負わせることができなかったが、他に誰があんなことをできたものか。

昔からそうだが、ジョシユアの悪いところは、謙虚で、自分に自信を持たない所。

ISAFで、ワルキューレとメビウスの名を知らない者はいないというように……。

黄色中隊の偉大さを語るジョシユアは、まるで黄色中隊に取りつかれていると、ワルキューレ2は思った。

「黄色の4をやるまでは、俺は死ねない」

目標ができたのは、いいかもしれない。

一週間後にジョシユアは退院した。

快気祝いだけに、多くの人が集まる中、ヴァレンティン少佐も、不自由な足を引きずりながら花を持ってきた。

「同僚からは、俺が花なんて、らしくないと言われたが、まあ、これでもいいだろう」

そう言っただけジョシユアに花を渡して、強い握手をしたあと、耳元で何かと囁き、真剣な表情をして敬礼をしたあと、すぐに去って行った。

嫌な予感がした直後に、

「ワルキューレはブリーフィングルームに集合だ」

最悪だと思った。

「二週間後に行われるバンカーショット作戦において、ワルキューレに先発部隊を担ってもらいたい」

少佐の開口一番に、ワルキューレチームの士気は一気に下がった。それはジョシユアも同じで、囧とされた作戦を思い出した。

「他に味方機は？」

「先発部隊はワルキューレの四機と、再編成した混合部隊の機体が十四機」

「大陸まで距離がある。弾薬補給には海にまで戻る必要がある。」

ラフシーズ作戦のときのように、味方に戦場を任せて補給に戻る、という嫌なことをしなくてはならない。

「地上部隊の上陸に航空戦力は欠かせない。今頼めるのは、ワルキューレしかない」

ごもつともな意見だ。それに、上官の命令に逆らうわけにはいかないというのは常である。それなのに、少佐はまるで自分たちには是非を問うように言う。

ここまた引つかかるところだが、隊長であるジョシユアは黙って頷き、作戦内容を確認する。

「ジョシユア以外はまだ知らないだろうが、ここで、ある事実を伝えておく」

作戦内容を頭に叩き込み、ブリーフィングが終わるだろうと思っ
たところで少佐がディスプレイの映像を切り替え、別の話を始めた。
ついに衛星破壊作戦……サテライト作戦の概要が決まったらしい
と、ジョシユアは緊張した。

「ストーンヘンジ照準補助、及び弾道管制衛星ホルスが完成した。
といっても、なんのことかわからないだろう」

ジョシユア以外のパイロットが疑問視を上げ、ディスプレイに表
示された人工衛星をまじまじと見る。

少佐はこれについての説明を終えたあと、この破壊方法を説明
した。

そのために、作戦の主軸から外れることも……。やはり、これに
は不満があつたようだった。

「ストーンヘンジ破壊がすべての戦況を覆す絶対的条件となる。こ
こでホルスが稼働すれば、我々に未来はない。ホルスの破壊のため
に、ストーンヘンジを破壊する」

緊張……いや、不安だ。

絶対に命中するミサイル。

あれば誰だって手に入れたい。

だからエルジアは、対空兵器として最も完成形に近いストーンヘ
ンジを手に入れた。それにより人工衛星のホルスを手に入れ、改修
し、ミサイル誘導管制に改良した。

今度は、ISAFがホルスを欲しがる。そのために敵を倒す……
一種の輪廻だ。

戦争の繰り返しは今まで何度もしてきたことだ。
だからこそ、誰かが断ち切る必要がある。

「諸君の検討を祈る」

少佐が敬礼する。

ワルキューレチームが立ち上がり、敬礼して退出する。

「ジョシユア」

ブリーフィングルームを出ると、ワルキューレ2——マイク・セレン中尉に呼び止められた。

「知っていたのか？」

「X-02を回収した日に聞いた」

「そんなに前から？ なぜ教えなかった？」

「少佐に、他言無用とされていた。秘密事項だ、わかるだろう？」

「俺たちがホルスを？」

「高速攻撃機に多段式ロケットを載せて打ち上げる」

「それで破壊できるのか？」

「おそらく。それにはまず……」

「ストーンヘンジ」

「そうだ」

「……わかった、呼び止めてすまない」

「いや」

マイク・セレン中尉。

ジョシユアの一年後輩にあたる彼は、機体の整備を趣味としている……というより、分解という妙な悪癖のある奴だ。

整備班の連中とのコミュニケーションから、エンジンの調子が悪い、フラップに異常があるなど、機体を上げる前にそれらの情報を入手し、パイロットのストレスを軽減させている。

彼自身も、不備のある機体で上がりたくないということだが、物

資の不足はISAF軍の最大の悩みである。工廠の稼働も少なく、良い機体は優秀部隊——メビウスやワルキューレ、それにオメガやヴァイパー、レイピアへと優先的に与えられる。

他のパイロットは、言ってしまうえばお下がりに乗っていることになる。

それではあまりにもかわいそうだ。

少なくとも、機体が飛行中に爆発する……これは言いすぎだが、敵から逃れるだけの性能を維持しておきたい。

整備班の気持ちをよく知る男だ。

同時に、不安要素もある。

ワルキューレ2は最高だ。

ウィングマンとして、ジョシユアの考え通りの動きをする……ジョシユアが想像できるということは、敵にも動きがばれているということになる。

マニニアルに従う癖があるのだ。

以前にも注意したことだが、マイクは戦闘機に芸術を求めることなく、模範的な優秀生として動く。

今でもその癖が抜けていないために、ワルキューレチームでの不安はある。

ジョシユアは、実際に撃墜されているために、今は強く言えない。考えてはいけないことなのだが、黄色中隊と戦ったとき、ワルキューレ2はきらきらと光る空で、もしかしたら落ちるかもしれない。そういう考えを振り払えず、ジョシユアは自室に戻った。

「軍の再編成が終了し、すべての準備が整った。いよいよエルジアに占領された大陸を敢行する」

地上軍を支援し、大陸の沿岸から陸上部隊を大陸へと侵攻させる。海上、航空、陸上のすべて参加した大きな作戦であり、戦闘範囲も広い。

北西のクラウンビーチ。

もつとも敵の迎撃が激しいと思われる地点であり、陸上部隊の被害も軽く見ることができない。B部隊の指揮官のベルツはかなりの猛者だと聞く。

北東のカランダビーチ。

勇猛な陸上A部隊がいる上に、メビウス1が最初に援護するビーチだ。

すくなくともカランダビーチに余裕はある。

南西のヘイルビーチには多数の戦車が確認されており、地上部隊は必死の覚悟で挑まないと、ここの突破は難しい。なにより、戦闘区域が広いために、敵の守備も拡散することになる。こちらもその部分を見れば否めないが、敵空軍機が少ない、というのが少なからず救いにはなっている。

「バンカーショット作戦。上陸地点は内陸へと向かう道が狭いため、守備側に有利な地形で、敵の厳しい抵抗が予想される。しかし、なによりストーンヘンジの射程外であることが、上陸地点を決定する重要な要素となった」

空にいる者としては、やはりストーンヘンジの脅威だけでも取り除かれていることに幸運を、というところだ。

下から上からも、はたまた前後からも挟まれて戦う航空機は、陸上部隊が思っているほど強力な兵器とはならないのだから……。

「各航空機はビーチの敵を掃討し、上陸部隊の被害を最小限にとどめよ。以上だ」

パイロット同士がお互いに情報交換をしてコミュニケーションを取る中、メビウス1が少佐となにかを話している。それを気にならないわけがないジュシユアだったが、ふと、少佐がジュシユアを一

瞥した。

自分に関係のある話なのだろうか？

作戦前に余計なことを考えるべきではないが、どうしてもメビウス1のことになるとこう気になるのか。

惚れているのか？

間違いではないが、愛情などはない。やはり、憧れの存在として常に自分の前にいる。

そういうことなのだろう。

一月二十四日。

大規模編成で陸上部隊がビーチに向かう。

先発部隊のワルキューレと以下二十二機の戦闘機、攻撃機が味方の上陸援護に海を飛ぶ。

『敵地上部隊をせん滅する。あと十五分で地上部隊が上陸するぞ』

「ワルキューレ2、3は援護しろ。4は俺と一緒にクラウンビーチのトーチカを破壊する」

『了解』

『敵攻撃機だ』

ワルキューレ3がA-10攻撃機を視認したと言い、ワルキューレ2と二機編隊で攻撃態勢。

正面からアタックし、急旋回してA-10の背後につく。

『貰った！』

バルカンで攻撃、右エンジンに被弾。

速度と高度を失い、A-10は敵陣地のご真ん中に落ちた。

「ミサイルを消費せずに済んだ。対地攻撃モードで高高度が狙う。

ワルキューレ4、援護はいいな」

『了解。ワルキューレ2、3は航空監視。可能であれば敵を打ちのめせ』

『味方の攻撃機が到着。ビーチを綺麗にしてやれ』

『第一攻撃部隊、プリースト。女神に守られての戦いだ、心配事は何もない』

先発の攻撃部隊のプリーストが到着。

F-15ストライクで爆装し、空中で爆発などすればクラウンビーチ全体を照らしてしまうほどだ。

A-10のような完全な攻撃タイプの航空機でないとはいえ、迂闊に目を離すことはできない。

「プリースト、ワルキューレは戦死者を運ぶ。不吉だが、死に神に守られているのと同じだ」

『上等だ。死に神だつて命は選ぶ』

『おしゃべりをやめろ。対空兵器が起動している。SAMに注意しろ』

「高度を低くとるな、ヒットアンドアウェイの基本を忘れるなよ」
『プリースト、了解。新地にしてやる』

五機のF-15Eが高度二〇〇〇フィートから急降下し、スネークアイを投下。

すぐに機体を引き上げ、再度爆撃高度まで上昇する。

敵の地上部隊がプリーストに気を取られている間に、真横からの強襲……としたいところだが、視界が悪く、レーダー反応が弱い。

対地爆撃モードにセットしても、HUDは敵を照準しない。

バルカンで攻撃するが、着弾を確認してはいない。

『ワルキューレ1、地上部隊の上陸まで七分を切った』

「制空権がまだとれていない」

『航空機の撃墜を優先しろ』

「地上部隊が苦勞する。ワルキューレ2、3、なにをしている？」

『護衛機がうるさい、他の味方機はどうした？』

『女神に頼りすぎだ。ヘイルとカランダの航空機は少ない』

「頼りにされるこれだ……プリースト、こちらの援護は最小限と思え」

『了解だ。メビウスはいないのか？』

「あと六分で到着する」

『その前に機体を軽くしておく』

ジョシユアはAWACSからの情報をもとに、敵航空機的位置を把握してスロットルレバーを上げる。

真後ろに援護態勢でワルキューレ4がつき、低空飛行するTNDを捕捉。

『山に当たるなよ。病み上がり』

「冗談を！」

ワルキューレ4の言葉に笑みを浮かべ、高速で旋回してTNDにミサイルを発射。

攻撃態勢で、比較的低速であったためにTNDはミサイルに簡単に食われ、爆発した。

『へりだ！』

Mi-24が山の間を抜けて現れた。

危険だ、このままでは制空権を取ることができない。焦りを感じる中で、コクピットでアラームが鳴った。

地上部隊の上陸時間だ。

『こちらクラウンビーチ、B部隊の指揮官ベルツ中尉だ！　ビーチの制空権が取れていない、話が違うぞ！』

「全機、敵航空機を落とせ！」

そうは言っても実情は難しい。

A W A C S 経由で来るリーダー情報だけでは敵の位置は掴めない。暗いし、有視界戦闘も難しい。何キロも離れていれば、航空機のマズルの光だって星に見えてしまう。

機体を旋回し、B部隊が上陸するビーチに向かい、敵航空機の排除を続ける。

『こちら作戦本部、増援の航空機を送った。彼らが何とかする。海岸線を確保する』

『わかった、努力する。パイロットたちに大陸で会おうと伝えてくれ！　以上！』

『A W A C S から各機へ。増援のメビウス、オメガ、ヴァイパーが到着した』

『やっとか』

「俺たちはクラウンビーチの制空権を取る。プリースト、地上部隊を援護してくれ」

『了解だが、武装の残り少ない。上陸ポイントの敵掃討は完了したが……なんてこった』

「どうした？」

『沿岸警備砲が味方艦を攻撃している』

『空も陸も敵だらけだ。先発の部隊はどうした？』

「上陸部隊を守れ」

焦りを感じているのは自分だけではない。

指揮系統に問題があるのは、再編成して時間が経っていないから

だ。

『上空の味方機にへりを撃ち落とすように言ってくれ!』

『ワルキューレ、敵の戦闘へりが地上部隊を攻撃中だ。なんとかしろ』

『ステインガーは持ってきているか?』

『二つしかありません』

『トーチカが邪魔だ、破壊してくれ』

『こちらオメガチーム、ワルキューレ、援護する』

「制空権が取れていない。プリーストの兵装も少ない、危険な状況だ」

『作戦開始早々、これが。ワルキューレは空を頼む』
「了解」

M i g、T N D、それに戦闘へりの排除はすでに始めているが、こちらの武装も残り少ない。

いったん戻り、再攻撃すべきだろうが、今、このときにこの場を去ることは地上部隊を見殺しにするのと同じだ。

高い位置から急降下してバルカン攻撃。

トーチカを破壊したのち味方を攻撃するM i gを照準し、ミサイルを発射。

警告を聞くなり急旋回して一気に距離を開ける。

S A Mの破壊は地上部隊に任せるしかない。

『戦車を破壊しろ! トーチカは沈んだ、一気に攻め込め!』

『暗くて敵がどこにいるかわからない。迫撃砲はどうした?』

『B部隊は右から回りこめ。味方機が援護しやすい場所に移動しろ』

ワルキューレチームの兵装がほとんどなくなったとき、最後の敵へりを撃墜した。

『クラウンビーチの敵ヘリを全機撃墜！ 制空権を確保！』

やっとのことでクラウンビーチの制空権を取った。

オメガチームが戦場を引き継ぎ、プリーストとワルキューレはいったん引き、補給に入る。

『カランダビーチが苦戦している。再出撃したらずぐに迎え』

メビウス1が苦戦している？

武装、燃料の補給を終えたあと、ワルキューレはすぐにカランダビーチに飛んだ。

『A部隊がビーチに到着』

『作戦本部、あの山の向こうに敵の火炮が布陣している。攻撃してくれ』

『ワルキューレが向かった。地上攻撃を開始せよ』

『了解』

『トーチカをなんとかしないとずっとここにいる羽目になる』

情報以上に対空兵器が多い。

メビウス1とヴァイパーは制空権を確保していたが、地上の対空兵器に悩まされ、思い通りに動けなかった。

対空兵器を破壊するには地上部隊の手を借りるのが一番だが、その地上部隊が動けない。

『ブレイク、地上兵器を破壊する。メビウス1の援護だ』
『了解』

各機が分散し、地上兵器の掃討に入る。

こちらの味方機の数が多く、敵の地上兵器も狙いを絞れずにいる。SAMを破壊し、地上部隊を困らせるトーチ力をメビウス1が破壊する。

『メビウス1、武装補給に戻れ』

メビウス1が戦線を離脱する。

この間は何としてでも戦況を維持、もしくは好転させなくてはならない。

ヴァイパーと連携し、敵の高火力兵器を戦く。

『カランダビーチの制圧に成功！ 引き続き、ビーチの敵部隊に攻撃を仕掛ける』

『防衛線を形成中、時間を稼げ』

『まただ！ 山の向こうから砲撃！ 航空支援、342、092』

『支援要請を確認した。情報を転送する』

ワルキューレ1が対地攻撃モードで急接近し、敵の迫撃砲を破壊する。

『ビーチの制圧は完了……くそっ！』

『どうした？』

『上を飛んでいるのは味方機？』

『違う！ 敵の攻撃機だ！ A-10を確認！』

『クラウンビーチだ！ 味方の航空機はすぐに撃墜に向かってくれ！』

カランダビーチの端にいたワルキューレには遠すぎる。

クラウンビーチにいたオメガが戦闘を開始したが、護衛機が予想以上の強者だ。つわもの

『味方機が少ない！ 援護はまだか？』

『俺たちだけじゃ無理だ！』

スロットルを全開にするが、A - 10が攻撃体勢に入ったと無線で聞いたとき、クラウンビーチの地上部隊の最悪を予想した。
ところが、

『メビウス1！』

まるで救世主のごとく、対空武装で現れたメビウス1。
護衛機を他に任せ、次々にA - 10攻撃機を撃墜していく。

『目標を撃墜』

『いいぞ、メビウス1』

『あいつで最後だ！』

残った一機が捨て身の攻撃を仕掛けようとしたが、メビウス1のミサイルから逃れることはできず、空中で爆砕した。

『すべてのA - 10を撃墜した！ クラウンビーチはB部隊が確保した模様！』

『了解したAWACS。作戦は成功だ。ベルツ中尉、パイロットたちに伝えることはあるか？』

『……』

無線が途切れたように雑音が入ったあと、

『こちらコリンズ軍曹。B部隊を引き継ぎました。支援攻撃を感謝するとお伝えください』

『……作戦本部、了解。作戦を終了する』

あとに聞いた話だが、激戦の末に、ベルツ中尉は戦死した。

ビーチの確保を完了し、みなが歓喜する中、ベルツ中尉は敵の狙撃兵に撃たれた。

最後の最後まで気を抜かない、立派な軍人だったらしいが、地に着けたことがよほどうれしかったらしく、銃を掲げて喜んだらしい。

大陸を取り戻すことが中尉の願いだったと、コリンズ軍曹が言った。

願いは、みんな同じなのだ……。

タンゴ線を越える

ウッドペッカーと名付けられた作戦に、またもやパイロットが身を震わせた。

ストーンヘンジからの砲撃が予想されると、少佐はしっかりと述べたのだ。

高度を下げ、砲撃が終了するまではじっとしていなければならぬい。

ものの数秒だろうが、その数秒で一体何機の味方機が地に落ちる？それを考えただけで、全員、この作戦への異議を申し立てたいところだ。

「タンゴ線は、大陸東部におけるエルジア軍の主要な防衛線だ。特に、その拠点となるイスタス要塞はその特殊な地形により堅固な防備を誇ってきた」

聞いた話では、イスタス要塞は山、丘が多く。そこに基地を作っている。

言ってしまうえば巨大なタコつぼが並んでいるのだ。セオリー通りの爆撃では当たらず、垂直降下からの垂直投下以外に、そのタコつぼの破壊は難しいとのことだ。

「上陸部隊の支援するため、先んじてイスタス要塞を攻撃し、これを無力化せよ。なお、ここはすでに内陸であり、ストーンヘンジからの砲撃が予想されるが、諸君らの翼にはかすりもしまい」

実際、それで済めばいいのだが……。

『こちらスカイアイ。この辺りはストーンヘンジの射程内だ。撃つ

てくるかもしれない、注意しろ』

各機が空中給油を終え、編隊を組んで飛行しているときに、ワルキューレ2が、

『コモナから打ち上げられた衛星は、俺たちを見ているのかな?』

「さあ、何も聞かないからな」

『じゃあ、ホルスは?』

「一二〇秘話通信に切り替える……ワルキューレ2」

怒りを含ませて言う。

『すまない。落ち着かないんだ』

「……俺もだ。ただホルスのことは口にするな、いいな?」

『ああ』

メビウス1が隣から離れていく。

第一目標を補給基地とするメビウス1と付随する機。

一気に敵のふところに攻め込みたいところだが、敵だつて甘くない。

レーダーを一見するだけで、敵航空機の数はずいものだ。

『全機、散会』

『ストーンヘンジにやられるなよ』

『お前もな』

左右、中央と分かれ、各機が作戦を開始する。

「サイオン飛行場を破壊する。全機、続け」

丘の上にあるサイオン飛行場は、非常に狙いにくくはあるが、空中戦闘では敵も同じだ。

地に落ちるか、丘にぶつかるか……それ以上に、対空兵器の配置が、攻撃する側にしてみれば難しすぎる。レーダー情報を元に、直線的に進むことしかできないミサイルを、いかにして丘の向こう側に命中させるかは至難の業だ。

今のメビウス1なら、簡単にやってのけそうだ。

スティックを最大まで引き、旋回し、ミサイルをリリースする。

ハイマニューバミサイルでなら可能……X-02に搭載される高機能多照準ミサイルなら可能かもしれない。

やはり、X-02は必要とされる次世代航空機になるに違いない。ISAFではそのような機体開発は今までされてこなかった。

一機の戦闘機が世界を変えろという神話を誰も信じていないが、一機の戦闘機に搭乗したパイロットが世界を変える、というのは、今なら信じることができる。

『なんてところに飛行場を作る』

「対空兵器に注意……ブレイクしろ！」

ワルキューレチームが大きく編隊を崩し、丘の両脇を通り抜けてから上昇し、編隊を組みなおして同時にサイオン飛行場に攻撃を仕掛ける。

「敵航空機を上げるな！」

『地面にぶつかるなよ！』

四機がミサイルを発射して再度ブレイク。

加速中の敵航空機と駐機していた爆撃機を破壊。

「情報通りにはいかない。敵が多いぞ、二機で追え」

『ああ、ジョシユア、けつにつかれた!』

ウィングマンのワルキューレ2が上昇し、速度を上げて敵航空機を振り切ろうとするも、しつこい。

だからマニユアルを捨てろというのだ。

ジョシユアの背中を守っていたつもりだったが、隙をつかれて自分の背中につかれてしまったワルキューレ2。

敵を追っていたジョシユアは、くつと眉間にしわを寄せて轉身、ワルキューレ2の援護に入る。

『ワルキューレ3はワルキューレ1の援護に入る。ワルキューレ4とヴァイパーは航空機を近づけさせるな』

『残った輸送機が上がりそうだ!』

『無誘導弾を使うな、ミサイルで狙え』

『バルカンでやれる!』

ワルキューレ2の背中についた敵機を打ち落とし、地上目標を破壊したのちに上空の敵機を追う。

ワルキューレ1と2が一機の敵を追い、バルカン攻撃で撃墜。

SAMからの攻撃警告を聞き、ワルキューレ1が急上昇をして回避行動に移ったときには、ワルキューレ2がSAMを破壊。ワルキューレ3と4がサイオン飛行場に残った地上目標、レーダーや格納庫を攻撃する。

『ストーンヘンジからの砲撃を確認!』

緊張。

各機に新装されたレーダーに、ストーンヘンジからの砲撃予想時間と、高度を下げるという警告が表示される。

二〇〇フィート以下でないと、機体は木端微塵……近距離で散

弾ミサイルの直撃を受けたようにばらばらになる。

『着弾十秒前!』

「全機、高度を下げる!」

『敵にやられる!』

「敵だって高度を下げないとやられる」

予兆を見逃した。

敵が高度を下げて低空で攻撃を仕掛けてきた理由はこれだった。考えてみれば、すぐにわかることだが、戦闘中に考えることはやめている。

本能で動く。

サイオン飛行場に敵航空機がいなくなっていたのが騒いだ。

敵に上を、背中を取られる心配もなく高度を落として安全高度で低速飛行する。

『五、四、三、着弾……インパクト!』

空の上で地震を感じたのはこれで二度目だ。びりびりと両端翼がきしみ、計器が乱れる。

『すごい衝撃だ……何機落ちた?』

『まだ全機無事だ。任務を継続』

『山に衝突するなよ』

『おい、レイピア8の反応がない』

『落ちたのか?』

『……撃墜を確認した。あれは、即死だ』

ストーンヘンジ。

反撃できないのがなによりも悔しい。

だが、このタンゴ線を越えればストーンヘンジは目の前だ。
必ず破壊してやる。

『ワルキューレ、サイオン飛行場の制圧を確認した。メビウス1も補給基地を破壊。ここからが本番だ、VTOL基地を破壊しろ』

ワルキューレチームはAWACSからの情報をもとに機首をVTOL基地に向ける。

『VTOL基地は方位二五〇、距離三十マイル』

「タコつぼの基地だ」

『あれじゃストーンヘンジの影響も受けない』

「垂直降下か無誘導弾の投下じゃないと効果がない。今、プリーストがこちらに向かっている。航空機を破壊し、プリーストの進入コースを確保しろ」

『了解』

攻撃、爆撃を任せられたのは、先の作戦で大きな戦火を上げたプリースト攻撃部隊。

圧倒的総合火力を持つF-15Eがタンゴ線に向かっていて。

ストーンヘンジの攻撃もあるため、高度を落として飛行中、あと五分ほどで戦闘空域に到着する。

ワルキューレも、VTOL基地へ飛行する際に高度を可能な限りに落としている。速度を上げたいところだが、地上に激突、なんてことにはなりたくない。

『ストーンヘンジからの第二波を確認！』

『きたぞ。全機ブレイクして高度を落とせ！』

『この野郎、下からの攻撃だ！』

攻撃艦とSAM、それにAAAと戦闘ヘリが低空で防衛線を張っている。

この状態で高度を落とすなど、自殺行為だったが、上にいるより、助かる確率が高い。

『砲撃が止んだ、全機、攻撃を再開せよ』

「無駄弾を使うな、正確に当てる」

『対地誘導弾を使う、援護頼む』

「了解。ワルキューレ2、3、援護しろ。VTOLが上がってきた、撃墜する」

タコつばから垂直上昇するVTOL機、ハリアーが上がってくる。あの状態だと、ヘリよりも狙いやすい。

低空から高速でハリアーを撃墜し、ワルキューレ4の爆撃を援護する。

『当たれよ。二度目は勘弁だ……ビンゴ！』

『ドンピシャだ』

『ワルキューレ、VTOL基地のひとつの破壊を確認。次だ』

「のろのろするな、爆撃高度でストーンヘンジの砲撃があったら回避は不可能だ」

『爆装するべきじゃなかった』

「お前の役目だ。精一杯援護する」

『ストーンヘンジからの砲撃を防いでくれ』

「ネガティブ」

すでに離陸したハリアーが数機、編隊組んでいる。

ワルキューレ1と2がこれを排除し、ワルキューレ3が対空兵器を破壊し、4が爆撃する。

二つ目の基地を破壊したとき、プリストが到着。

空の脅威の破壊を優先し、腹に抱えていた重りを潜水艦基地に落とす。

『ストーンヘンジからの攻撃はないのか？』

『ドックが攻撃された、援護はどうした！？』

『ドックは上からじゃだめだ。正面からドックの中にミサイルを…』

『ストーンヘンジから砲撃だ！』

『またか！』

『ああ、まずい、この位置はまずい。谷の間を飛ぶことになる』

『着弾十秒前。八、七、六……』

『ワルキューレ4、高度を下げる』

リーダーには、ワルキューレ4のIFFが表示されていないが、自分よりも上で戦闘をしているのは知っていた。

『SAMに狙われた！』

まずい！

『今どこだ』

『ドックの裏側、山の向こうだ！』

『四、三、二、一……』

『クリストファー！』

精一杯の声だった。

『インパクト！』

リーダーが乱れる前に、IFFの信号が消えたことを、ジョシュ

アは確認した。

振動に耐え、地上からの攻撃に怯え、仲間の死に、涙をこらえた。

「……ジョシユア、クリストファーは？」

「……IFFに反応なし。AWACS、ワルキューレ4のシグナルは？」

「……確認、できない」

「誰か、ワルキューレ4の撃墜を確認した奴はいないか？」

「……編隊を組みなおす、潜水艦基地はまだ破壊していない」

「ジョシユア……」

「残弾が気になる、燃料もない、早く終わらせるぞ」

『了解』

クリストファー・ヒューイックが戦死した。

まだ泣けない。

メビウス1と他の機体が援護に駆けつけた。

ジョシユアはメビウス1の援護に入り、他の味方機が上空の敵機、対空兵器の破壊に、自然と編隊を組んだ。

これがメビウス1の力なのかと感動しながらも、気持ちは、消えたワルキューレ4に向けられていた。

ISAFでも稀に見る連携で潜水艦基地を破壊したあと、ストーンヘンジから攻撃が来る前に、全機戦線を離脱した。

ワルキューレ四番機、クリストファー・ヒューイック。

尾翼に書かれた女神のエンブレムは、クリストファーの作品だ。槍と盾を持ち、うつろな表情でどこかを見ている。

誰かが間違えて、それをフェアリーだと思った。一時期、ワルキューレチームはフェアリーというコールサインで呼ばれていたことがあったが、作者のクリストファーにしてみれば冒涇もいいところだったらしい。

あれは女神ブリュンヒルデ、勝利の女神であり、我々には勝利し
が残されていない。

などと声を大にして言っていたのを思い出した。

ワルキューレとは、戦死者を運ぶ者を意味する。それをよく思わ
ないやつもいて、死神部隊などと罵られたこともある。

クリストファーは、それでもいい、仲間を必ず連れて帰る。

これには感銘を受けた。

絵を描くことを趣味とするクリストファーに、ジョシユアは信頼
を置いていた。だからこそ、戦闘中、離れて行動することができた
のである。

「要塞は陥落し、タンゴ線突破を果たした上陸軍はロスカナスを占
領した。ここに前線指揮所を置き、大陸深部への侵攻、そしてスト
ーンヘンジ攻撃の拠点とした」

いつまでも感傷に浸ってられない。
ストーンヘンジを破壊する。

翼竜の飛翔

三月十日。

ジョシユアたちワルキューレチームにパイロットが補充された。補充されたのは三名、一人は、先の作戦で戦死したクリストファの交代要員だ。

名はトレイス・ベスクート。トレーサーのあだ名を持つ。

人の飛行を真似して生き残ってきた、人格のないパイロット、という噂を、ジョシユアは聞いた。

ワルキューレチームは、六機で飛ぶことになる。意外にも大きな部隊となった。

対してメビウスチームはメビウス1機のみ。他の部隊がメビウス1の援護を買って出るので、実際にメビウス1が一人で飛ぶことはないが、メビウスチームに入るには相当の技量が必要だ。

「トレイス・ベスクート少尉、以下二名は、今日からワルキューレとして飛んでもらう。チームメイトは今、格納庫にいる。後であいさつして来い」

「了解しました」

立派になったジョシユアの自室で、三名の補充パイロットが敬礼し、部屋を出ていく。

まだ子供のような面をしているのには、誰もが不安を隠せないが、人事部は、それでもISAFの中でも優秀な成績の者を寄こしてくれた。

部屋には少佐もいたが、彼は三人が出ていくなり、苦笑し、煙草に火をつけ、ジョシユアのデスクに座った。

「あのひよっこを連れてストーンヘンジに？」

送られてきた補充パイロットの資料を見たあと、それをデスクの上に放り投げた。

「黄色中隊にやられる前に、対空兵器にやられてしまうな」

「実戦は？」

「ほとんどないに等しい。偵察任務で一〇〇時間程度だ」

「死ぬな」

「鍛え上げる時間がない。連中はどうか？」

「連中？ ああ、クリストファーのことか？」

「お前は忘れていようだな」

「傷口を広げるつもりはない。連中も同じだ」

「それを聞いて安心した。……任務だ」

「……新型機関連か？」

「X - 02、ワイバーンが完成した」

ついに次世代新型機が完成した。

そろそろだろうと予想はしていたが、まだ飛行テストはしていないはずだ。

おそらく、そのために、

「試験飛行をして、実践データがほしい」

「空中で爆発する、なんてことないだろうな？」

「安心しろ。X - 02は、完成したとはいえ実験前の機体だ。実践データを元に生産ラインに乗せる」

「パイロットは？」

「ジョシユア・ヴァレン大尉」

予想していた。

そもそも、補充パイロットが着任のためだけにジョシユアの元に

現れたわけだが、そのためにわざわざ少佐が来るわけがなかった。

「……戦争が終わったあとには二階級特進だな」

冗談を言つて、デスクから煙草を取り出し、火をつける。

「考えておく。ワルキューレを増やしたのは、X-02の護衛のためだ」

「護衛が必要なのか？……それで、いつだ？」

「四日後になる。メビウス1には、別の任務が入りそうだ」

自分の気になることを、この少佐はよく知っている。

「別の任務？」

「エルジア軍の、ストーンヘンジ開発にかかわった技術者、研究者とその家族が亡命を望んでいる」

「……それは、危険だな」

「X-02の最終完成も遅らせるわけにはいかない。だが、この亡命も手を抜けない」

ストーンヘンジの開発に携わっていたというならば、彼らの持つ情報は、ISAFにとっては最高の手土産になる。

「一機の戦闘機が戦争を変える……」

煙草の煙を吐き出し、ジョシユアはなんとなくつぶやいた。

「英雄は剣を手にしたから英雄になったわけではない」

少佐も知っているようだ。

英雄が剣を手にして世界を救うという、物語を。

「わかつている。だが、それが聖剣なら話は別だ」

「頼むぞ」

「……了解」

「綺麗な機体だが、かなり大きいな」

X - 02 次世代戦闘機の完成型実験機。

エルジアの様々な技術が投入され、戦闘機として完成形を誇るこの機体の愛称は、計画名と同じワイバーン。

X - 02 の開発においては、上層部はそれほど期待していなかったそうだ。資材のほとんどは既存の戦闘機の流用であり、その他はすでにエルジアから運ばれていた。

上層部はタッチしていないことになる。

そんな中でジョシユアは試験パイロットに選ばれたのだが、それが名誉なのか不幸なのか、パイロットスーツを着て、ジョシユアは X - 02 に乗り込む。

「離陸の際にくせがあると思います。地上からなかなか離れません」

「つまり着陸も難しいわけだ」

「地面ぎりぎりを滑空することになりますよ」

「注意しよう」

アリスはボードを持ち、X - 02 の最終チェックを行う。

ISAF に来て数ヶ月、アリスはだいぶ痩せた。

日夜 X - 02 の開発に明け暮れた所為か、すこし眠そうだ。

「武装のテストも行う。機関砲、ダークファイアミサイル、QAA Mの性能評価よ」

「長距離AAMか。射程距離は二〇〇キロらしいが、F-14に積まれた、あれと同じか？」

「あれ？ ああ、フェニックス？ 違うわ、もっと軽いし性能がいい。基本的に、X-02はステルス戦闘機。外部にハードポイントを設けておらず、内部格納方式を採用している。搭載数も限られるが、機体が大い分、他の戦闘機と同じくらいの武装が可能」

「これが生産ラインに乗れば、エルジアを倒せるか？」
「その前に戦争が終わるかもしれない」

X-02の主翼にはスリーアローのエンブレムだけが記されており、尾翼にはX-02のロゴと、八の字の中に、上下逆さまの女神が描かれたエンブレムがある。

「あの意味は？」

「部隊章？ さあね。少佐が、輪廻を止めるのは女神だと、変なことを呟いていたわ」

輪廻を、連鎖を止める……なんのことかわからないが、クリストファーが好みそうな絵だ。

『二六から四三までのチェック項目を終了。コンデンサ出力上昇、機体振動、なし。エンジンスタート』

ゆっくりと回り出すERG-1000ターボファンは、ある一定の回転数を越えると急に火を噴いた。

デジタル表示された出力メーターの針が跳ね上がった。
各計器が順調に作動し、最初にエンジンチェックを行う。

『F-22の部品を流用しているから、計器系統に戸惑うことはないでしょう?』

「マニュアルは読んだし、シミュレータの結果も良好だ。新しい車に乗っている気分だ」

『三百億の機体よ、ゆっくりいきましよう』
「了解」

離陸要員が近づき、開かれたウェポンベイのミサイルのセーフティピンを引き抜き、親指を立ててグッドラックと口を動かす。
ジョシユアもそれに応じ、各計器に問題ないことを確認し、アリスでダブルチェックしてから駐機場から滑走路へと進む。

『良好よ』

すでに五機のワルキューレが空で待機し、ありもしないが、警戒網を張る。

「エンジン出力に問題なし」

「燃費が悪いのは相変わらずね」

「かき集めた感ば、残っていますからね」

「これで、お偉いISAFの上層部も納得するわ。それと、エルジアの壊滅に万歳よ」

『ヴァレン大尉、離陸を許可します』

「処女航行だ、穩便に進めよう」

『敵なんていませんよ』

スロットルレバーを倒し、速度計、エンジン出力計、ターボの温度計を確認し、ゆっくりと離陸する。

アリスの言った通り、ダウンフォースが強く、離陸に癖がある。

それも速度を上げることで浮力を生み出し、くん、と機首を跳ねられたように素直に上昇加速していく。

「いいエンジンだ。F-22とも違う」

『ERG-1000、通称スーパードヴァ。新開発された新しい機関を実装したわ』

速度がどんどん上がり、四十度での上昇でも加速度計は限界を知らないのかと思わせるほど上がっていく。

アフターバーナーを点火しなくてもこれだけの加速度を誇る機体を、ジョシユアはF-15以外で知らない。

X-02は機体の状況、加速度、風圧、機体ストレス、パイロットの操縦などをセントラルコンピュータで解析し、高速飛行状態に移行する。

主翼の先端が主翼内部に格納し、尾翼が水辺になり、スーパークルーズする。

『おもしろい機体だ』

ワルキューレ2がX-02に追従しようとしたが、スロットルを上げると、F-15をあつという間に引き離し、飛行限界高度まで上昇した。

『上昇性能に問題なし、可変翼システム、セントラルコンピュータの反応もシミュレーション通り。最大速度を計測したい』

高度三〇〇〇フィートで水平飛行し、V-MAX。

ピンポイント、間の抜けた音が聞こえたが、それがアフターバーナーの点火を知らせるものだったと、計器を見て知った。

一二〇パーセント以上で火を噴くスーパードヴァには、今まで最

強と謳われてきたF - 15も追ってはこられない。

『なんて機体だ!』

ウルキューレ2が声を上げた。

リーダーの性能も高く、出力もF - 22以上……いや、電子戦機と同等の出力を誇っている。

『計算上は二・五だけど、今はマツハ三・一を記録。加速度は最高ね』

「武装、運動テストだ。目標空域に向かう」

『ジョシユア、置いていくな』

「いい性能を発揮する。……燃料に不安は残るな」

『これ以上、機体に空きはないわ』

「だろうな」

本来であれば主翼内部に燃料タンクを設けるはずなのだが、X - 02はその奇抜な可変翼から設けることができず、燃料タンクは、通常の戦闘機の半分ほどしかない。

アトック飛行場から百キロほど進んだところに、ゴムボートの上に置かれたビーコンを、リーダーが捉えた。

二メートルほどの目標を繊細に捉えるリーダー。HUDがオートに設定、対地モードに切り替わり、ジョシユアは多照準ミサイルをセツト、発射する。

『フォックス2……ヒット』

海面ぎりぎりで信管が作動し、爆発する。

『バルーン上げる。ダークファイアの性能を見せて』

最大で四機までを同時ロック長距離多照準高速ミサイル、ダークファイア。

X-02の機動力を見据えての長距離ミサイルであり、X-02専用武装。

マスターアーム・オン、長距離モードでシーカーオープン。

「バルーンを捉えた」

HUDが四つの目標をロックオン、AMMTモードに切り替え、ミサイルをリリースしようとしたとき、

「警告音？」

ピーと、自機がミサイルロックされていると警告してきた。

こんなところに敵がいるわけがない、誤報とだとスイッチを一度切るも、またブザーが鳴った。

「システムに異常だ。ミサイルロックされたと……ワルキューレ2」

『ああ、ジョシユア。やられた』

ジョシユアはマスターアームをオフにして、推力を最低にして水平飛行し、バグミラーを見て眉間にしわを寄せた。

「どういふつもりだ、ベスクート少尉？」

IFFのスイッチを切っている。
情報部しか知らない極秘情報だ。

三機のF-15がワルキューレ2、3、それにジョシユアの乗るX-02に照準を合わせている。

『こういうことです。女神の背中についた』

距離五百メートルほど離れた後方から、トレイス・ベスクートが、X-02を眺めながら言った。

『裏切り者だ!』

「そもそも私はエルジアの人間だ」

くそつ、やられた。

スパイが潜り込んでいた。

ISAFだって馬鹿ではないが、この戦況で敵が裏工作を仕掛けてくるのは予想していた。それでも本物のスパイは簡単に潜り込んでしまう。

トレーサーの意味がなんとなくわかってしまった。

対象の特徴をとらえるのは、スパイのなり済ましの技術であり、戦闘機を操縦できるということは、そんじょそこの奴とはことなる。

しかも、三人も？

『ワイバーンの開発が、まさかISAFで行われていたとは驚きだが、ジョシユア隊長、ストーンヘンジの防空圏まで御同行願おう』

「悪いが、それだけの燃料はない。落ちるぞ?」

『フェリー航行ならぎりぎりタンゴ線を越える。我々はISAFの敵味方識別コードを持つ』

「……してやったり、とでも言いたいのか?」

『その通り。ワルキューレに配属されたのは感激だ。しかも、最初の任務がX-02の警護……好機としか言いようがない』

ISAFは、混合部隊で構成されている。

だからこそ侵入は安易となるのは、最初からわかっていたし、今振り返る必要もない。

今は、どうやってこの状況から逃げ出すか、だ。

『トレーサーの異名を聞いてみたいところだが、このまま舵を切るしかなさそうだ』

「協力的でよろしい」

『ジョシユア！』

「黙って従え。ストーンヘンジのときと同じだ」

このとき、ワルキューレ2とワルキューレ3は、これがジョシユアからの隠語だとすぐに理解することができた。

長年一緒に戦ってきたからこそわかる、ジョシユアの、いつもとは違う口調。

ストーンヘンジは高度を落とし、隠れないとやられる……高度を落とせ？ ブレイクダウンしろと？

迷っている暇はない。

スティックとスロットルを強くに握り、ジョシユアの次の言葉を待つ。

『まさに、今の我々はストーンヘンジ同じだな』

「ISAFのスリーアローを甘く見るな」

スリーアロー……三機の戦闘機。

今だ。

ワルキューレ1、2、3は息をそろえてマイナスGで一気に降下した。

『なに！？』

『女神をなめるな！』

ワルキューレ2と3が素早く敵の後ろに食らいつき、ジョシユアは、トレイスのF-15に追われた。

トレイスはすぐさま反応できた。

「意外にやるな」

『ワイバーンの性能を見せてみる』

X-02は高度一五〇〇〇フィートで急減速する。

両端翼が展開したところで機首を持ち上げて、一回転して見せた。

『なんだと?』

「機体性能さまさまだ」

スロットルを戻し、トレイスの背中にぴたりとくつつき、バルカン攻撃。

高度八〇〇〇フィートでトレイスはバレルロールしたのちに背面飛行からの上昇、マイナスGに耐えながら、今度は急降下してジョシユアを振り切ろうとした。

スティックを振り、機体を反転させてF-15を追いながらミサイルの選択。

Q A A Mの発射用意、F-15をロックする。

『低空飛行が苦手なのは知っている』

さらに高度を落とし、一〇〇〇フィート以下で水面を滑空するようにならなうに飛ぶF-15。

このままミサイルを発射しても、波がノイズになって命中する可能性が低い。それに、X-02は、低空ではその真価を発揮できない。

アリスの言うとおり、X-02は低空侵入機ではない。ステルス性を重視しているが、F-5のように底部が綺麗ならいいのだが、X-02のエアインテークは他の戦闘機とはまるで異なる。翼の形状もさることながら、速度変化による可変する翼が、水面ぎりぎりまで可変したとき、どれほどの力が加わるかは、ジョシユアにはまだわからない。

低空飛行を中止し、無茶だとわかっていながら、バルカンで攻撃する。

が、低空を、それも水面上を飛行する戦闘機に命中させるのは至難の業だ。

こちらは機首を下けているので、もちろん高度は下がる。

低空を飛行するのは危険だ。

主翼、尾翼が可変し、高速飛行に入る。

リーダーを見て、ワルキューレ2、3が有利な位置で戦闘を続けていることを確認すると、ジョシユアは次に、自分の心配をした。燃料計。

まだ余裕があるものの、このまま持久戦になれば、勝つのはF-15だ。

『その程度の性能しか発揮できないのか？』

馬鹿なことを言う。

ジョシユアはトレイスに背後を取られたが、右旋回。トレイスがついてくるのを確認し、速度を上げて弧を描く。ドッグファイトをして見せる。

『馬鹿が』

主翼展開、高い運動性を見せるX-02。

ジョシユアは、スロットルを全開にすると同時にブレーキも全開

し、ブラックアウト、または機体が分解する勢いで旋回する。

両端翼がきしむが、この程度なら大丈夫だと信じるしかない。

機体が、Gをかけすぎている、危険だと警告するが、今はそんなことにかまっている暇はない。

高速で小さな円を描き、F-15の背中についた。

好機は逃さない、舌舐めずりもしない。

『くそっ！』

近距離戦闘モード、QAAAMをセット。

シーカーがF-15を捉え、ロックオンが表示される。

「トレイス」

必死に逃げ、高度を下げようとするが、もう遅い。

「ワルキューレの真似はできなかったな」

ミサイルをリリース。

振動もなく、QAAAM高機動高運動ミサイルが発射される。

HUDでは、ミサイルの着弾まで四秒。

『死神があー！』

ヒット。

右エンジンに命中し、爆発。

主翼が吹き飛び、次にコクピット部位が分裂し、機体自体は自爆装置が働いて大きく爆発した。

脱出は確認できない。海の藻屑となるために落ちていく。

『スパイを始末した』

ワルキューレ2と3が、X-02の両隣で飛行する。

「……アリス、聞こえるか？」

『ええ、しっかりと』

「機体の性能は確かだ。戦闘試験も行った」

『戦闘中に、様々なデータを収集したわ』

『あの野郎、ISAFが再編成されたときにはいたはずだ』

「長期任務だ。それに、いい動きをしていた」

『敵を褒めるのは黄色中隊だけにしてください』

「あいつらは、本物だ……」

機首をアトック飛行場に向けたジョシユアは、少なからず、味方を撃ち落とした、という罪悪感があった。

スリーアローに女神のエンブレムをした機体にミサイルを発射したとき、散っていったオメガやヴァイパーを、思い出してしまったのだ。

ストーンヘンジ攻撃

「ISAFを長く苦しめてきた巨大兵器、ストーンヘンジを攻撃する」

クラッシャー作戦。

ストーンヘンジを破壊するための作戦。

戦争を終結させるための要……死んでいった仲間たちを弔いのためにも、成功……いや、破壊以外の言葉を用いることできない、ISAF最大の作戦。

かつてISAFは、最高のパイロットを選抜し、航続距離の問題から少ない爆弾を積んだF-15E十二機と、護衛機としてF-15C十二機による特別攻撃部隊を編制した。作戦は満を持して実行に移される。

攻撃部隊が目標——ストーンヘンジに近づいたとき、作戦空域を監視していたAWACSのレーダーに五つの機影が映し出された。

有名な話だ。

突如現れたこの不明機は、その恐るべき戦闘能力でF-15を次々と撃墜。

ISAF機も応戦するがその抵抗もむなしく、部隊は全滅する。

……ストーンヘンジ攻撃作戦は失敗に終わり、その数日後、ロスカナスは陥落する。

ISAFは否応なしに、大陸北東に位置する島国ノースポイントに撤退した。

今度は心配しない、ストーンヘンジと共に、恐怖とされる黄色中隊をせん滅する。

「隕石を打ち落とす目的で作られたシステムなので、高速で移動し、軌道の予測が困難な少数の戦闘機なら接近できる。亡命した技術者たちからの情報によると、中央のジャミング装置がミサイルの誘導を妨害している」

メビウス1は、技術者を乗せた民間機の護衛を難なく完了したと、ジョシユアたちは帰還したあとに聞かされた。

「これを破壊せねば、作戦遂行は困難だろう。司令部では出撃機の四十パーセントの損失を覚悟している。困難な作戦だが、避けては通れぬ道だ」

そう、みんなこのときを待っていた。

「大陸の空を取り戻せ。以上だ」

X-02の航空データを元に、アリスたち研究者はX-02の最終調整に入る。

新たにテストパイロット（情報部に身元を現れた者）が選出された。

燃料に関しては、これ以上の改善は見られないとのことで、エアインテーク、ミサイルウェイポンベイの間に脱着式増槽を取り付ける改造を行い、長距離移動作戦時の行きがけだけの燃料を確保した。空中戦闘に関しては、端翼の展開と格納のプログラミングを調整し、格闘戦の最中に高速飛行モードにならないようにと書き換え作業が進められている。

少佐は、すでに生産ラインへ載せるための準備を進めていたようだが、ストーンヘンジの脅威がなくなればその必要もないと言っていた。ただ、最初の一機がメビウス隊に配属されるのは間違いない。それと、トレイス・ベスクードの件については、上層部で、エル

ジアがX-02を重要としていることから、注視しはじめた。

少佐が、生産ラインに乗せるのは簡単だといったのは、このことが要因であった。

それ以上に、ISAFにスパイがいることは大きな問題となった。トレイスのことが外部に漏れることはなかったが、諜報部がこそと動いているのはわかる。

ただ、空中で戦ってきたパイロットに、その疑惑の矛先が向けられることはなかった。

……当たり前だ。死を覚悟して飛んでいるというのに、このブリーフィングルームに敵がいる、などと言ったら、クーデターが起きってしまうかもしれない。

ブリーフィングが終わったあと、ジョシユアは、談話室のソファにどっと座った。

他の部隊が資料を目にして打ち合わせをしている。ワルキューレのメンバー……マークと、ワルキューレ3のガブリエル・シューベツツ少尉がいるも、二人とも、静かに椅子に座っているだけだった。クリストファーが死んで、裏切り者を始末した……どうしても休養が必要だった。

談話室の壁には、大きなボードに収められた写真が飾られている。二十四人と三人が写っている写真なのだが、三人だけが顔を黒く塗りつぶされ、

『俺たちは臆病者』

と書かれていた。

……AWACSに搭乗するオペレーター三人の言葉である。

この写真は、最初のストーンヘンジ破壊作戦の前の日に撮られた写真である。

十二人の攻撃隊と、十二人の戦闘隊……ストーンヘンジを目の前に、黄色中隊に潰された英雄である。

誰もがこれを見るたびに恐怖を思い出す。

ストーンヘンジと黄色中隊。

だが、我々には切り札がある。

メビウス1という英雄と、X-02という聖剣が……と、写真を見ていると隣に誰かが座った。

メビウス1だ。

地上で、こうやって会うのは初めてだ。

精悍な顔立ちをしていて、今年で三一歳になるジョシユアと比べて、明らかに若い。

二人はなにか話すわけでもなく、写真を見続け、無言の中で意思を疎通し、覚悟や決意を見せた。

これで十分、メビウス1と連携を取ることができる。

はたから見れば、それは、最強の名を持つ二人が、完全なる意思の下で結束を固めた……パイロットのモチベーションは一気に上がった。

二〇〇五年四月二日

『私は、またここに戻ってきた』

A W A C S に搭乗している三人にとっては、ここは地獄に違いない。

誰もがオペレーターの言葉に耳を傾け、そして、彼ら三人にしか分からない悔しさを理解しようと噛みしめ、死んでいった仲間を思い出し、全員、敬礼、賞賛した。

『これまで、多くの英雄がストーンヘンジによって散っていった』

全員が息をのみ、そして、次の言葉を待った。

『そろそろ新しい英雄が必要だ。全機、必ず生き残れ！』

『よし、いくぞ！ オメガ、了解』

『ヴァイパー、了解！』

『レイピア、了解』

『プリースト、了解！』

「ワルキューレ、了解。全機、メビウス1に続け！」

低空でのフルスロットル。

メビウス1を先頭に、二十機以上の戦闘機がストーンヘンジに向けて突き進む。

『ストーンヘンジからの砲撃だ！ 絶対に頭を上げるな！』

『対空砲火を確認！ 散会しろ！』

対空砲、対空ミサイルが地雷のごとく配置されている。

ISAF機は一気に散会し、攻撃目標をストーンヘンジのみとしてさらに加速。

対地ミサイルをセットする。

頭上をすり抜けていくようにストーンヘンジのレールガンが砲弾を発射する。

少なくとも三基が同時、断続的に発射しているので、絶対に高度を上げることなどできない。

『地上部隊はもちろん、海上から支援の一つもない。僚機だって当てにできない状況だ、各自で動き、砲台を攻撃しろ』

『メビウス1が対空砲火を突破した』

『中心のジャミング装置を破壊しろ。各機、攻撃用意』

「マスターアーム・オン、対地攻撃スタンバイ、プリーストとオメガは積んできた爆弾を落としてやれ」

『了解だ。ワルキューレ、ヴァイパーは空を頼む』

メビウス1がストーンヘンジの懐に入り込む。

サークル上に八基のハイブリット式レールガンが並び、一基が使用不能。一基のレールガンにつき一つの対空砲が設置されている。おまけに、中心には誘導弾を使用不能にする強力なジャミング装置がある。

メビウス1はストーンヘンジの真上で急上昇し、垂直降下しながら機銃の発射。

ジャミング装置を破壊する。

『メビウス1がジャミング装置を破壊した。全機、攻撃しろ！』

「こちらは戦闘機を落とす」

『プリーストとオメガがアプローチに入る』

『ワルキューレ1、援護してくれ、奴を狙う』

「あの敵戦闘機だけ、いい動きをする」

敵の一機に、動きのいい奴がいた。

そのF-2戦闘機は小型機ならではの動きを見せ、追尾するワルキューレ2を振り切った。

バルカンで何度か牽制し、ミサイル・ロックしようとするが、F-2は気持ちいいくらい、簡単にインサイトから逃れていく。

『一機に時間をかけるな』

『戦闘機が上がる。メビウス1がストーンヘンジを破壊した！』

一瞬だけで目線を地上に向けると、巨大なハイブリット式レールガンが、砲身をもたげ、黒煙を上げて各所で爆発を起こしている。

『いいぞ、メビウス1』

『残り六基だ』

ワルキューレ1がワルキューレ2と共にF-2を狙う。
持ってきた弾薬はすべてなくすつもりだが、こんなところで無駄弾を使うつもりはない。

加速し、F-2を中距離でロック・オンし、ミサイルをリリースする。

ワルキューレ2から逃れるために一時減速して旋回していたF-2は、ミサイルから逃れることができず、機体のど真ん中に命中した。

『メビウス1、右に対空砲!』

プリーストが対地攻撃アプローチ。

メビウス1は味方が狙いやすいように滑らかな軌道を描き、オメガとプリーストが対空兵器を破壊する。

メビウス1は対空兵器のなくなり、無防備となったストーンヘンジの機関部にバルカン攻撃し、ミサイルを発射する。

機関部の装甲が破壊され、煙上げて沈黙する。

『やったぞ!』

『メビウス1 いいぞ、やっちまえ!』

『目標、残り五つ』

メビウス1が低空を飛行し、対空兵器の注意を向ける。

それに呼応し、味方機が対空兵器を破壊し、砲台への攻撃コースの邪魔を排除する。

誰が言ったわけでもなく、指示したわけでもなく、誰もがメビウス1の動きを理解し、役目を果たす。

言葉のない、行動だけでの連携は、メビウス1だからこそできるのだ。

ワルキューレ1は敵戦闘機のせん滅に躍起になっていた。

砲台を攻撃する連中に、これ以上、余計な心配をかけるわけにはいかない。

地上の対地ミサイルの恐怖を振り払い、空高くまで上昇した敵F-15を捉える。

HUDのシグナルが敵機体を捉え、点滅し、ロック。

ミサイルを発射し、ブレイク。

着弾の確認を僚機に任せ、地上攻撃を仕掛けているプリーストに急接近した敵機をバルカンで攻撃し、注意をそらす。

急上昇したのち、三百メートルという近距離でミサイルを発射してスロットルを全開。右に旋回し、一度機体を立て直してレーダー情報を確認。

メビウス1は、バルカン攻撃で砲台に傷をつけ、プリーストが無誘導弾などの高火力対地兵器で破壊する。

『あのリボンだ！ リボンを落とせ！』

『一機にストーヘンジがやられるぞ！』

敵の無線を聞いた後、ストーンヘンジから離陸しようとした機体があったが、ワルキューレ1はバルカンで破壊し、滑走路を使用不能にした。

『残り四つだ』

空に残る敵も少ない。

増援も、思ったほど来てはない。

積んだ爆薬をすべてストーンヘンジに落としたオメガが高度を上げ、味方の援護体勢に入る。

対空兵器のない砲台に狙いをつけてミサイルを発射するメビウス1は、一度の攻撃では破壊できなかったために旋回し、加速をつけ

てバルカンで攻撃するとけたたましい爆発音と煙上げて砲台が轟沈した。

『残り三つだ！ I S A Fの本気を見せてやれ！』

『黄色中隊はまだか？ このままでは本当に持たない！』

対空兵器の排除を続けるオメガ8が、突如I F Fが姿を消した。

『味方が落ちたぞ！』

『オメガだ、なんだ？』

オメガ8は、その大きさから砲台を視野に捉えておらず、直撃した。

運が悪いのか、すでにメビウス1が破壊していた砲台だった。

『くそつ、敵の動きが良くなった？』

あとがなくなった敵は、レイピア4の背後につき、三発ものミサイルを発射した。

『逃げ切れない！』

『ブレイクしろ！』

速度を上げて高度を取ったとき、レイピア4にさらなる悲劇が襲いかかった。

S A Mがレイピア4を捕捉し、ミサイルを発射した。

計四発のミサイルに狙われ、絶望的状况でも、レイピア4はチャフ・フレアを散布し、まだ稼働している砲台に機首を向けた。

嫌な予感がした。

誰かが「やめろ！」と叫んだ。

生き残ってこそ英雄だ、ここの死ぬわけにはいかない。

出撃する前に、みんなが言ったのに、それなのに、レイピア4は

……、

『メビウス1、あとは頼んだぞ』

最初の一発がレイピア4の乗るF-15の右主翼で爆発した。

ベイルアウトするには速度が速すぎるし、衝撃で気を失ったのか、脱出する気配も、無線にも応答しない。

煙を上げて、砲台に突撃し、爆発する。

追従していたミサイルが目標を見失うも、直進し、砲台に直撃し、爆発した。

『レイピア4が砲台を破壊……残り二つ』

『あの野郎！』

『英雄になろうと思うなよ！ あんな真似をしたら俺が殺してやる！』

罵倒……違う、みんな自分と同じだ。

悲しくて、泣きそうになるが、今はそんなこともできない。

ウェポンベイを開き、墜落したレイピア4の真上を飛行して砲台にミサイルを発射してブレイクするメビウス1。ワルキューレ1は、両機を指揮して急降下。速度を上げて、メビウス1と同じ砲台にミサイルを発射する。

『残り一基だ！』

『全機、持ってきたミサイルと無誘導弾を落としてやれ！』

空の敵機を撃ち落とし、上空から大量の対地ミサイルが砲台に直撃した。

『畜生！ ストーンヘンジが死んだ！』

空を支配してきたストーンヘンジを、我々は破壊した。

『イヤーホオ！！』

『ウィーアー！』

『ストーンヘンジの破壊を確認！ 視認している、一基を除いてすべて煙を上げている！』

『こちらスカイアイ、レーダーでもストーンヘンジの破壊を確認した』

メビウス1が上昇し、編隊を組むワルキューレチームの隣を飛ぶ。その他の機も、幾分、数は少ないが、大きな編隊を組み、悠々とストーンヘンジの上を飛ぶ。

『バカンスはまだ早い。ただでは帰してもらえないらしい』

ワルキューレ1に緊張が走った。

『五機の機影が、マッハ二で接近中』

全機が、命令もなしに一斉にブレイクし、メビウス1とワルキューレ1だけが、悠然と水平飛行する。

『大丈夫だ、こちらのエースはやつらよりも速い！ 交戦を許可する！』

「……いくぞ！」

メビウス1とワルキューレ1がスロットルを全開に。

黄色中隊は、この二人にとってはいまわし存在であり、ワルキューレー1にとつては、宿敵でもある。

コモナで自分を落とした黄色の4……今こそ復讐と弔いをさせてもらう。

五機で、綺麗な編隊で飛んできた黄色中隊に、メビウス1とワルキューレー1、その他の機が正面から一斉にミサイルを発射する。

黄色中隊は各機ブレイクし、四方八方に散会。

ワルキューレー1は、メビウス1と共に、やや編隊から離れた黄色の4に狙いを定めた。

これが本命の機体だ。

その機体を、メビウス1と狙うぞと通信したわけでもないのに、二人とも、息は揃っていた。

『単独で狙うな！ 二機、三機で狙え』

『こいつらには多くの仲間がやられた』

ヴァイパーが編隊を組み、一機の黄色中隊を追う。

そこには13の文字があった。

『くそつ、簡単にかわしやがる』

『ヴァイパー7、後ろにフランカー！ 旋回しろ』

『無理に突っ込むな、メビウス1とワルキューレー1に任せろ』

『これ以上速度が出ない……うわっ、やられた！』

ヴァイパー7の右主翼から煙が上がり、速度を緩めて脱出した。ワルキューレー1は、速度をさらに上げて黄色の4をつけ狙うと、急減速し、コブラをしてワルキューレー1のF-22を出し抜いた。

これが狙いだった。

完全にワルキューレー1に狙いを定めた黄色の4。

ワルキューレー1は、自ら囷になり、メビウス1が攻撃しやすいよ

うに高度を取り、黄色の4からの攻撃をかわしながらも位置取りは忘れない。

『リボンの機に注意しろ』

燃料計に目を向けると、正直限界だったが、機速を上げ、降下する。

メビウス1はその行動を見逃さず、ミサイル・ロック、発射。

黄色の4が追撃をやめ、ブレイクするが、今度はそこにワルキューレ1の追尾が始まる。

ミサイルから逃れるために、高速で急な軌道を描くが、しっかりと捉えることができた。
落ちろ。

ミサイルを発射する。

ミサイルはメビウス1のよりも早く着弾するだろうが、黄色の4は急減速し、曲芸を披露してくれるのかと思ったら、失速ぎりぎりで旋回し、マタドールのようにワルキューレ1の発射したミサイルを回避した。

やってくれた、と思ったが、そこまでだった。

そこからの速度復帰は不可能に近く、メビウス1の発射したミサイルが、黄色の4の機体に直撃した。

機体が四散し、落ちていく。

『メビウス1が一機撃墜したぞ！』

やった、ついに黄色中隊の一機を落とした。

『イエロー4、脱出しろ』

『……』

『こちらイエロー13、イエロー4の脱出を見た者はいろのか？』

四機となった黄色中隊は素早く轉身し、高速で戦場を離脱していく。

『メビウス1、他の機影も撤退していく!』

『黄色中隊機、一機の撃墜を確認した! 我々の完全勝利だ!』

『やったぞ!』

『空だ、俺たちの空だ!』

自分で宿敵としていた黄色の4を、自らの手で落とすことはできなかったが、メビウス1の一撃ですべてクリアになった。悩みを解決したかのように、ジョシユアには、明るい未来が見えた。

戦闘が終了し、デブリーフィングを終えて談話室に戻ると、壁に掛けられていた写真に変化が見られた。

俺たちは臆病者、と書かれていたが、それが黒く塗りつぶされ、ストーンヘンジで消えてしまったパイロットの写真が張られ、

『英雄はすぐそこに』

と、新しく書き加えられていた。

そう、英雄は、俺の隣にいる。

元凶の破壊

ストーンヘンジの破壊が完了し、地上部隊がストーンヘンジの地上基地の制圧とスタツフの確保に成功した。

少佐は、衛星ホルスの受信基地があると予想していたが、他の衛星とのリンクシステムは発見できたものの、ホルスの管制はストーンヘンジでは行っていないかった。

当初、ミサイルを管制する人工衛星は七基あると思われていた。

七基ともホルスだと予想していたが、調査結果とアリスの報告でホルスは一基だけで、残りの六基はあくまでも補助衛星でしかなかった。だが今になって、補助衛星にもホルスと同等の管制システムが搭載されている可能性がある、とアリスが言った。

さすがの少佐も頭を抱えた。

今更、七基のうちのどれかに当てる、などはできない。当初から予定されていた、多段式弾道弾を高速攻撃機に搭載して衛星軌道上に打ち上げ、ホルスであると予想される一基の人工衛星を破壊するしかないと言った。

今後、中立都市サンサルバシオンの奪還が予定されているが、その間にもやることは沢山あるのだが、ホルスの破壊も優先事項となった。

作戦決行。

高速攻撃機として使用されるのはXB-70ヴァルキリー。

ワルキューレのコールサインと同じく、女神を意味する。

アリス以下開発者、技術者によって改造が施され、XB-70の胴体ほどの大きさと長さのある多段式弾道ミサイル、ASAT-T AB?を搭載する。

XB-70は、ブースタが搭載され、最大でマッハ四・六にまで加速、仰角八十度からASAT（衛星攻撃兵器）を発射し、衛星軌道上に乗せ、ホルスのレーザークを破壊する。

リグリー飛行場から飛び立ち、アレンフォート上空を通過し、海上まで飛行する長い道のりになる。

このくらいの距離がないと、XB-70を空高くに上げることはできない。

もちろん、ストーンヘンジを破壊し、敵を追いつめているので、護衛が必要なのかどうなのかはわからないが、ワルキューレチームも、修復されたリグリー飛行場から飛び上がる。

「……」

「どうしたの？」

物静かに、ジョシユアは駐機場に接地された長いすに座っていた。

「黄色中隊を撃墜した」

「メビウス1が？」

「そうだ」

リグリー飛行場の駐機場で、超大型爆撃機であるXB-70の底部の、改造されたウェポンベイに弾道ミサイルが搭載されるが、大きすぎてすべて収まりきっていない。ウェポンベイ同様に、エンジンも改修。この重量でも通常エンジンでマッハ三は出ると、アリスたちは断言している。

F-22とF-15が対空武装にて格納庫で羽を休めている間に、ジョシユアはアリスと一緒に、黒いボディのXB-70を眺めている。

「スパイの件、諜報部はわたしたちをすごく怪しんでいる」

「だろうな」

作業着の上着を脱いで腰に巻き、髪を結って帽子をかぶり、椅子

に座って足をぶらぶらとするアリスは、ジョシユアを見ると、笑みを浮かべる。

どこから連れてきたかわからないが、スタッフの一人が一匹の犬を駐機場で飼い始めた。

犬はトリガーと名づけられ、人懐こく、ジョシユアの前ですわり、舌を出して荒く息をしている。

「ISAFは寄せ集めの軍隊。ならず者だつて多いし、そこにスパイが入り込んで不思議ではない。むしろ、今まで表立って動かなかったのが一番怪しいわ」

「いや、エルジアにとって今は非常事態、背水の陣だ。これから破壊工作や情報の攪乱などを仕掛けてくるかもしれない……ここにいるスタッフは大丈夫なのか？」

「情報部、諜報部、人事部、友人などからのすべての情報を確認して送り込まれてきたスタッフよ。それに、わたしたちはまだ信頼されていない」

「……だから、見ているだけか？」

「そういうこと」

X-02の開発をしてきたアリスだが、スパイの一件から最重要人物として監視されるようになった……元から監視があつたわけで、それが最高レベルにまで引き上げられた。牢屋行きだつてあつたわけだが、ここは少佐がなんとか引き止めてくれたらしい。

アリスたちにとって、開発から手を離したらやることもなく、行く場所もない。監視された牢屋で日常を送るのと同じだ。

少しずつ痩せていったのは、その所為かもしれない。

「X-02の改造も終わった。あとは実戦配備するだけ。わたしの居場所はない。亡命したといっても、私の家は中立都市」

「サンサルバシオンか？」

「小さな湖畔があるところ。父が車の修理技師で、母は看護師。普通の家庭で育ったけど、高校のときにみんなでスカイダイビングをした。初めて空の楽しみを知って、飛行機に興味を持った」

「それから技術士か？」

「いつのまにか開発者。飛行機に触れるだけでなく、飛行機を作った……人を殺す道具を、作った」

「……」

「失礼な質問かもしれないけど、聞いてもいい？」

「なんだ？」

「敵戦闘機を落とすとき、いえ、人を殺すとき、どんな気持ちに――」

「――人を殺すじゃない」

「……えっ？」

「敵を倒す、だ。間違えるな」

「……」

「敵を倒す兵器を作った。俺たちは、人を殺したくて戦争をしたいわけじゃない」

「みんな、そうだよな」

アリスはまた笑みを浮かべ、頬を赤くした。

ジョシユアだって鈍い人ではない。

アリスが、ジョシユアに気があるのはわかっていて。

実際、何度か食事に誘われたが、断った。食事と言っても、レーションと酒を、駐機場の端っこで飲むくらいだ。常にスクランブルが要求される現状では、酒は飲めないし、アリスと仲良くすることで、色々な疑惑が浮上するのも防いだ。

これは自己保身のためだけではない。

アリスが味方のパイロットと仲良くしている……なにか考えている、という、内部での疑心暗鬼を取り除くためでもある。

それをわかっているのか、アリスはジョシユアの手に少しだけ触れた。

X B - 70にA S A Tが搭載され、出撃準備が整った。

「出撃よ」

「ああ」

心配事は一つ。

スパイによる妨害工作。

一度経験しているだけあって、秘匿性の高い作戦には警戒してしまふ。未知なる恐怖、過度な予想に怯えるのは人間だけだと聞く。その予想が外れればいいのだが、当たったときの対応を考えることができるのも人間だけだ。

チームに呼集を掛け、戦闘機に搭乗する。

『ワルキューレ1。X B - 70、コールサイン、アロー3の援護だ。敵がいるとは思えないが、先の一件もあり、かなりの緊張感がある』
「ワルキューレ1からアロー3、敵のいない空は久しぶりか？」

『ストーンヘンジの防空圏に入ったことがない。ワルキューレ、英雄に会えるだけじゃなく、護衛してもらえるなんて名誉だ』

「俺は英雄じゃない」

『いや、英雄だよ』

X B - 70が飛翔する。

巨大な体躯が空を舞い、両隣、後方をワルキューレで囲む。

『ガイドビーコンを起動、アロー3、ガイドから外れるなよ』

『失敗はしたくない』

「軌道補正の援護をする、アロー3、こちらに続け」

『了解だ』

ゆっくりと、民間機と同じように上昇し、XB-70の翼端が可変し、折り曲がる。

速度を上げ、高度一二〇〇〇フィートで水平飛行に移し、速度を得る。

『あの大きさでこの速度か』

『勝負は一回だ。再加速のための燃料もない』

出力最大、マッハーから速度を上げ、水平飛行するXB-70。

XB-70に追従するワルキューレは、こんな大型機が音速で飛行するのを、間近に見て感動した。

アリスはスカイダイビングをして飛行機に興味を持ったというが、ジョシユアは、戦闘機が落とされるところを見て、飛行機に興味を持った。

ローティーンるとき、ジョシユアは友達と空軍の基地が傍にある小高い丘の上に行った。

戦闘機好きの友達で、何度も見に行ったのだった。

その頃ジョシユアは、あまり飛行機や車、男の子が好きそうなものに興味が向かず、それよりも母の作る料理を覚えたい、という女の子みたいな考え持っていた。

そんな考えが一気に吹き飛ぶ事件が起きた。

所属不明機による戦闘機の撃墜。

空軍基地の上で繰り広げられたドッグファイト。

背につかれては逃げ、また背につく。

ミサイルをひらりとかわし、反転して真正面からバルカン攻撃。交差するなりスロットルを上げて上昇し、旋回して敵に牙を向く。所属不明機は、五〇〇〇フィートと比較的低い位置で撃ち落とされ、ゆっくりと落ちていった。

……きらきらと光っていた。

綺麗だった。

これがきつかけだった。

猛勉強の末に航空学校を落ちてしまった。陸軍に入隊し、四年後に航空学校に合格して陸軍を辞めた。

兵士の頃が懐かしいとは言いが、たったの四年しかいなかった。

常に成績をトップでおさめ、海軍に配属され五年後に部隊長。あまりにも早すぎる昇進だった。

ワルキューレのコールサインを貰ったときには戦争が始まっていた。

第一次ストーンヘンジ破壊作戦の時に召集されなかったのは、防衛部隊として優秀な成績を収めていたためだと、のちに聞いた。

『アロー3、高度二四〇〇〇、ガイドに従えばブースタ点火までの予想時間、あと三分十一秒』

アレンフォート飛行場を通り過ぎ、巨大なアンダーソンクレターを真下に見てから海の上を飛行し、雲の上へ。

マッハ二・五からの加速は思っている以上に時間がかかる。フェリー航行とは言わないが、上昇中の加速で使用する燃料も馬鹿にはならない。この大型機の燃費の悪さはF-14だってびっくりするほどだが、少しずつ高度を取るしかない。

『順調よ、このままなら……待って』

「どうした？」

『これはCGか？』

『違う、敵だわ！』

「レーダー反応なし、アリス、どうした？」

『衛星とのリンク確立……出た！』

『……潜水艦だ！』

『ミサイル艦だぞ？ ああ、やばい、発射口の開口を確認！』

「ここからでは間に合わない。アロー3、最大加速でミサイルを振り切れ」

『駄目！ 今加速したらミサイルが届かない！』

『本部に入電、潜水艦を破壊しろ』

『アレンフォートに戦闘機は残っていない！』

このとき、ジョシユアはストーンヘンジでのレイピアを思い出した。

自分の命を犠牲にストーンヘンジの砲台を破壊した……今が、そのときだと、確信してしまった。

ジョシユアの考えをすぐに読み取ったのはワルキューレ2のマイクだった。

ジョシユアがXB-70の前方に出て、体勢を整えたのだから、気づかれないわけがない。

『ジョジョ』

久しぶりに、子供の頃のおだ名で呼ばれ、ジョシユアは一瞬だけプライベートの表情に戻ってしまった。

両親も自分のことをそのおだ名で呼んでいたのだから、家にいるのか、と錯覚してもおかしくはないほど馴染んでいるおだ名だ。

それなのに、マイクの口調は、あまりにも真剣だった。

『俺がやる』

「駄目だ」

即答する。

『いや、俺がやる』

「命令だ。アロー3の援護を続ける」

『なんの話？』

『……ミサイルが発射されればアロー3の墜落は確実だ。俺たちが防ぐ』

『どうやって！』

『……機体をぶつける』

『！？』

それしか方法がない。

今のアロー3はエアフォース・ワン並みの重要性がある。これを今、撃墜されては次がいつなのかわからない。A S A Tの調達だって半年掛っている。そのためにエルジアが次の手を出してきたらI S A Fはストーンヘンジ以上の脅威を味わうことになる。

そのためにF - 22の一機が失われる程度で済むなら儲けものだ。

『隊長を殺せるか』

「俺だつて部下を殺せるものか。いい加減、黙れ」

『俺だつて隊長が死ぬのは勘弁だ』

ワルキューレ3も反対した。

「死ぬときは一緒がいい、なんて言うのか？」

『英雄をこんなところで殺すわけにはいかない』

「俺は英雄じゃない。時間がない、文句は言わずに下がれ！」

『絶対に嫌だね』

「マイク！」

『衛星が潜水艦からのミサイル発射を確認！ 超長距離高速ミサイルだ！』

『着弾まで二分五秒を予想』

『アロー3、ブースタ点火まで二分四十秒』

「A S A Tの発射までは？」

『予想、三分十七秒』

『間に合わない!』

『潜水艦、潜航』

『逃げられた!』

「ミサイルに機体をぶつける! ワルキューレ2、3はアロー3の援護を継続。アレنفォートにだって機体は残っている。対艦ミサイルを積んで上げる!」

『ジョシユア! 絶対に許さないぞ!』

ワルキューレ1のF-22の前に出るワルキューレ2のF-15。命令を無視し、自分が盾になると意地を張る。

「いい加減にしろ!」

『お前がいい加減にしろ!』

『……あー、こちら空母ノーチラス。ワルキューレ1、聞こえるか?』

無線に割り込んできた声には、聞き覚えがあった。

『敵と思われる潜水艦からミサイルが発射された。着弾まで一分ほど。こちらで迎撃ミサイルを発射した』

『ノーチラス? どうしてこんなところに?』

『あー、それは極秘事項だが、本部からの要請により、支援する』

『ミサイルを破壊できるのか?』

『バスタークから発射されたRIMは高性能だ。九七パーセントの確率で命中するだろう。現在、ソナーにより敵潜水艦の位置が判明』

ノーチラスは、潜水艦とXB-70の、ちょうど間の位置していたため、発射されたミサイルと潜水艦の位置を知ることができた。それに、バスタークがミサイル迎撃システムを搭載していたのが不

幸中の幸いだ。

『敵潜水艦のデータを送る。現在、こちらは艦載機を出せない』

「助かった、ノーチラス……。ワルキューレ2、3はアロー3の援護。いいな？」

落ち着き、改めて言う。

『……ちつ、恥ずかしいことをしてしまった』

「隊長を死なせるかは、うれしかったぞ？」

『うるさい。……ワルキューレ2、3は援護する』

ジョシユアは編隊を離れ、急降下。

レーダー情報をもとに、敵の潜水艦を探す。

『おそらくエイギルの生き残りだ』

『ほかにも生き残りがいる』

その通りだ。

エイギル艦隊のせん滅時に逃げた潜水艦は他にも必ずいるはずだ。それにしても、今まで補給もなしにどこに潜伏し、なぜこの機会に……やはり、内通者はいる。

この話は戻ってからもう一度することになるだろう。

『ワルキューレ1、AKV-HQよりデータを送る。あー、敵潜水艦が浮上する。三十秒後、レーダーで座標を確認してくれ』

「ワルキューレ1、了解。ミサイルの撃墜は？」

『あとRIMは二十秒で目標ミサイルと接触する。拡散爆破型とチャフのハイブリット弾頭だから、ヴァルキリーに当たることはない』
「おもしろいことに、アロー3と俺たちのコールサインは同じだ」

『女神の祝福を……顔を出した』
「沈めよ」

潜水艦が浮上し、ごうつと波を立てて顔を出した。

再びミサイル口を開き、第二射を発車しようとしたとき、ジョシユアはミサイルを二発同時発射して上昇した。

ミサイル口で爆発し、潜水艦は轟沈。

デジャブだ。

ノースポイントへの終結に、ノーチラスで向かっているとき、エルジアからの追撃があった。

最初るとき、ミサイルが発射されてから攻撃機を破壊した。

ミサイルは止まらず突き進んだ。

空を見たとき、一番大事なことを忘れていた。

衛星ホルス。

ホルスが実働している……。

つまり、潜水艦から発射されたミサイルは、百パーセントに近い確率で命中する。

灯台下暗しとは言わないが、ホルスを破壊するのに、ホルスからの攻撃を忘れていた。

「ワルキューレ2！ 潜水艦から発射されたミサイルはホルスの管制下にある！」

『なに！？』

『着弾まで五秒、四、三、二……外れた！』

潜水艦から発射された長距離高速ミサイルは、弾道計算し、真正面で待ち構えていたRIMをすらりと回避してしまった。

「まずい！ アロー3は退避しろ！」

『あと一分で最終加速に入る！』

「無理だ、間に合わない！」
『ジョシユア』

……やめろ、お前がそんな真剣な声を出すな。
マイク、よせ。

『アロー3はあと一分で加速し、ミサイルも届かないし潜水艦もない』

「アリス、XB-70を下げろ。作戦は中止だ！」

『どちらにしろ、XB-70の運動性能じゃ回避できない。今しかない』

方法はないのか？ 他になにか、いい方法は……。
ジョシユアは焦りに焦っていた。

このままではXB-70がやられ、衛星の破壊に失敗。
もしくは、誰かが犠牲になり、衛星ホルスを破壊する……。

『ワルキューレ3は援護しろ。いいか、邪魔をするな』
『……了解』

恐怖すら感じるマイクの声に、ワルキューレ3はおとなしく従ってしまった。

「ふざけるな！ アロー3、今すぐ加速に入れ、ASATを撃て！」
『今ASATを失ったら、サンサルバションを取り戻せない。大陸は再びエルジアのものになる』

ホルスが最終段階での完成を迎えれば、航空機にもその管制システムが搭載される。

今は大型ミサイルだけに搭載されているが、エルジアを追い詰め

たあとで、巻き返され、ノースポイントまで再び下がることになるかもしれない。

それだけは駄目だ。駄目だとわかっていながら、仲間が死ぬとわかっていながら……。

なんてことだ。そんな、こんなことが許されるのか……。

『着弾まで二十秒!』

『ジョシユア……ヴァレン隊長、今まで世話になった』

「この野郎、ふざけたことを言うな!」

『ガブリエル、悪いがポーカールは借りのままだ』

ワルキューレ3のガブリエルは、なにも応答しなかった。

『ミサイルを視認した。あれなら当てる自信がある』

ワルキューレ2のF-15がマッハ二・五でXB-70の前に出て、機首を上げ、長距離ミサイルの弾道に乗った。

その二秒後、

「マイク!」

大きな爆発。

XB-70はその直後に最終加速に入る。

四つのブースタが火を噴き、主翼が吹き飛ぶほどの勢いで、八十九度の角度で上昇し、ASATが点火し、発射。

急減速し、機体を立て直して高高度で水平飛行に入る。

『ASAT、上昇。ロール問題なし、出力安定』

『ASAT、第一ラインを通過、予定通りのコースを飛行』

『第二ラインを通過、弾頭切り離し、AT部位が離脱』

『軌道を確保、衛星軌道に乗る』

『成功よ、ジョシユア』

「……」

作戦は成功した。

一人の勇気のおかげで、ホルスのレーザー口を破壊するためのレーザー発射装置は軌道に乗り、三十五分後にホルスと交差することがわかった。

これを知る者は願うように時間を過ぎるのを待った。

『交差まで十秒』

『レーザー口、開放。充填率は百パーセントを維持』

『五、四、三、二……』

『レーザー照射、二十秒』

『モニタリング』

『目標のレーザー口を破壊』

『やったぞ！』

予定通り、レーザーはホルスのレンズを破壊した。

談話室は静かだった。

メビウス1だけが単独任務でいなかったが、他のメンバーは、ワルキューレ2のことを知り、黙とうを捧げていた。

『英雄はすぐそこに』

死んで英雄になれるのなら、みんな英雄だ。

ジョシユアは、泣きながらマイクの写真を貼った。

折れた翼

二〇〇五年五月十日。

「メガリスを知っているか？」

「……メガリス？」

たまの休日……というわけではないが、ジョシユアは少佐と一緒に士官食堂で昼食を取っていた。少佐が廊下で話しかけてくるとは、珍しかった。周囲からは、少佐と自分の接点は何もないように見られていたからである。

マイクが戦死して三日が経った……未だに傷心は癒えない。

特に、ワルキューレ3ことガブリエルは部屋から出ようとしないかった。

マイクと相部屋だったため、昔から、毎晩のようにカードゲームをしていた。ゲームの勝敗は七割ガブリエルが勝ちで、そのたびにマイクは借りを作っていた。その額も半端ではなくなったときに、マイクは死んだ。

「あいつ、借金を残して死んだ」

もちろん、本心ではないが、そんなことを言わないと、ガブリエルはマイクの死を受け入れることができなかった。

いつも一緒だったからこそ、ガブリエルにとってマイクの死はあまりにも大きい……いや、人に死を天秤にかけることはできない。クリストファーが死んだときもみんな落ち込んだ。ただ、違ったのは、その信頼関係が強すぎたことだ。

ジョシユアも例にもれず、気持ちは沈んでいた。そんなときに、少佐に食事に誘われた。

自分も、誰かと話をすればすこしは気が紛れるだろうと思った。日常の、なんでもない会話をすると思っていたら、少佐は資料の一枚も持たず、唐突にメガリスという話題を振ってきた。

「偵察機がメガリスと呼ばれる巨大施設の情報を入手して戻ってきた。今は分析に回しているが、また厄介が増えそうだ」

「ホルス以上の厄介が？」

「ストーンヘンジに代わる最終兵器らしい」

「ストーンヘンジ以外の防空兵器が存在するのだろうか？」

「そこがまたエルジアのわからないところだ。もうしばらくすると上陸作戦も開始される。不安要素は少なくしておきたいものだ」

悩ましい顔をして、ため息をつき、少佐は、グリーンティーを飲む。

ジョシユアはグリーンティーの青臭さがあまり好きではない。

「そのメガリスはどんな性能を？」

「わからない。解析にはまだまだ時間がかかる……空に伸びえる、一筋の赤い光を見たと、パイロットは言っていた」

「赤い光？」

「レーザーのような光が、地上がから空に」

「……考えたくもない」

短い会話を終え、二人は食事が終わると午後の定期輸送機に乗り込んだ。

ロスカナスからアレンフォートに向かう、長い飛行だ。

ジョシユアは部隊……ガブリエルから離れ、単独で任務に就いた。少佐とジョシユアといえば、X-02のことではない。それに、少佐は他にも話しておきたいことがあるようだった。

誰も居ない、盗聴も盗撮もされないことのない、空の上でしか話せ

ないこと。

「内通者がいた」

先の一件、X-02の試験飛行、並びに衛星破壊作戦と、エルジアは表立って妨害工作を行ってきた。スパイがいる、だけでは済まないのはもちろん、衛星破壊作戦でスリーパーが潜り込んでいることが明らかになった。

「先の作戦で、ノーチラスがノースポイントに寄航していたのを、現場で知ったな？」

「ああ」

二人は輸送機の貨物区画の端で、カップコーヒーを手に持ち、床に座って話をしていた。

「空母ノーチラスの極秘任務、あれはX-02の輸送だ」

「輸送？ 飛ばせばいいだろう？」

「また狙われる可能性もある」

「どういうことだ？」

「エルジアのスパイはX-02を奪還しようとした。だが、ノーチラスにX-02を乗せるにはX-02を飛ばし、甲板に着艦させる必要がある……チャンスだった」

「つまり、こちらから仕掛けたということか？」

「エルジアから亡命してきたアリス以下開発者は白だ。ノーチラスによってX-02が運ばれることを知っていた。それなのに何もなかった。それよりも、ホルスの破壊に妨害があった。……パイロットにスリーパーがいる」

「馬鹿な!？」

いくら少佐でも言っていないことと悪いことがある。
ジョシユアはコーヒーを飲み干し、胸ポケットから煙草を取り出した。

「ワルキューレの行動を知っている者が最も怪しい。X-02の試験飛行は極秘事項だ。上層部の他には諜報部と情報部しか知らない。知っていたのはトレイス。彼はパイロットだった」

「だからパイロットにスパイが？」

「混成部隊からスパイを探すためには拷問とトラップ、他にない。衛星破壊作戦時にX-02の輸送を決めておいてよかった、敵は二頭の兎を追えなかった」

「仮に、パイロットにスパイがいたとして、どうやって情報を流す？　ここにいるパイロットの全員、ストーンヘンジや黄色中隊の恐怖に怯え、生き抜いた本物の戦士だ。ストーンヘンジはスパイだけを落とさないのか？」

「……AWACSに搭乗するやつらなら、可能だ」

「……冗談、ではないのか？」

確かに、AWACS、スカイアイのオペレーターは支援するために常に後方にいる。

機体には情報を収集するための、あるいは情報を流すための装置が積めるだけ積んでいる。無線傍受も、AWACSが一手で行っているし、そこで“戦う”オペレーターはプロフェッショナルだ。空中管制機がいなければ、パイロットは目を失った同じなのだ。

「第一次ストーンヘンジ破壊時のメンバーは除外したとして、ただ一人、ノースポイント終結したときに参戦したオペレーターがいる」

まさか、そんな……、

「お前の元オフィサー、トレイル・クリューだ」

「クリューが脱走した！」

「保安部を呼べ！ 銃を携帯しろ！」

「クリューも銃を持っている、気をつけろ！」

五月十二日、少佐が撃たれた。

トレイル・クリューを最重要参考人として召喚しようとした際に、少佐は保安部二名とトレイルの部屋に入った。

トレイルはすぐに状況を理解し、ホルスターから拳銃を引き抜き、保安部員二名を射殺、少佐は肩を負傷した。

ジョシユアは保安部と一緒に銃を持ち、基地内を探し始めた。

周囲はフェンスと有刺鉄線で囲まれている。計画しての脱走ではないから、カッターなどは持っていない。出られる場所は正面玄関しかないのだ。そうなるとトレイルが見つかるのは時間の問題。

見つかったときの対処は、また別だ。

保安部のSMGを奪ったトレイルは駐機場に向かったとの連絡を受け、走った。

格納庫では整備士の数名が大型のレンチを手につろつろしていた。話しかけてみるもトレイルを見ていないとこと。

一体どこに行ったのか……。

「誰が乗っている!？」

整備士が声を上げた。

突然のエンジン音。

格納庫で響き、その場にいた全員が耳を塞いだ。

ジョシユアのF-22の輪留めが外され、動き出していた。

トレイルだ。

開かれた格納庫の中からゆっくりと移動するF-22に向けて発砲しようとしたとき、アフターバーナーを全開にされ、ジョシユアたちは吹き飛ばされた。

「滑走路の誘導灯を消せ！ 上がらせるな！」

吹き飛ばされ、ごろごろと転がったジョシユアは体の節々に痛みを感じるも、F-22の隣で待機していたF-15に乗り込み、エンジンスタートする。すぐに発進要員が輪留めやミサイルのセーフティピン、タラップを外し、各部の異常のないことをジョシユアに報告し、ついでにヘルメットをコクピットに投げ入れた。

あまりにも急いでいたため、それすらも忘れていた。
パイロットスーツも着用していないのはまずかいもしれない。

「F-22の機体が上がった！ IFFのコードを取り消しにしろ！」

「F-15が上がる。女神の機体だ。スクランブル要員はなにをしている？ コードレッド発令だ！」

F-22は誘導灯の消された滑走路からではなく、駐機場から離陸した。

北へ進路を向けた。

「今から上がる。F-22を逃がすな」

「衛星とリンクしろ、熱源探知」

「高度を落とされた。レーダー反応、弱」

「元オフィサー、現空中管制官だ。電子機器については詳しい」

「第三対空防衛線の対空兵器を起動しろ」

「……了解」

基地の防衛システムは起動しているものの、IFFの解除に戸惑った管制塔のスタッフはF-22を逃がしてしまった。

ジョシユアが空に上がり、追従してオメガやレイピアが上がったときには、F-22は総合監視レーダーでは探知できないほど高度を下げ、飛行していた。

「F-22はそんなに低くは飛べない。IFFコードはまだ有効のはずだ」

「クリューの機体は味方からも敵からも攻撃される。逃げ場はない」「サンサルバシオンにでも逃げるつもりか？」

「コモナから上がった人工衛星が熱源を探知した。現在、データを受信中」

「有視界では見つからない。ワルキューレ1、どうする？」

「北に向かったのは間違いない。この周辺に空港はない。要撃のために燃料も少なかった。フェリー航行でも一時間が限界だ」

「なんてことだ。仲間にスリーパーが潜んでいたとは」

「地上で何もしなかったから気づかなかった。空の上では自分の仕事以外に目を向けるほど余裕がない」

「それにしても、AWACSの他の連中はなぜ気づかなかった？」

「管制機でも役割が違えば立場も違う。誰も気づかなかった、仕方ない」

「撃墜するのか？」

「……元オフィサーだ。落とすのは俺だ」

「データ受信完了、リンクするぞ」

レーダーにF-22の位置情報が転送される。

「誘導、頼む」

「北に二〇マイル、高度二二〇〇フィート、速度マッハ二・二」

『速い』

「スーパークルーズ能力を甘く見るな」

『こちらも増槽はない』

「航続能力を見ればラプターの方が上だ。だがこちらは数の利がある。いくぞ」

『了解』

トレイル・クリュー。

ジョシユアが航空学校に入学し、所属を海軍としたときに出会った。

電子機器に対して秀でた才能を持ち、常にジョシユアをサポートしてきた。

もちろん、パイロットとしてのライセンスは持っているが、彼は操縦よりも機器の操作を選んだ。後ろに仲間がいるだけで気にする必要のないものが多くなり、ストレスも軽減される。

なによりも、死ぬときは自分ひとりではない、という気持ちと、自分のミスが仲間を殺す、という二つの事実がジョシユアのパイロットとしての気持ちを高めていた。

『レーダー、アクティブ。捉えた』

「回線を繋げ、コンタクト」

『クリュー中尉。貴様には反逆罪、傷害罪、銃刀法違反、戦闘機の私的占有……全部言っただけかい？』

「今すぐに引き返せ」

『……いまさらISAFに戻るものか。ついてくるな!』

『HQより各追撃機へ。クリュー中尉の搭乗するF-22の撃墜が許可された』

「……HQ、繰り返せ」

『撃墜を許可する。ワルキューレ1、撃墜だ』

『許可、ということは、撃墜しなくてもいいということだな?』

「トレイル、もう一度言う、引き返せ」

F - 22との距離は約二〇マイル。

迎撃に向かった機体は四機。

中距離ミサイルなら届く。

すでにこちらはアクティブレーダーで捕捉している。レーダー・ロックに動じず、F - 22は尚も北上。

『隊長、見逃して下さい』

『迎撃機は敵機を撃墜しろ！』

限界だ。

アフターバーナー点火。

ジョシユアが先陣を切り、残りが続く。

ジョシユアはF - 22をレーダー・ロックし、中距離ミサイルを発射する。

続いてオメガ、レイピアがミサイルを発射する。

ジョシユアが最初にミサイルを撃っていないかったら、誰も撃てなかった。

誰も、仲間殺しなどしたくない。

三発のレーダー誘導ミサイルを、トレイルが回避できるものか。

間違いのない死を確信したとき、レーダーに新しい機影が映った。

『エルジアだ！』

救出にでも来たというのか？

エルジア軍機が六機、突如として現れた。

F - 22の進行方向からマッハ二で接近中。

対空防衛線を突破してきた。

「すべての迎撃機を上げる！ オメガ11、レイピア3、4、続け」
『ウィルコ』

上昇し、高度を得る。

レーダー誘導式中距離ミサイルは目標を失い降下、地上で爆発する。

『クリューを逃がすな！ 奴は情報を持っている！』

『IFFコードを持ったままエルジアに行かせるわけにはいかない。クリューを落とせ！』

仲間だった奴を撃つ。

考えてしまえば躊躇が生まれる。

そんなものが戦場で通用するわけがない！

ジョシユアに続く三機は必死だった。

エルジア軍のSu-47は機速を落とすことなく飛行し、同高度で飛ぶISAF機と交差。

ジョシユアは大きくターンをして敵の背後に潜り込もうとしたが、敵の狙いは時間稼ぎだとわかり、四機で一機の敵機を狙う。

『レーダーはクリューの機体を捉えているのか？』

「ウルキューレ1から各機へ。クリューを追う、現状の打開を要請」

『了解だ！ レイピア3、4、飲み仲間の意地を見せてやるぞ』

『当たり前だ』

ジョシユアのF-15がブレイクし、編隊から外れる。それを見逃さなかった敵の一機が転進したが、隙を作ってしまった。

オメガ11が機銃攻撃でけん制したのちに、レイピア3がミサイルを発射、撃墜。

残りの三機が同時にジョシユアを追うためにターンをしたが、そ

の後ろには三機のオメガとレイピアがいる。

危険なのは敵だった。

そのスペックのほとんどが未だ不明とされているSu-47だが、前進翼から運動性が高いことはわかるも、その分だけスピンしやすい。音速からのマニューバはかなりの技術がいる。

速度を上げて不利になるのも向こうだ。

オメガとレイピアには余裕だ。

「トレイル、逃げられないぞ」

『私はまだ死にません』

マッハー・五からハイマニューバターン。

負けず劣らず、反射的にF-22と同じ方向にスティックを傾けて追う。

これ以上の説得は無理だとわかっていても、ジョシユアにはやりきれない思いがあった。

マイクの死が、クリューの所為なら、ただ殺すだけでは納得がない。

サディストではないが、その顔面を殴り、蹴り、最後は銃殺刑にしてやりたい。

ミサイルの一発で即死などでは、マイクが浮かばれないし、自分だって心にわだかまりを残したままになる。

ただでは殺さない。

このとき、ジョシユアは今まで、人を殺すことを、敵を倒すと認識してきたことを思い出し、自分が、人を憎しみで殺そうとしているのだとわかってしまった。

覚悟を決めて瞬間だった。

「トレイル」

急加速し、F-22にぴたりとくつつきバルカン攻撃。

回避するF-22と距離を置き、短距離ミサイルをセットする。

ジョシユアのコクピット内で警告音が響いた。

敵のSu-47にレーダー・ロックされた。

ブレイクすればF-22を逃がすことになる。そうなるとまた距離を開けられ、今度こそエルジア軍の警戒空域に進入しての戦いになってしまう。たった四機でエルジア空域を飛ぶのは危険すぎる。

「オメガ、レイピア、何をしている」

「こいら、死んでもクリューを守る気だ。よほど重要な情報を握っているようだ」

「トレイルを撃墜する。邪魔な敵機をなんとかしてくれ」

「今落としてやる」

オメガが突出し、ジョシユアを狙っていたSu-47にミサイルを発射。続いて二機のレイピアが連携して牽制し、ジョシユアから敵を引き剥がす。

「やれ、ジョシユア！」

F-22はスティックを引き、可能な限り小さな弧を描いてジョシユアから逃げようとするが、格闘性能はF-15の方が高い。

鋭い爪が二〇ミリ徹甲弾となって翼を引き裂く。

三・二秒の長い射撃。

発射された一七四発の内、一二二発が機体全体に満遍なく着弾した。

珍しいことに、ジョシユアも、機銃をこれほど当てたことは未だかつてない。

『ぐわああああああ！』

振動と爆発。

左のエンジンがまるまる吹き飛び、機体が横になりながら滑降し、空中分解していく。

『オートエジェクションが作動するぞ』

F-22などの高性能機は、機体のセントラルコンピュータが勝手に判断し、パイロットを機体外へと射出する。

速度が落ちたところでキャノピーが吹き飛び、シートが射出された。

『チャンスだ、ジョシユア、殺すなよ？』

その衝動を抑えながら、ジョシユアは撤退しない敵機の撃墜に機首を向けた。

オメガが一機の敵機を狙い、ジョシユアが援護する。

Su-47は低速で高い運動性を発揮する。

ぐるりとひっくり返って見せると、でたらめに機銃を掃射して牽制する。

オメガが五十メートルと、近距離で機銃を撃ち、一機を落とす。

『残りは二機だ。HQ、裏切り者は脱出した。保安部を乗せて救出部隊を回してくれ』

『制空権は大丈夫なのだろうな？』

『あと二機だけだ、問題ない』

二機の敵機は必死に逃げ回るも、四機に追われて逃げられるわけがない。

水平飛行などしてみれば、まさに狩られるのを待つ獲物でしかない。

い。

『捉えた』

レイピアがターゲットインサイト、短距離ミサイルを発射。
続いてオメガとジョシユアが同目標をロックし、ミサイルを発射する。

『当たれ……ヒット！』

上昇し、ひねりつて降下した敵機はフレアを展開するも、ミサイルはフレアを回避して胴体に命中した。

ジョシユア、オメガの二発のミサイルは、続けて命中し、すごい爆発に目がくらんだ。

『救出部隊を向かわせた。ガンシップもいる、各迎撃機は帰還せよ。ウルキューレー、よくやった』

「トレイルが生きていたのは偶然だ。俺のF-22に乗ったのが運の尽きだ」

『よく言う。あれで生き残ってきた』

「トレイルに汚された」

『そこまでだ。トレイル・クリューは裏切り者。気を引き締める』

「了解。各機、トレイルと会うのもこれで最後かもしれない。……礼をしてやろう」

全員、トレイルによって吹き飛ばされたのを思い出す。

『……ああ』

四機が横編隊を組み、トレイルの着地した真上を低空で飛行した。レイピア3が、トレイルが吹き飛んでいくのを確認し、ジョシユアは、とりあえず自分が吹き飛ばされたときの借りは返したと納得

した。

マイクの死は償ってもらつた。
それだけは忘れられない。

羽根の行方

「情報漏洩の事実、それによるISAFの損害。トレイル・クリュー中尉、元ISAF航空管制官」

ジョシユアは初めて軍法会議を傍聴した。

ジョシユアの元オフィサーということで様々なことを尋ねられたが、答えられることはなく、当然、情報部が求めている回答も得られなかった。

少佐は撃たれ、肩を負傷した。

鎖骨を碎かれ、全治二カ月を言い渡された。

足に器具を取りつけ、腕をつっている姿は痛々しいというのに、車椅子生活は久しぶりだと笑っていた。

トレイルは、逃げようとしていたが、救出されたあと独房に入れられ、自傷、自殺を防止するために猿ぐつわに両手を覆う拘束具を取りつけられた。

面会などはもちろん許されず、トレイルには、はつきり言って死刑以外の何も残されていない。

少佐は、本当はトレイルを説得して敵に嘘の情報を流すように説得するつもりだったらしい。保安部を連れていくつもりはなかったというのに、上層部の連中は機転の利かない奴らばかりで、捕らえる、などと……実際、現状でエルジアに嘘の情報を流しても意味はない。こちらは攻めているのであるから、相手を混乱させても戦略的優位さは変わらない。

トレイルがスリーパーとなった理由だが、サンサルバシオンに家族がいた。

たった一人の妹が、疎開せずに中立都市に残っていた。ISAFに属する者の身内は己の素性を隠している。それは自分自身と、ISAFにいる者を危険に曝さないためである。だからISAFで身

内話はしない。でないとトレイルのようなスリーパーが生まれる危険性があるのだ。

トレイルがスリーパーとして動きはじめたのは去年の十月だ。ノースポイントに集結したISAFの中に、トレイスのようなスパイが潜り込んでおり、工作を開始していた。

その中で、軍でも情報を武器として扱う連中に的を絞り内部事情を探り、トレイルのように、弱みを持つ者をスリーパーに仕立て上げてしまう。

これも仕方ないのだ。

家族同然、兄弟以上の仲間を失う辛さをみんなが知っている。それが実の妹となれば、抵抗できないが普通なのだ。

痛みには逆らえない。

だからといって同情することは許されない。現にトレイルは衛星破壊作戦の情報を、同じくスリーパーと動いている者から聞き、エイグル艦隊の生き残りに伝えてしまった。

マイクが死んだ要因である。

「容疑は以下の通り。機密情報漏洩による反逆罪、殺人罪、傷害罪、銃刀法違反、戦闘機の占有……」

長々と宣言される罪名に耳が痛い。仮にも元オフィサー。機体のすべてを任せていた信頼できる仲間だったのだ。彼が空中管制機に搭乗したあとでも、何度も食事に誘い、昔話で盛り上がった。

「被告の裏切り行為は何にしても償うことはできない」

裁きが言い渡されるとき、ずっと俯いていたトレイルが顔を上げて、裁判官ではなく、後ろの傍聴席に座る少佐とジョシユアを見た。

「妹には、なんと伝えますか？」

「被告の発言は許可できない。全員が今の発言のすべてを忘れなさい」

が、ジョシユアはこう言った。

「妹を守った、英雄だ」

「傍聴席は沈黙を守りなさい」

トレイルは涙を流して、頷いた。

「死刑を宣告する」

本当のところ、殴り殺してやりたかった。裏切りほど重い罪を、ジョシユアは知らない。例え、知り合いが敵に捕まっても、人質となっても、自分は任務を全うするだろう。

事実、他の連中はジョシユアが真っ直ぐな人間であることは知っている。仲間想いなのも知っているが、ジョシユア自身は、自分を殺してでも任務を続けろ、そういうことを真剣な眼差しで言える人間……本物の軍人なのである。

傍聴席から、少佐の乗る車椅子を押しながら出る。

「本当に死刑を？」

「……逃げたのが間違いだった。トレイルは、我々の知らない無線周波数を使ってエルジアに救出を要請した。情報を持って」

「情報？」

「トレイスが流すことのできなかったX-02の開発データや、こちらがメガリスの情報を持っているなど、それこそISAF崩壊の危機に晒す最重要データまで」

「ISAFは、情報戦はあまり得意ではないようだな」

「エルジアに人質がいる以上、トレイルをこちら側に寝返さえるこ

とは不可能だった。金で解決する問題ではないのだから」

少佐はうつむき、休憩室の一室で煙草を吸った。

それ以降、トレイルを見ていない。

仲間から裏切り者が出たのは、パイロットの中では大きな衝撃となった。特に、ガブリエルの精神状態は医師の診察が必要なほど。

PTSD——心的外傷後ストレス症候群。

マイクの死、トレイルの反逆、パイロットとしての責任、緊張感

……それらがガブリエルを蝕んだ。

前線の離脱と本部病院での治療が余儀なくされた。

ジョシユアはメビウスと同じく唯一のワルキューレになってしまった。

少佐は肩を痛めながらも仕事を続けていた。

今だけだ、ゆっくり休めと言っておきながら、自分は怪我の痛みを隠して仕事をする。

頑丈な人だ。

作戦部は次の作戦の立案に忙しいようで、情報部の連中が動いているのはよくわかる。

情報の漏洩対策も立てられ、パイロットへの対応も厳しくなった。監視、というわけではないが、諜報部が何度かパイロット宿舎に訪れている。

パイロット達は苛立っていた。

「ジョシユア、俺達は監獄の中にいるのか？」

比較的、暇な今を満喫することもできず、オメガのチームリーダーのグレン・ロンファ大尉が本を読みながら言った。

彼は、異性人が攻め込み、それらから地球を守るために異性人の星で戦うパイロットの話の本を読んでいる。本の主人公が無口で無

機質で、メビウス1に似ていると言っていた。

「ガブリエルが、意外にも精神的に弱かったのは驚きだ」

「友人が死に、その友人を殺したのが裏切り者の友人では仕方ない」

「……トレイルは子供のような奴だった」

「よせ、あいつは裏切り者だ。人質がいたにせよ、ここにいる以上は一人の人間ではなく一人の軍人だ」

「……悪い」

「ストーンヘンジ破壊以降、工作が目立ってきたと通信科の知り合いが言っていた」

「ISAFにどんな情報があるというのだ？ 黄色中隊は人造人間とかか？」

「ふっ、そんな情報があるなら俺に教えてくれ」

「まったく、肩身が狭くなる」

ジョシユアはというと、談話室の端に置かれていたジグソーパズルに意外な適性を見せ、楽しんでいた。

テーブルの上に、F-15が飛ぶ姿の完成図を広げ、鼻歌混じりにピースをはめていく。

「面白いかな？」

「集中力だ」

主翼部分は完成されている。

ミサイルが飛行限界重量ぎりぎりまで武装され、飛んでいる。

「翼は折られ、散った羽根は何処へ行く、か……」

グレンはピースを手に取り、はめた。

ミサイルのシーカーカメラ部位が出来上がった。

「舞い続けている」

「たったの一人になったな、ワルキューレも」

「いいさ、そのうち、メビウス2にでもしてもらっ」

「楽しみだ」

本当は悲しくて仕方ない。

気丈になるというのは、仲間を見捨てるよりも難しいことだ……。

「メビウスと同じ、生きていける」

放たれた矢

「ストーンヘンジの沈黙により、大陸北部で上陸作戦が始まった。これに対してエルジア軍は、ISAFの地上部隊に向けて多数の巡航ミサイルを発射した」

突然、といえば突然だった。

エルジア軍により地上部隊へのミサイル攻撃。

もし、衛星ホルスが誘導管制するミサイルであつたのなら、このミサイルの発見はおろか、撃墜も不可能だったと、少佐は言った。ジョシユアとメビウス1は、たった二機で巡航ミサイル迎撃に向かう。

「ミサイルは超低空を飛行し、レーダーの目をくらしながら飛行するため、ここで破壊できなければ次に現れるのは味方の頭の上だ。巡航ミサイルを撃墜せよ、一機も逃してはならない」

トレイル・クリューの一件で失ったF-22が、再びジョシユアに支給され、女神とリボンのエンブレムを持つ二機の機体が格納庫内で出撃の準備を進めていた。

二人だけで行動するのは初めてだ。

今や英雄とまで賞されるメビウス1の隣を飛ぶことに、不安も不満もない。

『北部上陸部隊より入電。メビウスとワルキューレの働きに期待するとのことだ。作戦開始、逃がすなよ』

レーダーに表示される巡航ミサイル。

『第一陣、意外に数が多い、機速を維持して後方から狙え』

メビウス1とワルキューレ1は同じタイミング、同じ角度で旋回し、飛行機雲を引きながらミサイルの後方につく。

回避プログラムは作動していない、ただの巡航ミサイルだ。

積んできた散弾ミサイルをセット、シーカーオープン、ロック、フックス3。

ミサイルは高速で発射され、巡航ミサイル群の中で信管が作動し、爆発。一センチほどの玉の金属が試算し、四機をまとめて破壊。爆発し、残りが誘爆、一発が爆風でコントロールを失い、氷の地表に衝突した。

考えてみれば、ここは人の住むことのできない極寒の地だ。こんなところにまで飛ぶことになるとは、思いもしなかった。

『敵戦闘機、及び爆撃機を確認した』

エルジア軍機を確認したが、反応が弱い。
ステルス機だ。

『ボギーは四、タイプS。爆撃機はヴァルキリー、速いぞ、空域を離脱する。……あー、待て。ミサイルの第二陣が接近』

「ワルキューレ1からメビウス1、戦闘機の注意を引く」

『ミサイルの破壊が最優先だ』

「ボギーを確認。タイプSを落とす、誘導、頼む」

『メビウス1、巡航ミサイル、二十マイル先。ワルキューレ1、敵戦闘機、狙われているぞ』

敵の一機がジョシユアに狙いを定めた。

機種はジョシユア、メビウス1と同じF-22だ。

性能が互角となると、優劣はパイロットに委ねられる。

正面から交差する際に、敵機はバルカン攻撃を仕掛けてきたが、上昇して回避。

敵との高度差は六〇〇〇フィートほど、高速でターンして敵の背につく。

『ワルキューレ1、巡航ミサイル、残り五十マイル、優先順位を忘れるな』

「今落とす」

敵機はアフターバーナー全開、ジヨシユアのサイトから逃れる寸前に、ジヨシユアは短距離ミサイルを発射。

「フォックス2」

まずはこれで敵機も注視する。

着弾の確認はAWACSに任せる。

巡航ミサイル撃墜のために速度を上げ、機首をメビウス1と同じ方向へ。

メビウス1を視認したとき、メビウス1は散弾ミサイルを発射し、後方に位置していた二機のミサイルを破壊した。

が、

『ターゲットが二手に分かれた！』

ミサイルが三機、五機と大きく分かれた。

メビウス1が右に機体を傾け、五機の巡航ミサイルを追う。

『残り三十マイル』

巡航ミサイルの速度が速い、第二加速をした。

最大出力でも距離を縮めるのは難しい。

『敵機の一機を撃墜。敵戦闘機が接近中だ』

そうは言うものの、敵と接触するには距離があるし、加速度にも限界がある。

ロックオンマークが目標を索敵し、照準した。

高速中距離ミサイルを同時に三発、発射。

着弾まで十秒と時間がかかるが、先ほどのように敵戦闘機への着弾を確認しないわけにはいかない。

五秒、四秒、三秒……着弾。

三機の巡航ミサイルが大きな爆発を起こした。

その数秒後、遠くでも爆発し、メビウス1が巡航ミサイルを撃墜。

『グッドキル!』

AWACSのオペレータが珍しく大きな声を上げた。

接近中の敵機に機首を向け、メビウス1と共に迎撃に向かおうとしたとき、

『メビウス1、ワルキューレ1、新たな機影を確認』

こちらに向かっていた敵機がターンして背を向けた。

AWACSのレーダー情報でも、爆撃機も高速で空域を離脱した。

……何かがおかしい。

『今度は一機だけだ。今までとは様子が違う』

コクピット内で、ジョシユアは背筋がぴりぴりするのを感じた。

この感覚を、以前にも味わったことがある——いや、味わい

続けていた。

ストーンヘンジの射程内で、常に味わっていた……絶対的恐怖だ。

『巡航ミサイルは氷原の亀裂に沿って南下中。通常弾頭とおもわれるが、十分に警戒せよ』

「了解。メビウス1と共に撃墜する」

レーダー画面に映し出された一機の巡航ミサイル。

複雑な軌道を描き、簡単に落ちてはくれなさそうだ。

「視認した」

高速での旋回。

巡航ミサイルの真後ろにつくが、メビウス1は距離を開けている。メビウス1もジョシユアと同じく、何か異変を感じ取っているようだ。

二機のF-22は、回避行動をとりながら飛行する巡航ミサイルと距離を開け、中距離ミサイルを発射し、減速してさらに距離を開ける。

メビウス1の中距離ミサイルが回避され、ジョシユアのミサイルも回避された。

残された散弾ミサイルをタイミングよく発射するために、巡航ミサイルの行動を窺う。

『残り四十マイル』

巡航ミサイルが機首を右に振った瞬間、好機だと、先にジョシユアが発射。その次の瞬間、メビウス1も発射する。

最初の散弾ミサイルを回避した巡航ミサイルだったが、次に発射されたメビウス1のミサイルが命中——巨大な光の玉が、一瞬

にして空に浮かんだ。

まぶしく、スロットルを最低にし、ペダルを踏んでブレーキをかける。

巡航ミサイルの弾頭は通常弾頭ではなかった。

これが地上で爆発したとなれば、地表がえぐられていた。

核爆発のようなその光景を目の当たりにして、やはりメビウス1の行動に嘘はないのだと、また、自分も従っていて間違いはなかったと、ほっと胸を撫で下ろす。

『グツジョブ、メビウス1、ワルキューレ1。大当たりだ、とんでもない爆発だったな』

『まだ爆発が続いている。回避し、帰還する』

『作戦終了。上陸部隊からも爆発が確認できたそうだ。君たちに感謝すると言っているぞ』

『了解。メビウス1、ワルキューレ1、任務完了、RTB』

『RTB、了解』

『よくやった。上陸部隊は兵を無駄に死なすことなく、北部沿岸を確保することに成功した』

相変わらず、車椅子のままの少佐は、にこにこうれしそうにメビウス1とジョシユアを見る。

うれしいことがあったのかと尋ねると、

「気がつかないか？」

少佐はくつと、あごを上げてみせる。

……襟章の星が一つ、増えていた。

「……おめでとうございます」

「次は君たちの番だぞ、メビウス1、ワルキューレ1。戦争が終わってISAFから逃げられると思うなよ？」

中佐、メビウス1、ジョシユアは、笑みを浮かべながらも、退職金が楽しみだと、三人で話し合った。

本当は酒の席で話すべきなのだろう、その方がジョシユアも楽しい。

メビウス1と酒を交わしたい、というのは、今でもジョシユアの願いだ。

チームメイトを失ったジョシユアだったが、今の時間が楽しいと感じることができた。

仲間がいると、実感できた。

解放

二〇〇五年七月十日

中立都市サンサルバシオンを解放する。

作戦の十日前から、ISAFの全員が武者震いをしていた。

中立都市サンサルバシオンの出身者は少ない。ジョシユアの母親もサンサルバシオン出身だ。

歴史上、幾度となく戦場となってきた中立都市がエルジアに奪われたあのときの悔しさ、悲しさを吹き飛ばし、故郷を取り戻すために今まで血を流してきた者もいる。

「開戦とともに踏みにじられた中立都市サンサルバシオンを、エルジア軍から解放する」

力強い中佐に言葉に、パイロット全員が握りこぶしを作る。

「敵の主な抵抗拠点は戦車部隊がいる旧市街地国道七号線付近、並びに対戦車ヘリがいる新市街地の行政官庁街である。また、味方に対する航空攻撃を防ぐため、後方にある空港とそこから発信する航空機を叩かねばならない」

第一優先目標として、サンプロフェッタ空港の使用不能、または敵戦闘機の離陸不可能にすることである。

航空戦力はエルジアでも主戦力となっており、これを叩くことは味方の地上部隊、空で戦う航空部隊の両方を救う意味がある。

ウルキューレとメビウス、オメガが地上部隊を援護し、この空港を叩く。

「灯火管制はレジスタンスが解除する。抵抗拠点を排除し、都市制

「圧を支援せよ」

……中佐の両親も、都市サンサルバシオンの出身であることは、みんなが知っている。だからこそ今まで戦うことができたのだ。足が使い物にならなくなっても、肩を負傷しても、戦い続けている中佐は、軍人として懂れる。

「我々を待ち望む者がいる。……出撃」

暗闇の中、戦闘機、攻撃機が出撃する。

地上部隊がすでにサンサルバシオンの旧市街地、官庁街、空港を取り囲み、レジスタンスによる灯火管制の解除と、航空部隊を待つ。

『ワルキューレ1、サンサルバシオンに思い出はあるか？』

サンサルバシオンまであと二十分というところで、オメガのグレインが聞いてきた。

作戦が始まっているため、私語の禁止はもちろんだが、AWACSの連中は何も言わない。

「一度だけ、酒場で飲んだことがあった。店の主人の娘が手伝っていて、いい雰囲気のお店だったのを覚えている」

『サンサルバシオンはいい街だ。旧市街の街並みはどこか懐かしさがある』

『新市街のモールはなかなかだぞ？』

『湖畔が見える、大きな通りがある。あそこに家を建てて住みたいよ』

各々、サンサルバシオンには思い出がある。

その思い出を蘇らせる、また見るために、なんとしてでも中立都

市を取り返してみせる。

『たった今、灯火管制がレジスタンスによって解除された。作戦開始』

「ワルキューレ、メビウス、オメガはサンプロフェッタ空港を攻撃。地上部隊を援護するぞ」

『レイピア、ヴァイパーは旧市街地だ。方位一四〇、すぐだぞ』

『プリーストは新市街地の官庁街。戦闘ヘリも確認されている。地上部隊との連携を忘れるな』

『全機、展開』

大きな編隊が崩れ、各機、目的の空域と飛行する。

『……爆発音と戦闘機の爆音が聞こえます』

レジスタンスの無線だろう、混線している。

『街の光が一斉につきました』

ジョシユアは目標とするサンプロフェッタ空港の位置を確認する。予定通り、サンサルバシオンに明かりが灯る。

空対地ミサイルをセット、地上部隊と連絡を取る。

「ワルキューレよりタンゴ10、あと二分で到着する。レーザーマーカーの用意」

『タンゴ10よりワルキューレ。戦車が駐機場を包囲、戦闘機が離陸しようとしている。とにかく爆撃してくれ』

「方位三四〇から進入し、爆撃する。当たるなよ」

『全員、航空機が三四〇から進入爆撃！ 下がれ！』

「サンプロフェッタ空港を爆撃。オメガ、対空兵器に構うなよ、低

空から進入する」

『俺たちにお前たち並みの動きをしると?』

笑っているようだが、そんな冗談に付き合うほどの余裕はない。

「距離八マイル、いくぞ!」

メビウス1とワルキューレ1のF-22の底部から顔を覗かせる対地ミサイルは、こちらに気づいていない複数の対空兵器をロックオン。

発射。

二機は上昇して空港の真上を飛行したときには、対空兵器の四割が沈黙。残りが二機のF-22に注意を向けた。

無誘導弾を搭載しているオメガが、その隙に滑走路と戦車に爆弾を落とす。

『いい爆発だ! 滑走路の使用不能を目視で確認! あとは我々で制圧する!』

『なんてことだ、リボンの戦闘機がいるぞ!』

『女神も確認した』

『黄色中隊はどうした!?』

『もう空港には着陸できん』

メビウス1、ワルキューレ1とオメガは旋回し、官庁街へと進路を取る。

『メビウス、ワルキューレ、オメガ、サンプロフェッタ空港を地上部隊が制圧中』

ブリーストが地上攻撃をしているが、幾分、対空兵器と敵航空戦

力が多い。

『……ユージア中央部標準時、午前〇時五分……』

メビウス1が官庁街の対空兵器の囷となる。

ワルキューレー1は高高度からダイヴし、機銃で対空兵器、戦車を破壊。オメガが安全な方向から高速爆撃する。

『こちらブラボー7。目標二、議会議事堂を攻略中！』

『爆撃支援。官庁街の外全部だ！』

『ブリーストよりブラボー7。議事堂の裏から侵入し、爆撃する』

『了解！ 敵の抵抗が激しい、戦車を破壊してくれ！』

ブリーストが高速で官庁街から離脱し、大きくターンして議事堂の裏から戦車を精密誘導弾で狙い、放つ。

『……日の出を待たずして、戦闘が開始されました』

『黄色中隊がいるぞ！』

『ブリーストは近づくな！』

ワルキューレー1が一機の黄色の戦闘機を追いかける。

ストーンヘンジのときは、黄色中隊の本気を見たが、ここにいるのは、名ばかりの連中ばかりだ。

メビウス1が援護体勢につき、ワルキューレー1が追いつめ、落とす。

落下地点が官庁街のと真ん中だったことに、ワルキューレー1はエイグル艦隊殲滅時の作戦を思い出す。

『味方機がやられた！』

『ブラボー8から6へ。ヘリがホバリングしている。チャンスだ、

スティングガーを撃て！」

『ブラボー6と連絡不能！』

『味方の航空機へ。ヘリを落としてくれ、ブラボー6が狙い打ちにされている！』

『オメガよりワルキューレ、国营放送ビルが見えるか？ ヘリが陰に隠れている』

「こちらから確認できた。上空の敵機を引きつけてくれ、機銃で破壊する」

『無理をするなよ』

高度一〇〇〇フィートの超低空から、ホバリングし、味方地上部隊を釘付けにするヘリを狙う。

対地攻撃ガンモード、空中に浮かぶ静止物ほど、簡単に落とせるものはない。

機体を傾け、ビルの間をすり抜け、レティクルをヘリに合わせて射撃。

ヘリはあっという間に蜂の巣にされ、降下して爆発。

『ブラボー10、気をつけろ！』

『まだヘリがいる。航空支援を要請！』

『ブリストから各機。対空兵器の沈黙を確認。腹に溜め込んだ爆弾を全部落とす。官庁街の制圧は時間の問題だ』

「了解。レイピアとヴァイパーを援護、旧市街に向かう」

『オメガ、了解』

転進、旧市街に機種を向ける。

『……一部画像と音声が乱れていることを、お詫びします』

旧市街には予想以上の戦闘ヘリ、戦車、そして戦闘機がいた。

レイピアは敵航空戦力に足止めを受け、思うように地上部隊を援護できないでいる。

「レイピア、ヴァイパー、援護に入る」

『助かった！ 黄色の戦闘機が一機、しつこいぞ』

黄色の模倣者とは思えないが、他の敵戦闘機に比べると、やはり動きはいい。それでも、ワルキューレーやメビウス1から見ると、黄色中隊の隊長と比べたらまだまだルーキーだ。

今やエルジアから死神やハイエナなどと言われるメビウス1とワルキューレーに狙われ、生き延びることの出来る奴はいない。

苦戦していた旧市街地の地上部隊は、ISAFの航空機の支援を受け、敵部隊の制圧を順調に進めている。

『……歴史上、幾度となく戦場となってきたこの都市で、サンサルバシオンは再び戦火に包まれています』

敵機の勢いも弱い。

戦闘ヘリを破壊し、地上部隊が前進。

『こちらタンゴ3。国道七号、アーチ付近に敵！』

『国道七号は二車線道路か？』

『タンゴ1、アーチに当ててかまわん、撃て！』

地上部隊の戦いが見える。

ワルキューレーとメビウス1は残った敵航空機を掃討。

残りが支援要請を受け、サンプロフェッタ空港、官庁街へと向かう。

『……あのリボンのエンブレムの戦闘機が、この中にいるのでしょ

うか？」

『サンプルフェッタ空港を占拠！』

『官庁街で捕虜発生。こちらも制圧した！』

サンサルバシオンが、中立へと戻っていく。

『旧市街地の国道七号線を爆撃してくれ！』

残った敵戦力が国道七号線で味方部隊を応戦中。
メビウス1が、残った対地ミサイルを発射、命中。

『本部、こちらタンゴ3。国道七号の目標一六は航空支援により壊滅！』

『アーチ周辺の地域を制圧した』

『よくった。地上部隊、並びに航空部隊は……』

と、AWACSの通信が一瞬、途切れたかと思った。

『TU-160が多数、北西より侵入した。新市街へ接近中！ただちにこれを撃退せよ！』

『ファシストめ！焦土作戦か！』

やっとサンサルバシオンを解放した、中立都市を取り戻したと思っていた矢先に、エルジア軍の焦土作戦。

護衛機の随伴もなく、六機のブラックジャックが、攻撃機の数十倍の爆弾を抱えて現れた。

「全機、ここでエルジアの思い通りにはさせるな」

『オメガ、了解』

『レイピア、了解』

『ヴァイパー、了解』
『ブリースト、了解』

北西に出力全開で飛ぶ。

『……今、戦闘機が真上を飛んでいきました』

『TU-160を視認』

「後方に回り込め、打ち落とせ！」

全機が同時に旋回し、ミサイルロック。

『やるぞ！』

発射。

残ったミサイル十六発を六機のTU-160に全部発射した。
ほぼ同時にすべてのミサイルが着弾し、巨大な爆発を上げて降下していく。

積載された爆弾が誘爆し、太陽のように輝いた。

『ブラックジャックを撃墜！』

AWACSのオペレーターの声はともうれしそうだった。

『ターゲットの破壊を確認した』

『我々の勝利だ！』

『やったぞ！』

地上部隊が歓声を上げる。

『……爆撃機を撃墜した戦闘機が、編隊を作って上空を通過していきます。放送を検閲していた将校も去りました。今、私たちは声を大にして言えます——』

ジョシユアは握りこぶしを作った。

『——「勝利した」と。……共同放送、アンドレイ・ペチエルスキーがお伝えしました』

「都市は開放された」

安堵に、中佐はうつすらと涙を浮かべた。

パイロットの中には、鼻水を流しながら泣いている者もいる。トレイルも、笑みを浮かべているに違いない……。

「この作戦の成功は戦略的意味のみならず、象徴的な意味が大きい。深夜に関わらず、今、街は歓声に包まれている」

うれしいことに、報道管制が解除されたサンサルバシオンで、リボンのエンブレムの機体と、女神のエンブレムの機体が表紙の雑誌が発売された。

英雄と賞されたメビウス1は、それを見て、まんざらでもない笑みを浮かべ、ジョシユアに、ぐっと親指を立て、グッドラックと言だけ放った。

……そうだ、ここで立ち止まるわけにはいかない。

我々の戦いの終結は近いが、まだ終わってはいない。

我々は、戦い続ける。

ウイスキー回廊の戦車戦

「……なんて数の戦車だ」

「ここを抜けたら首都ファーバンティだ。敵だって必死だよ」

「しかし暑いな？ 水はないのか？」

「あと十分で進軍する。耐えろ」

「メビウス1とワルクューレーは来るのかな？」

「さあな。ただ、二機が来てくれるなら、俺たちは間違いなく首都に行ける」

「勲章はいらない、ほしいのはママのコーンブレッドだ」

「喉が渴いているときに、よくそんなことを……ジャック、時間だ」

「クーラーを全開にしてくれ」

「タンゴ3よりH.Q、予定通り前進する。上空援護に期待する」

『H.Qより全タンゴへ。戦闘中に空を見るなよ。リボンと女神の加護があらんことを』

「了解。全軍、ウイスキー回廊を突き進むぞ！」

「スカイアイより作戦中の全機へ。この大規模な作戦における我々の任務は、近接航空支援だ。可能な限り多くの敵を破壊し、我が軍の前身を助ける！」

ランバート山脈とアンバー山脈に挟まれた細長い平野。

いわゆるウイスキー回路の出口を最終防衛線とし、敵は大戦車部隊を布陣した。数において圧倒的に不利な状況にもかかわらず、友軍はエルジアのファーバンティへ進軍するため、この敵に正面から工芸しなくてはならない。

この作戦における戦闘被害は、戦力差の二乗に比例する。勝利するには、航空支援の奇跡的な成果が必要だと言われた。

奇跡的な成果とは、一体どのようなものなのかと聞きたかったが、誰もがメビウス1を見た。

奇跡。

メビウス1なら、その奇跡を簡単に成し遂げてしまつかもしれない。

「敵戦車を確認！ 航空爆撃を要請！ 二〇一、一〇〇、三両の戦車だ。レーザーマーカーを用意！」

「オメガ4、了解。レーザーマーカーを確認、精密爆撃する。西から接近、注意」

「西からオメガが低空爆撃！」

タンゴ3は複数のAPCに乗り、すぐ横を走る戦車に付随し、ゴールドバーグレータ付近を走っていた。

隕石のおかげで起伏の多い場所で、敵戦車が百メートル先にいて初めてその存在を知ること何度もある。味方からの情報が得られないため、味方は偵察部隊を先行させて進むしかない。

「スーパ―6からタンゴ3、敵の戦闘ヘリと対空戦車を確認。これ以上は進めない、目視で敵位置を確認せよ」

「目視で？ ふざけやがって見つけたときには撃たれている」

偵察ヘリのスーパ―6はタンゴ3の上空で侵攻方向の敵情を伝達していたのだが、味方のガンシップと距離が離れているため、これ以上、敵への接近は許されなかった。

「ジャック！ オメガの爆撃はまだか？」

「今確認中！ オメガが接近……着弾！」

「前進！ 戦車隊は停止、戦闘ヘリを破壊しろ！」

戦車を前に出し、タンゴ3はAPCから降車し、銃を構えて走り出す。

「クレーターの水を全部飲みたい」

「水風船になって敵陣に突っ込め。タンゴ3からタンゴ7、こちらの位置が確認できるか？」

「ネガティブ！ 戦車が多すぎる、精密爆撃を要請！」

「ワルキューレ1とメビウス1が爆撃する」

十秒後、タンゴ7がいる位置の方向で巨大な爆発が起き、タンゴ7が声を上げた。

「すごい、メビウス1が俺たちの上にいるぞ」

「こちらタンゴ。散会して扇状に敵を受ける」

「敵戦闘機！」

「上空の敵は航空戦力に任せろ。撃て！」

タンゴ3はタンゴ7と合流するために前進するも、敵の応戦が激しい。

戦車と距離を置き、待ち伏せる敵の位置もわからないまま走った。ジャック・ユークリット少尉は、小隊を率いて丘を下り、単眼鏡で向こうを見る。

上空の爆発音、左右の銃撃音に気を取られながらも、一歩ずつ先を確認しないと死ぬことになる。

「……ああ、まずい！」

戦闘ヘリが突然、姿を表した。

丘に戻るタンゴ3。

大口径弾の着弾に恐怖し、叫びながら隠れる。

「だめだ、釘付けた。航空支援を待つしかない」

「フェインズマン！ 航空支援、戦闘ヘリだ」

「タンゴ5よりHQ。航空支援、四マイル前方にエルジア軍三両、いや四両だ！」

「味方の戦闘機？ 上にメビウス1が来ているぞ。あれだ！」

戦闘ヘリが上空を高速で飛行していき、反転。
味方の戦車が丸見えだ。

「敵兵だ！ 回り込め、捕捉されたぞ！」

エルジア兵がその隙に丘の下から撃ってきた。
要撃態勢で待ち構え、丘の上から撃つ。

「撃て、撃て！」

「ワルキューレ1からタンゴ3。支援要請を確認、戦闘ヘリ、三百ヤード先をピンポイント爆撃」

「方位を間違うな。頼むぞ、女神さま！」

「了解だ」

次の瞬間、フェインズマンは空を見ていた。
ワルキューレの機体を見た。

一瞬、それがメビウス1かと思った。

F-22の底部からSDBが放たれ、敵兵のいた場所を寸分狂いなく爆撃する。

高速で旋回し、戦闘ヘリを機銃で破壊する。
上空の敵機がワルキューレ1に狙いをつけ、追いまわすも、自分

たちも知らないすごいマニユーバで出し抜き、ミサイルを発射して撃墜。

太陽に光る機体は、美しかった。

そんな風に、呑気に空を見ていた理由が、少ししてから分かった。

「……ズマン！ フェインズマン！！」

「……どうした！？」

ジャックがフェインズマンの肩を揺さぶる。

敵の砲弾が、ロッシュ・フェインズマン大尉のすぐに近くに着弾し、爆発。

爆風で吹き飛ばされ、仰向けになって倒れていた。
耳鳴りがひどく、視界もぼけている。

「怪我は？」

「怪我？ 怪我……」

手で体のあちこちを触り、痛みがないことを確かめる。

「俺は無事か？」

自分の体が心配だった。

「ははははっ、助かったな！」

ばしんとヘルメットを叩き、ジャックは姿勢を低くして射撃をする。

『タンゴ3、進軍方向の敵兵が後退を始めた』

味方の戦闘機がタンゴを支援。
集中的に爆撃し、進軍方向をクリアにする。

「前進だ。タンゴ7、そちらはどうだ？」

「こちら問題はない！ APCと戦車がやられた、歩くしかない！」

「オスカー1より全車、損害を報告しろ」

タンゴ3が前進を始め、タンゴ7、5、それにオスカー戦車部隊がウイスキー回廊を進む。

そのとき、聞きなれたあの嫌な音が聞こえた。

「砲撃だ！」

くそつ、また隠れるのか。

断続的な砲撃を受け、さらに、また戦闘ヘリが戦車とともに側面から現れた。

地形が地形だけに、目視で確認するには接近するしかない。

スパー6が撤退し、情報が戦闘機のパイロットからとなると、随時と、とは言えない。

「目標、北西、戦闘ヘリが一機に戦車が二両！ 航空要請！」

「こちらタンゴ5！ 地雷原に突入した。爆撃ポイントは三二〇、

〇九二、東からに西へと帯状に頼む！」

「タンゴ5、プリーストが爆撃する。西からだ」

「タンゴ3、メビウス1が支援する」

メビウス1。

空の上の英雄。

『ワルキューレ1よりタンゴ7。三マイル先に対空兵器と装甲車、歩兵が二十。対空兵器を破壊してくれ、支援できない』

『タンゴ7了解！ オスカーを下がらせろ、敵戦車隊がいる。ジャベリオンを持ってこい』

ワルキューレ1。

空の上の女神。

英雄と女神が守られていながら、自分たちは敵の攻撃に怯えて隠れている。

空で戦うパイロットは背中を向けた瞬間に殺されるというのに……。

『タンゴ5は前進する。タンゴ3、4、7、9、10、今どこだ？』

『全部隊、クレーターを過ぎた地点を横一列に縦断中！』

『敵の野営地が見えた！ もうすぐだぞ！』

もう一つの丘を越えたとき、煙を上げている工場のような場所が見えた。

テント、歩兵、戦車、高射砲に対空ミサイル……地上部隊の根性を見せるときだ。

「レンジャーがこれくらいでへこたれていられない！ ジャック、部隊を率いて突撃だ！」

「了解！ タンゴ3、レンジャー26を率いて突撃！」

『スカイアイより全部隊。偵察部隊が敵の撤退を確認。今がチャンスだ』

『オメガは航空戦力を叩く』

『ヴァイパー、レイピア、プリーストは地上部隊の支援を継続。戦車を破壊しろ』

「うおおおおおおー！！」

タンゴ3、5、7が突撃する。

戦車の砲弾が、まるで耳元をすり抜けていったようだった。それほどにまで砲弾が近くに感じたわけだが、そんな近くを砲弾が飛んでいったのなら、風圧で死んでいる。

上空の味方が航空支援。

ありったけの爆弾を落として、地上が火の海になった。

『高射砲にロケット弾を打ちこめ！』

『アレックス、味方と同じ方向に撃て！』

「遮蔽物が少ないぞ、全方位に注意！」

フェインズマンは丘を下り、すぐそこに見える高射砲にグレネードを投げつけ、敵兵を一掃。ジャックと共に接近し、高射砲にC4を設置して爆破する。

『対空兵器の無力化を確認。爆撃ポイントを指示してくれ』

「敵を追うつもりはないが、戦車が二両、しつこく撃ってくる。タンゴ5が見えるが、前進できないでいる。タンゴ7、3は問題ない。タンゴ5を支援してくれ」

『了解だ。敵の戦力はほとんどない、こんなところで英雄になるなよ』

「英雄？ 了解だ」

スカイアイの言った意味を理解したのは、すこし後だった。

『こちらスカイアイ、敵が後退している！』

タンゴとオスカーがさらに戦線を押し上げ、敵の最終防衛線を突破した。

『すべての友軍が前進を開始したようだ。我々の仕事は終わった、全機帰還せよ』

上空の味方機が撤退していく。

もう支援がなくなり、その必要もなくなり、後方部隊がAPCを失って歩いていると無線が入った。

三十キロ近くあるこのウイスキー回廊を歩くとは、自分たちはラッキーだとジャックが言った。

一人の部下が、周囲一帯を制圧したと報告し、敬礼した。

これが間違いだった。

フェイズマンは以前、戦争映画で、部下が上官に敬礼し、敵のスナイパーが上官を確認して狙撃されて戦死したという場面を思い出した。

制圧したといっても、完全ではない。

まだ敵が残っている。

兜の緒を締めたとき、チュンと、またもや聞きなれた音に体が反応し、ジャックの服を引っ張って影に隠れた。

「スナイパー!!」

跳弾の音である。

「見えたか？」

「いや」

「こちらタンゴ3。オスカー、スナイパーがいる」

『狙撃位置は確認できたか？』

「北だ……」

一人やられた。

撃たれた部下は、自分のすぐに隣に立っていた。
頭に一発、即死だった。

『一斉砲撃する』

戦車隊が砲身を北に向け、一斉砲撃。
数十発の砲弾が着弾し、土煙を上げている。

「スーパー6、狙撃兵がいる。北の着弾地点、確認してくれ」
『移動中……着弾地点を確認したが、人影はない。吹き飛んだ』

英雄になるなよ。

スカイアイの言葉。

死んで英雄になる奴を称えるのは、無慈悲な上官だけだ。
はっと息をもらし、フェインズマンは腰を落とし、死んだ部下を
見た。

少なくとも、彼は自分を守ってくれた、自分だけの英雄だと見る
ことができた。

メビウス1は英雄だ、ワルキューレ1も英雄だ。
なら、死んだ英雄とは、なんだ？

ファアーバンティ包囲戦

「エルジア首都ファアーバンティの沿岸部埋め立て地の地下に、敵の本営総司令部がある。我が軍はここを速やかに制圧し、戦争を終わらせる」

二〇〇五年、九月一九日。

奇しくもスカイアイに搭乗するオペレーターの誕生日に、我々はファアーバンティを制圧する。

作戦の決行日が決まったときのオペレーターの顔は、今まで見たこともないほどの笑顔だったが、誰かの不吉な一言、「失敗したら不運な日だ」にテンションは一気に下がった。パイロットの中にもそんな発言をしたやつは空の上で撃ち落としてやると言い出す始末になったのだが、それらを吹き飛ばす出来事が起きた。

X-02の実戦配備。

ジョシユア、少佐、それに搭乗者となるメビウス以外で、現状でX-02を知る者はおらず、艦載機として扱われ、ノーチラスからロスカナスに飛んできたときは、管制官も目を丸くした。

異質な形状をしたX-02、ジョシユアが搭乗した次の日からテストパイロットによって何度も試験を繰り返し、最終的な形となつて、メビウスのエンブレムを尾翼に描いた。

英雄が聖剣を手にした瞬間だった。

「地上軍が東部のシルバーブリッジと南部の水没した都市部から突入を計るので、諸君は周辺の敵を攻撃し、味方を支援せよ。また、北からは敵の戦車部隊が接近しつつある。敵の援軍と埋め立て地内の勢力が合流するのを阻むため、北部にかかるジョンソン記念橋を破壊する必要がある。最終兵器メガリス開発中の情報もあり、万が一を考え、敵に最後の手段を使う隙を与えてはならない」

メガリスの情報分析は困難を極めていた。

その形状が砲台なのかミサイルサイロなのかというのも、正直なところ曖昧だ。

ここで久しぶりにヘイローチームと再会した。

今までロスカナスの防衛部隊、及びエルジア軍の残党部隊の排除という緻密で小さな作戦をこなしてきたらしい。

久しぶりに仲間にも再会できてうれしいと、ヘイローの隊長は言った。

オメガ11のコードを持つグレンは、戦争が終わるかもしれない作戦の前日に、まだ本を読んでいた。

オメガ11のTACネームは呪われている、全員が撃墜していると以前から言われているが、グレンがオメガ11のコードを持ってからは、そんな噂も吹き飛んだ。

仲間が集まるといゝんな会話をする。

楽しい会話も、悲しい会話も、感情を共有し、みなで分かち合う。これほどにまで結束された者たちが負けるはずがない。

「エルジアの首都を落とす。戦争を終わらせる」

「終戦だ、俺たちの戦いを終わらせる」

「……行くぞ？」

「ああ！」

パイロット全員が大きな輪を作り、円陣を組む。

そこには、つらそうに立ち上がった中佐と、メビウス1もいる。

「ISAFに勝利を！」

「おおー！！」

二〇〇五年九月十九日。

『戦争の結末は君たちにかかっている。全機生き残れ！ 幸運を祈る！ メビウス1、今日は俺の誕生日だ。プレゼントには終戦記念日を頼む！』

やはりスカイアイのオペレーターは言ってきた。

誰かの誕生日に限らず、今日が終戦記念日。

誰もの記憶に残る、偉大な日になる。

『本当に最後にするぞ。地上部隊を援護、首都ファーンティを制圧する！』

『了解』

『戦車、ヘリ、戦艦、全部いる』

『北からさらに敵戦車部隊』

『地上部隊を支援する。水没した南部には潜水艦、戦艦がいる、気を抜くな』

『敵航空戦闘機を確認！ 行けえ！』

『了解！』

これをISAF最後の作戦とする。

全員がその意思を固め、今まで地獄を走りぬいてきた。

血と汗を流し、死を恐れぬ戦士となり、戦ってきた。

『手柄を立てるなら今日しかないかもしれない』

『こっちの飛行機はワルキューレやメビウス1だけじゃない』

各編隊、散会。

ワルキューレがレイカークレーターのある市街地水没地区に飛ぶ。

『タンゴ1、正面を警戒せよ。上空は戦闘機にまかせろ』

『敵の戦闘機！ 敵戦車の砲撃を確認！』

『航空支援！』

水没した地区の浅瀬に潜水艦を確認した。

支援に向かった戦闘機が多目標照準ミサイルをセットするも、荒廃したビル群の間には、攻撃できない。

上昇し、ターンして垂直降下をするワルキューレ1。

他機がワルキューレ1の援護をする。

「潜水艦の大型対地ミサイルは厄介だ、潰す」

ミサイルを発射。

垂直発射され、加速し、潜水艦に命中。

リーダーからロスト。

ワルキューレ1は旋回し、味方機と一緒に戦艦と潜水艦の破壊に徹底する。

戦艦は高射砲を最大にしてワルキューレ1を迎え撃つ。が、ワルキューレ1のF-22Aは低空から進入し、攻撃を回避して真横から戦艦にミサイルを発射。

一キロと比較的近距離からのミサイルを迎撃できない戦艦は、腹に大きな傷を受け、轟沈していく。

大陸に接近しすぎた潜水艦は、逃げようにも潜水不可能。ミサイル発射ハッチを開けばすぐに狙われるとわかっていながら、大型ミサイルの発射準備を進める。

『ミサイルを発射させるな！ 地上部隊を狙っているぞ！』

『ビル群を交わして上から狙え！ 対空兵器に注意！』

ワルキューレ1が二隻目の潜水艦を破壊し、大陸部で戦う地上部隊を援護するためにシルバードリッジに機首を向けた。

敵航空機の数、種類は多い。味方航空機の援護もあるし、メビウ

ス1が今、どこを飛んでいるのかも不安要素の一つだ。

何よりも、敵が背水の陣で挑んでいるため、戦力のすべてがここにいるのだ。

敵の攻撃に恐怖しないわけがない。

『ブラボー5と連絡途絶！』

上陸し、先行し過ぎたブラボー5が孤立した。

シルバーブリッジ目前で敵戦車に足止めを食らっている。

『032の方向にブラボー5！ シルバーブリッジの敵戦車を破壊してくれ！』

『こちらスカイアイ、シルバーブリッジに敵戦車四、対空兵器二、戦艦一を確認。ワルキューレ1、方位一二〇。ただちに攻撃しろ』

『プリースト、ヴァイパーは戦艦を破壊。タンゴ5に通達、SAMを破壊できないか？』

『ネガティブ！ 戦車が先だ。こちらの戦力が削れていくばかりだ！』

『タンゴ2から航空部隊！ ブラボー5を援護してシルバーブリッジを確保する！』

タンゴ5がシルバーブリッジの側面に回り、対戦車ミサイルを担いで橋の下に陣取る戦車を狙う。

『こちらプリースト、戦艦を捉えた』

『ヴァイパー2よりワルキューレ1。上空の敵機がしつこい！ なんとかしてくれ！』

ワルキューレ1は対地攻撃モードで急加速し、戦車に徹甲弾の雨を降らせる。

その後、ズーム上昇し、上空の敵F-22A、自身と同じ機体を照準。

短距離ミサイルをセットし、発射。

プリーストが戦艦に対して攻撃アプローチ。

援護するためにヴァイパーと共にプリーストの後方に回り、敵戦闘機のせん滅に掛る。

ヘイローがタンゴ13とブラボー5の間で双方に攻撃する三台の戦車を確認し、対地ミサイルを発射し、進路を確保。
地上部隊が前進する。

『戦艦からの攻撃をとめてくれ！』

シルバーブリッジの下を流れる川、航行ぎりぎり水位のところまで戦艦が上り、砲弾を断続的に発射する。

砲弾を防ぐ術のない地上部隊は身を低くし、動きが取れない。

『こちらタンゴ13！　ワルキューレ1が破壊した戦車で敵がこちらを捉えられなくなった、ブラボー5と共に前進する！』

『早く戦艦を！』

『タンゴ2も前進する！　タンゴ7、2、オスカー、状況を報告しろ！』

シルバーブリッジからさほど離れていない、ほぼ反対側にいるタンゴ7は、上空の味方機を支援するためにSAMの破壊に取りかかり、タンゴ2は水没地区から上陸し、ジョンソン橋に進路を向ける。北からの戦車隊はジョンソン橋に向かっているが、その空域はメビウス1とオメガ、レイピアがいる。猛者のそろった最高のパイロットたちだ。心配することはない。

ワルキューレ1、ジョシユアが心配なのは、自分たちに対して、メビウス1からの援護が期待できないことだ。

プリーストが戦艦の沈黙に成功し、ワルキューレ1は九機でシルバーブリッジの戦車を破壊。

タンゴ7が対空兵器を破壊したおかげで、地上からの攻撃に心配することはなかった。

『こちらタンゴ4、埋立地南部に上陸。司令部の制圧に向かう』

『こちらブラボー13。シルバーブリッジの敵防衛陣地を制圧！』

『司令部の制圧に向かう』

『……最高司令官はまだ脱出していないのか？』

ISAFの航空機が多く見える。

ワルキューレ1はシラミ潰しのように敵戦闘機、地上兵器を破壊し、一旦、補給に戻る。

メビウス1がすでに給油、再武装して飛び立っていったと聞いたとき、恐ろしい勢いでメビウス1が敵をせん滅しているのがわかった。

ジョンソン橋の陥落は時間の問題。地上部隊のほとんどが司令部を目指している。

補給を終えて飛び立ち、スカイアイの情報を得て司令部に上空に向かう。

最後の砦となった司令部に、敵の航空機がうようよと残っていた。ドッグファイトとはいかないが、ワルキューレ1は敵機に張り付いた。

『ご婦人とご息女を迎えにシエルターに戻った、時間を稼げ』

『こちらタンゴ4、あー、ヘリが飛び立ったぞ！』

『敵軍の幹部を乗せたヘリだ！』

『各機、ヘリを撃ち落とせ！ 逃がすな！』

敵を撃墜し、ワルキューレ1は転身してヘリを狙う。同じく、メ

ビウス1のX-02もミサイルをセットし、ヘリを撃墜する。

数機のヘリが逃げていくが、いずれ味方機が撃ち落とす。

上空の敵戦闘機と戦いも終わりだ。

最後の一発が発射され、命中、爆発する。

上空はクリア、何ひとつない。

『司令部を制圧した!』

その声に、あれもが安堵した。

『終わったのか?』

『……いいや、まだだ』

スカイアイの嫌に落ち着いた声。

『五つの機影が接近中。黄色中隊だ!』

やはり残っていた。

今度こそ終わりにしてやる。

フルキュレー1とメビウス1が同じ軌道を描いてターンし、黄色中隊を迎え撃つ。

『彼らはまるで、国の最後を見届けに来たようだな。決着をつけよう。戦争を終わらせくれ!』

『メビウス1、援護する。一緒に戦えて、光栄だ』

メビウス1と並行飛行し、キャノピー越しにメビウス1を見る。

メビウス1は、いつものようにぐつと親指を立てて、敬礼し、グッドラックと、心で言った。

我々二人にとっては、今からが本番だ。

新型可変戦闘機X-02は可変し、速度を上げる。

それに続くワルキューレ1のF-22。

メビウスとワルキューレは猛然と黄色中隊に立ち向かう。

『一機で狙うな、五機で仕留める』

『リボンめ、女神の加護なんて当てにならないぞ』

黄色中隊が散会し、高度二〇〇〇フィートでのドッグファイト。敵の数は多く、パイロットも優秀だ。

特に、13の文字が記されたターミネーターは危険すぎる。あいつは落とさない限り、ISAF空軍に勝ち目はない。

「13が危険だ、メビウス1！」

13以外の黄色中隊は、決して手をこまねくような相手ではなかった。

ISAF同様に、補充要員だというのがすぐにわかるほど。

メビウス1が一機のSu-37に張り付く。

主翼先端翼を展開し、非常に高い運動性を発揮、コブラなどではない、振り子のようなマニューバでSu-37にバルカン攻撃。ワルキューレ1は、自分が囷になるように、メビウス1を援護しながら飛ぶ。

X-02から高機動ハイマニューバミサイルが発射される。

敵機は速度を上げ、高度を落としたが、回避できない。

ミサイルは尾翼を貫通し、コクピットの真上で爆発したかのように見えた。

破片が散って、きらきらと、いつものように、光って落ちていく。

『一機やられた』

『リボンだ、リボンを狙え』

しつこく付きまとっていた二機のS u - 3 7が轉身し、上昇して高度を得たX - 0 2の背後につく。残りの二機がワルキューレ1をロックしながらも、メビウス1への攻撃の好機をうかがう。

X - 0 2に張り付く二機の黄色中隊に、メビウス1は、S u - 3 7が得意とするコブラをやって見せた。

『なんだと？』

空中で静止状態と同じになったX - 0 2だが、そこからの復帰は早く、高い出力を誇るエンジンは火を噴き、中距離ミサイル、ダークファイアをセット、リリースしてさらに上昇し、ワルキューレ1を追う黄色中隊……イエロー13と2を狙う。

ダークファイアは二機のS u - 3 7を破壊する。

『残り二機だ！』

ワルキューレ1はロックオンされてもお構いなく、速度を上げ、メビウス1に攻撃の好機を与える。

F - 2 2よりも明らかに性能の高いX - 0 2の方が黄色中隊に対抗できるし、そこに搭載されているダークファイアと高機動ミサイルの性能もまた桁違いに良い。

『背中にリボンが！』

『イエロー2、ブレイク、回避しろ』

X - 0 2は、コードネームワイバーンの通り、ラプターとは逸した加速性、運動性でS u - 3 7を射程に収め、バルカン攻撃。

急G上昇しようとしたS u - 3 7の主翼が吹き飛び、風にもまれて海に墜落した。

「残るは13ただ一機だ」

が、イエロー13の操縦技術は、本物だ。

機体の性能を最大限、いや、それ以上に引き出し、新型機のX-02から逃れ、旋回し、背中につく。

すかさずワルキューレ1が援護に入るも、イエロー13はX-02にミサイルを発射したあとに追撃インターセプトをブレイクし、降下。速度を得てワルキューレ1から逃げる。

メビウス1はチャフを全開で散布し、回避。遠くでミサイルの爆発を確認し、ワルキューレ1と共にイエロー13を狙う。

X-02の燃料は決して多くない。それを言ったら、黄色中隊に遠路遙々、首都にやってきたわけだから、疲れて落ちてしまうのは、どの戦闘機も同じだ。

しかし、加減速を繰り返し、出力で上昇を図るイエロー13には焦りが見えると同時に、ここでの死を覚悟した決意のようなものを感じた。

敵ながら、その決意には感服するも、戦争は、生きるか死ぬかのルール以外に、なにも存在しない。

それが空での戦いなら、負傷などは存在しない、デッドオアアライヴ生きるか死ぬかの両極端。

牙をむき出しにして迫る翼竜。

Su-37は逃げられない。

ワルキューレ1がバレルロールを描いて飛ぶSu-37を中距離からロックし、ミサイルを発射。

警告音に、Su-37はブレイクして上昇。

アフターバーナー全開で逃げるも、X-02が高機動ミサイルを二発同時発射。

終わったと、ジョシユアは、スティックを握る手を緩めた。

チャフ、フレアを放出し、弧を描いて飛ぶSu-37が太陽とか

ぶさったとき、三発のミサイルが一斉に命中し、爆発した。

これほど美しいものを、ジョシユアは初めて見た。

戦いの中で、本物の戦士に出会い、憎しみと怒りを向け、敬意を払い、憧れを持った相手が今、四散し、パイロットとしての使命を全うした。

不思議と、ジョシユアはイエロー１３に、敬礼をしていた。

『撃墜！ やったぞ、レーダーから最後の機影が消えた！』

『こちらタンゴ８、エルジア軍司令部を完全制圧』

『五機はメビウス１が撃墜した。制空権は完全に掌握』

ほっと胸を撫で下ろし、メビウス１と並行飛行しながら、戦場となった首都ファールバンティを眺める。

『生き残ったな、メビウス１、ワルキューレ１』

『……ああ、本当に、生き残れたものだ』

『エルジア軍兵士に次ぐ。戦闘を停止し、次の場所へ投降せよ。中央公園テニスコート、国立図書館噴水広場……』

地上部隊が司令部の辺りをエルジア軍兵士の搜索をしていると、

「おい、マーチン」

『どうした？』

「こちらパトロール隊。逃げ遅れたヘリの中で、女性と女の子を保護した。将校らしい男の死体もある。妙にでかい勲章をつけているぞ。一応、作戦本部に連絡してくれ」

『了解、アウト』

「九月一九日……ある者の誕生日らしい」

ブリーフィングルームで、中佐の言葉に、顔を手で覆い、笑いを堪えながら頷くパイロットたち。

「一二〇〇時、エルジアは、ISAFの投降勧告を受託した。数え切れない屍の上に築かれた勝利である」

中佐は、まだ痛む足、というより、過密スケジュールでの仕事で、むしろ悪化してしまった肩をさすりながら立ち上がる。

それに習い、パイロットも立ち上がり。

「死を持って戦争を終わらせてくれた戦士たちへ、敬礼」

終わった。

戦争が終わった。

なにもない青空を見上げなら、やっと旨い酒が飲める。

世界が平和になり、戦いという日常から解放される。

みんながそれを信じ、疑いもしなかったのに、悲劇は、突如として姿を現すものだった……。

メガリス

戦争が終わった。

平和が訪れ、ISAFのみんなが安堵に包み込まれ、最高の至福を楽しむと、格納庫で酒に溺れた。

もちろん、国民の歓喜はそれ以上だった。

戦争が終わった、平和になった。今や世界には何一つ不安となる要素はない。

ファールバンティで戦死したISAFパイロットは七人。上層部はたったの七人だと気にもかけなかった。

ジョシユアは、名前さえ知らない彼らだったが、立派に戦ったことは誰よりも理解している。

ジョシユアはお祭りのように騒いでいる連中には参加しなかった——正確には、参加できなかった。

ノーチラスの最機密区画の情報管理室の中で、中佐と共にある情報に愕然としていた。

空母クルーノスに付随する、ISAFでも最高峰の感度を誇る傍受艦アルストロメリアが、エルジア軍の暗号化された情報を傍受し、解析を開始した。

終戦協定に印を押した以上、エルジアとISAFの間での戦争行為はすべて犯罪となる。それなのに、エルジアではまだ行動を起こしているというのは、これは異常だ。

まだ戦争は終わっていないという知らせでもあった。

さらに言えば、傍受した情報を解析するのは困難だったが、あるワードが判明した瞬間、情報解析員はすぐに最高司令官を呼び、中佐を呼び、各方面の司令官をノーチラスの閉鎖空間に閉じ込めた。

メガリスのワードが発見され、その次に、始動のワードが解き明かされた。

メガリスが起動する。

司令部を制圧した地上部隊がメガリスの簡易見取図を発見し、傍受した情報と照らし合わせた結果……、

「なんてことだ、隕石を降らせるとは……」

信じがたいことに、メガリスは地上からミサイルを発射し、隕石を人工的に任意の場所に落とすのできる最終兵器であった。

先の偵察機がメガリスの情報を入手したとき、赤い光が見えたといったが、それが誘導レーザーだったと誰がわかっただろうか。

外部にいくらミサイルを発射しても破壊はできない。内部に侵入して攻撃するしかない。

だが、地上部隊だけでは無理だ。

航空部隊だけでも無理だ。

その両方が必要となる。

ミサイル搬入路の溝の奥にある三つのジェネレーターを破壊する必要があるのだが、搬入路の隔壁を上げるためには地上部隊の支援が絶対だ。

両者ともに死地へと飛び込むことになる。

……今までは違う、世界の破壊を防ぐための作戦となる。

中佐は、この事実をどうパイロットに伝えればいいのか、悩んだ。戦争が終わったと宣言しておいて、まだ続く。

終戦協定が結ばれたから戦いが終わったとは誰も思っていないだろうが、歓喜しているパイロットたちの、メガリス破壊の作戦を伝え、命令するのは酷だ。

暗い情報管理室で、中佐とジョシユアはしばらく沈黙した。

作戦はすぐに立案、決行される。

九月二六日が、最終決戦だ。

メガリスは、巨大で、遺跡のような形状をしている。

三つの搬入路があり、中央部には巨大なミサイルが五発もある。

そのうちのひとつ、ミサイルサイロの大型ミサイルの破壊が目的

だ。

地上部隊がこれを破壊することは難しい。工作部隊を送り込んで、阻止されるのが見えている。なら航空部隊で破壊するしかないが、搬入路は狭く、戦闘機で飛行するには相当な技術が必要だ。人が狭いパイプの中を、肩を触れずに通らなくてはならないように、戦闘機は翼をぶつけないように注意しなくてはならない。

困難極まりない。

だが、作戦の実行は決定だ。

中佐は、作戦に参加するすべての機体のエンブレムを、メビウスの輪に変えた。

その行為を見ていたパイロットに、緊張が走り、作戦は、自然とジョシユアの口から洩れてしまった。

……ブリーフィングの時間だ。

「エルジア軍の一部の将校が開発中だった最終兵器メガリスを占拠した」

メガリスという言葉は、パイロットの中でも噂になっていた。深く知る人間は、中佐やジョシユアくらいしかない、という程度が、今になってその単語が出てくるということは、先の終戦記念日とスカイアイのオペレーターの誕生会が台無しになるとは、予想できた。

「メガリスはロケット発射施設であり、いまだ軌道上に残る小惑星のかけらを人為的に落下させる兵器である」

ディスプレイに映し出されるメガリス。

「大きい……」

恐怖に対する声なのか、歓声なのか、次にはみな沈黙を維持する。

「この恐るべき要塞施設を破壊するには内側からダメージを与えるほかない。ミサイル搬入路の溝の奥にある三つのジェネレーターを破壊すれば、中央の廃熱口が開く。そこから内部に進入し、中央サイロにある大型ミサイルを破壊しろ。突入後の脱出口は、潜入部隊が開ける」

ベクトルが三つの搬入路に侵入し、ジェネレーターを破壊するシミュレーションが出力される。

しかし、搬入路は狭く、翼がぶつかるといけないというだけで、正確な寸法がわかっていない。

対空兵器はあるのか？ 地上部隊はしっかりと隔壁を開けてくれるのか？ 本当に中央の排熱口が開くのか？ そういった疑問は一人につき三つは出た。第一、自分たちにこれくらいの情報しか伝わらないということは、内部に潜入し、排熱口を開ける指令室へとかう地上部隊だって多くの情報はもらえてないはずだ。目隠しの状態で作戦を進めることになる。

「ジェネレーターの破壊による停電を待つて、サブコントロールームを制圧する手はずだ。彼らを信じて穴蔵に飛び込め」

中佐は脱帽し、

「これが最後の出撃任務となるだろう。必ず生き残れ。戦後には英雄が必要なのだ」

中佐は敬礼し、全員を一瞥したあと、

「出撃」

『メビウス中隊、状況報告せよ』

『こちらメビウス2、スタンバイ』

『メビウス3から7、スタンバイ』

『メビウス8、スタンバイ』

『メビウス9から16、スタンバイ』

『全メビウス、攻撃準備完了。攻撃を開始する。全機、メビウス1に続け！』

『行くぞ！』

全メビウスが攻撃を開始する。

曇天の空から降る隕石は数知れず、メガリスが放つ赤いレーザーが妙な不気味さを放っている。

『あれが、メガリス』

距離は離れているというのに、その巨大さはよくわかる。

オメガ、ヴァイパー、ヘイロー、レイピアなどがすべてメビウス中隊へと転属——形だけではあるが、みんな、メビウスのエンブレムをつけて飛べることに光栄だと話していた。

ジョシユアも、メビウス2の位置につけたことに名誉を感じる。

みんなが、最初で最後のメビウスになる。

すぐ隣には、X-02に搭乗するメビウス1がいる。

今回の戦争の主役が、決着を付けるのだ。それで舞台は幕を閉じる。

目の前にメガリスがある。

地上部隊との連携が第一だが、そのためには、防衛に上がってきた敵機をせん滅、またはそれらから逃げる必要がある。

背中を向けるのは意に反するが、メガリスを破壊するためには好

機を逃さないことが第一条件となる。

航空戦力は侮れないが、敵にはこちらを迎え撃つだけの地上戦力はない。ただ、敵は本当に後がない。メガリス内部の防衛部隊はまさに必死。狭い通路の戦闘に慣れていないブラボーやタンゴは苦戦を強いられる。

味方の航空部隊だって簡単に敵を蹴散らすことはできない。

『敵機を捕捉した』

『敵が見えた！ 敵機視認！』

『大変だ、ジャン・ルイ！ 敵は全部リボン付きだ！』

『メビウス1、エンゲージ』

メビウス1が加速、ダークファイアをセットし、四発を同時発射。続いて、すべてのメビウスが中距離ミサイルを発射して散会する。

『メビウス4、7、9、13、2、交戦』

二十発近いミサイルの直撃を受けたのは、四機。残りは緊急回避し、編隊を崩した。

メビウス中隊とはいえ、元はオメガやレイピアと部隊を構成していたメンバーが集まったわけだから、三機、四機で攻撃編隊を組み、名だけ、張り子と同じ黄色のSu-37に狙いを定め、ダイヴ。

メビウス2はメビウス1と共に黄色の一機を狙う。

イエロー13ほどでないが、ISAFのEース二機を相手にいい動きを見せる。

急減速のちにコブラマニューバを見せ、出し抜こうとするも、メビウス2がいつものように囷となり、掛かったとわかった瞬間にメビウス1のミサイルが黄色の背中をロックしていた。

ミサイルを発射。

『全部が強いわけじゃない!』

超高速でミサイル回避に全力を出すも、ミサイルが命中。

『ああ! ジャン・ルイがやられた!』

『落ち着け、ジーン! 指揮を引き継げ!』

メビウスのエンブレムを持つ機体が黄色を追い詰め、撃墜していく。

『無理だ、よけきれない!』

爆発音が絶え間なく響き続ける。

『フランカーに命中! 落ちろ!』

コモナ諸島を思い出す面々だが、今戦っている相手はそれ以下だ。技術は確かにあるものの……経験を感じない。

まるで士官学校を出たばかりの新米のような動きを見せる。黄色中隊を侮辱しているとは思えない。

『こちらブラボー1。全チームフロア13に到達した』

上陸部隊がメガリス内部に侵入し、攻撃の準備が整った通信を入れる。

『味方航空部隊が到着する前にサブコントロールルームを制圧しろ』

『スカイアイよりメビウス1、2。敵航空部隊を味方に任せ、メガリスのジェネレーターを破壊しろ』

『メビウス1、2。行け!』

メビウス1とメビウス2、空域を脱出するためにスロットルを上げる。

F-22では、X-02の加速度に着いてはいけない。おまけに、敵に狙われた。

『ジーン、深追いをするな！ やつらは本物だ！』

『ケネス、援護してくれ！』

元オメガ11、言メビウス3がイエローを追う。

メビウス1、2を狙うSu-37が緊急回避し、上昇。

メビウス3がF-15を最大出力で飛ばし、格闘モード、レディ、ガン。

トリガーを引き、Su-37を撃墜。

続いてヘイロー5ことメビウス8が短距離ミサイルをセットし、ターゲットインサイト。

『ルイス、右に逃げる！』

『こつちに来た！』

ミサイルを発射し、出力を上げてさらに接近する。

ミサイルはSu-37に命中しなかったが、緊急回避で機速を失ったSu-37はメビウス8のバルカンの餌食となる。

『イエロー11、回避しろ、後方に注意！』

味方が援護し、戦闘空域を脱出したが、戦場に背を向けてしまったことに少しの罪の意識を感じるものの、本当の戦闘はここから始まるのだ。

『ジエネレーターの破壊まで、何としてもここを維持する』

『速いところ頼むぞ！』

『来たぞ、K扉に敵だ！ 入れるな、撃て、撃てえ！』

『アルトマン！ 手榴弾を使い！』

『畜生、火炎放射機だ！』

『撃て、撃て！ 階段のところだ！』

メビウス1とメビウス2がメガリスの全貌を見る。

まさに巨大遺跡。

本来はこの世界を隕石から守るために作られた、ストーンヘンジと同じ役割を担っていたというのに、ストーンヘンジと同じく、敵を倒す兵器へと変わってしまった。

『メビウス1、高度を落とせ。搬入路から侵入しろ』

ブリーフィングルームで侵入経路は把握しているが、高度を落とす、実際に搬入路の入り口を見て愕然とした。

「狭すぎる、行けるのか？」

『メビウス1、右の第一ジエネレーターを。メビウス2は反対側だ。地上部隊が待っている！』

「了解だ」

メビウス1と左右に分かれ、高度、速度を落とし、慎重に搬入路の中に入る。

真横からミサイルが発射されていく。

主翼が震えているように感じる、ふとした瞬間には機体がばらばらになっている可能性だつてある。

優しく、なるべくゆっくりとサイドスティックを操り、狭い搬入路を飛ぶ。

『メビウス1、ジェネレーターを破壊!』

『こちらタンゴ2、通路6に増援をお願いします』

『タンゴ2、エレベーターを閉鎖しろ。回線を切れ!』

『第一ジェネレーターの破壊を確認した!』

続いてメビウス2がジェネレーターを視認する。

巨大な、赤いランプの点灯したジェネレーター。

F-22くらいの大きさがある。

リーダーロックし、ミサイルを発射する。

数秒後、ミサイルが命中し、破壊。

『背後をつかれました! B扉です!』

『通路を断たれた。完全に袋のねずみです』

『こちらチャーリー1、限界です、後退します!』

『まだだ、あきらめるな!』

『チャーリー1、応答しろ! どうした!?』

『……』

『このままじゃ全滅だ!』

『ジェネレーターの破壊はまだか!?』

地上部隊の悲痛の叫びがジョシユアの胸を打つ。

速く搬入路から抜け出し、最後のジェネレーターを破壊したいところだが、こんな狭いところで速度を上げることはできない。

メビウス1と共に搬入路から脱出し、最後のジェネレーターを破壊する役目を、メビウス2が担うこととなった。

地上部隊を信じ、ジェネレーター破壊後、発射口が開くことを願う。

「メビウス1、頼むぞ」

真横から搬入路に飛びこむ。

最後のジェネレーターを確認し、怒りや悲しみを込めて、ミサイルを発射する。

ジョシユアのすべてを込めて撃ち込んだミサイルは、ジェネレーターを破壊した。

『いいぞ、扉が開いた！ 突入、突入！』

『サブコントロールルーム室を制圧しろ！』

『排熱口が開いたぞ！』

メビウス2が搬入路から抜け出し、メビウス1を確認した時には、メビウスは中央サイロのミサイルを破壊するためにあの狭い通路の中に入っていた。

主翼先端が格納されていたために、恐ろしい速度で進入していたのがわかる。

『急げ、すぐに飛行機が突っ込んでくるぞ！』

『今度は俺たちが扉を開けてやる番だ！』

味方機が敵戦闘機を全機撃墜し、メガリスに向かう。
放熱口が開かれ、四発の巨大なミサイルを視認できた。

メビウス1以外がそのミサイルに、残ったミサイルを発射して破壊する。

『パイロットを死なせるな！』

『メビウス1、やれ！』

『行けえ！』

「メビウス1！！！」

直後、ミサイルハッチが開かれ、爆発が起きた。

『目標破壊！ 目標を破壊した！！』

大きな爆発で、メビウス1が脱出しか確認できなかった。
メビウス2はレーダーを肉眼で周囲を確認する。

『いたぞ、レーダーにメビウス1を確認した！』

生きていた。

メビウス1が、ついにやった。

『こちらブラボー1、飛びこんだ飛行機は無事か？』

『ああ、彼は無事だ。今ここから視認している』

接近してきたAWACSのすぐ隣を飛ぶメビウス1。
その隣、メビウス2が飛び、仲間が歓声を上げる。

「俺達は、戦争に勝ったのか？」

ジョシユアは、まだ戦争が続いているという感覚に戸惑った。
安心を得ることができず、スカイアイのオペレーターに問う。

『わからない』

が、オペレーターはため息まじりに言う。
くつと、ジョシユアはつい笑ってしまった。

『誰が勝ったかは、歴史が決めることだ。だが、一つだけ言えることがある』

「なんだ？」

『英雄は、確かに存在する。俺達の目の前に、二人も……』

X-02と、F-22が飛ぶ。

高速で、メガリスの上空を飛び抜け、綺麗な飛行機雲を作った。

英雄はすぐそこに

『心地よく鼻をくすぐったジェット燃料の燃える匂いもかすれ果てた。

「黄色中隊」の野戦滑走路も今ではただの自動車道にすぎない。

私は今、手紙を書いています。

あの昔、懐かしかった戦争の最後にあなたのような好敵手と巡り会えたのは、彼には望外の喜びだったに違いない。せめて、そう信じたいものだ。

それを確かめる相手は、彼を墜としたあなたしか残っていない。

だからこうして、あなたへの手紙を……』

私の元に手紙が届いたのは、エルジアとの戦争が終わってから十数年も後のことだった。

その後、ISAFは解体されて前身の大陸諸国間経済同盟に戻り、エルジアの復興に手をかけた。

ISAFの大半はFCU軍のパイロットと兵士であつたため、彼らは古巣へと戻り、今では戦争をいい思い出だと語っている。

オメガ、ヴァイパー、ヘイロー、プリースト、レイピア、それに忘れることのできないメビウス。

私はあのあと、中佐に——ヴァレンティン大佐に呼び止められ、FCU軍で教官を務めることとなった。本当に戦争が終わり、気の抜けた毎日に刺激を与えてくれる訓練生たちを可愛がった。

私は今でもメガリスでの戦闘を忘れない、というより、自分の機体にメビウスのエンブレムを描かれた事実を、少なからず栄光だと感じている。自分の隣で飛ぶメビウス1には、今でも心底感服させられたし、敬意を払うに等しいほどの、最高のパイロットだった。

メビウス1もまた、大佐に残ってほしいと言われたが、彼はISAFが組織解体されたと同時に軍を辞めた。それ以降、連絡はなか

った。

最後の最後まで、共に酒を飲むことはなかったと、今は後悔している。

何か理由がないと、メビウス1と会うことができなくなり、何年も経ってしまったが、この手紙は、そのきっかけを作ってくれた。

これは、明らかにメビウス1に宛てられたものだ。

メビウス1は今、小さな飛行場でセスナのような小型飛行機のパイロットをしていると、手紙を受け取り、メビウス1の所在を調べたときにわかった。

戦争の英雄が、観光客を乗せて飛ぶとは、正直、笑ってしまった。大佐も、その事実を知ると大声を出して笑った。

私はグレンに、共にメビウス1に会いに行かないかと誘ったが、グレンは、二人だけで会い、英雄同士、昔を語れと断られてしまった。

……英雄という言葉が懐かしい。

私は今、手紙と高いワインとシャンパン。それにチーズを手にして、飛行場にいる。

小さな飛行場で、一日に三機だけの定期便が離着陸する、本当に小さな飛行場だが、どこかアトック飛行場にも似ていると感じた。アトック飛行場でアリスと出会い、結婚して、子供ができて、訓練生に空での歩き方を教える日常に突然を与えてくれたこの手紙。手紙の発信者に感謝する。

ぐつと覚悟を決めるように握りこぶしを作り、飛行場の事務所に入る。

天上の扇風機がゆつくりとくるくる回り、殺伐とした雰囲気の中に明らかに光るものがあつた。

ISAFの名誉勲章。

当時私は、そんなものを受け取っても、何も感じなかったが、今でも飾っている。

訓練生を家に招いたとき、その名誉勲章を見て自分がすごい人だ

と理解し、言うことを聞くようになった訓練生もいるのだから、案外、役に立っている。

それに、あの名誉勲章をもらったのは私だけではない。

もう一人だけいる。

事務所には、一人の男がソファに座り、新聞を読んでいた。

傍らには犬が座っていて、顔を上げてこちらとちらりと見ただけで、すぐにまた横になってしまった。

男は立ち上がり、しばらくの間私の顔を眺め、にこりと笑みを浮かべた。

そして、ぐつと親指を立て、

「久しぶりだ、英雄」と、言った。

私は、すぐに手紙を渡し、持ってきたワインとシャンパンのコルクを抜き、グラスに注いで、かつての戦友と共に一気に飲んだ。

やっと私の願いがかなった瞬間だった。

メビウスと酒を飲み、そして、語る。

かつて私が英雄と呼ばれていたことを、私は忘れていた。

けれども、決して死んでいった仲間を、本当の英雄を忘れることはなかった。

メビウスは、毎日にそれを確認するために、あの勲章を飾っているのだという。

あの勲章は、自分が受け取ったのではなく、英雄が受け取ったものだと言う。

私たちは、本物の英雄を知っている。

空を飛ぶ、ソラノカケラとなった、本物の英雄達を……。

F i n

英雄はすぐそこに（後書き）

2001年の終わりに、私は初めてエースコンバットをプレイした。

エースコンバット04は、私が初めてプレイした“エースコンバット”であった。

PS2のグラフィックは勿論、その操作性やリアリティには驚き、夢中になった。

とは言っても、当時私はPS2を持っていなかった。自転車で三十分掛かる友達の家に行き、エースコンバット04を楽しんだ。友達の親が、いい加減、帰った方が言うまでやっていた。理解ある友人は、私がエースコンバットにハマっていることが面白く、夜の八時まで遊ばせてくれた。二年後に、私はPS2を購入し、他のソフトと一緒にエースコンバット04を購入し、何百時間もプレイした。とても面白いゲームだった。今でもソフトは残っている。傷が多く、ときどきフリーズする厄介者だが、ストーリーは最高だ。私の中でエースコンバットシリーズで最高といえる作品だ。

私にとって、メビウス1はまさ英雄だ。エースコンバットフリーク、というわけではないが、なにか、ゲームで見出せたものがあった。

ただのゲームオタクの、くだらない、小説まがいの文字の羅列だと思う人もいる。おそらく、過半数が思うだろう。それでも、こうやってエースコンバットの世界観を文字として体現できてだけで、自分は立派だと思う。

ゲームの内容を、それも、ゲームをプレイした人しかわからないような文を小説とは言えないかもしれないが、私は、共感できる人がいるだろうと思っていた。それだけで十分だから、前書きはなかった。

メビウス1を主人公として語るのなら簡単だったかもしれないが、

第三者を投入することで、メビウス1がどれほどすごいものか表現したかった。そうすることによって、メビウス1のすごさが伝わると思った。第三者は、私のから見た視点なのだ。メビウス1のプレイヤーは自分自身、コントローラーを持つ者だが、客観視すれば、すさまじい操縦技術を持った者に思える。何十発のミサイルを撃ち、敵を撃墜するのだから（これには笑うしかない）。

だから、このゲームをプレイするときに、自分は英雄だと思える。高揚感を味わうことができる。ゲームとはそういうものだが、それを大いに味わうことができるのが、このゲームの魅力だった。

いつか、“エースコンバット04エルジアンサイド”などという、嘘のゲームがネットで紹介されたとき、私は信じてしまった。急いでネット通販で予約しようと思ったが、そんなものはありもせず、私は落胆した。

メビウス1と共に並ぶ最高のパイロット、黄色の13。

ゲームにのめり込んだのは、この作品だけだった。何度もプレイし、メビウス1と自分を重ねたか。今思えば、それが思春期の思い出なのだが、恥ずかしながら回想することができる。

今は中古で安く購入できるし、初心者プレイヤーでもできるゲームだと思う。

ぜひ、メビウス1を感じてほしいと思う。

読んでいただき、至極の感謝を致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7121j/>

ACE COMBAT 04

2011年4月9日13時09分発行